

「生活資源」からみた
地域における居住者の環境行動に関する研究

篠崎正彦



「生活資源」からみた
地域における居住者の環境行動に関する研究

篠崎正彦

目次

論文の内容の要旨	1
第1章 研究の目的と背景	5
1.1 はじめに	7
1.2 研究の目的	8
1.3 関連既往研究と本研究の位置づけ	9
・地域計画・コミュニティ計画研究	9
・都市社会学	11
・建築計画における環境行動的研究	12
・本研究の位置づけ	13
第2章 調査対象地および調査内容の概要	15
2.1 各調査対象地の位置づけ	17
2.2 調査対象地の概要	18
・根津	18
・千駄木	20
・北青山	22
・木場三好	24
・浜田山	26
・すすき野	28
・光が丘	30
2.3 調査内容	32
・アンケート調査	32
・アンケート票の配布数、回収数および回収率	33
・インタビュー調査	33
・インタビュー対象者の属性	36
2.4 アンケートから見た調査対象地の概要	38
・年齢構成	38
・居住年数	39
・職業	40
・世帯構成	41
・住戸形式	42
第3章 行動圏の広がり和生活資源	43
3.1 生活資源の分布と利用の状況	45
・利用する場所の数	45
・各地域での生活資源の分布	49
・各対象地での利用の状況	51
3.2 地域生活情報を獲得する手段	76
・地域生活情報の内容	76
・地域での生活情報の入手先	79
3.3 地域の探検誘発性	81
・歩くことと生活資源の発見	81
・歩くことを誘発する地域	82

3.4 つき合いの縦断	83
・知人の分布	83
・知人の人数と交際の深さ	86
・子どもをきっかけとしたつき合い	89
・場所を介したつき合い	91
・あっさりとした人間関係	92
3.5 生活資源を獲得するきっかけ	93
・知人に連れられて知ることによる生活資源の獲得	93
・知人の情報から知ることによる生活資源の獲得	94
・地域のメディアからの情報による生活資源の獲得	94
・自らの足を使った生活資源の獲得	95
・習慣で利用し続ける生活資源	95
3.6 生活資源から見た行動範囲の展開	96
3.7 各調査対象地の構造	98
第4章 居住者がつくりあげる地域での生活	101
4.1 居住者が組み立てる地域での生活	103
・地域内に広く生活資源の利用を広げている例	104
・生活資源の連鎖を利用して生活を展開していく例	107
・人間関係は薄いが生活資源を自分なりに位置づけている例	109
4.2 生活資源における他者との関係	112
4.3 生活資源へのアクセスとナビゲーター	113
第5章 まとめ	115
5.1 地域の価値と生活資源	117
5.2 これからの課題	122
参考文献	125
発表論文目録	129
謝辞	131
添付資料	133

論文題目 「生活資源」からみた地域における居住者の環境行動に関する研究

氏名 篠崎 正彦

本研究は、居住者の地域での生活行動を「生活資源」という視点から分析しており、居住者がおくる地域での生活のいくつかの側面を、属性の違う地域間の比較を通して明らかにしている。同時に、居住者の生活の面から地域の生活環境を評価する際に着目すべき点を挙げ、今後の地域計画、コミュニティ計画への適用の可能性を示している。

本論は全4章と添付資料からなる。以下、各章について要旨を述べる。

「第1章 研究の目的と背景」

まず、人々の日常生活と関わりを持つ場所とそれに付随する様々な役割を統合し、住民の生活に資するための環境の総体的な単位として「生活資源」を定義している。「生活資源」とは、人間が日々利用している様々な場所を物的な環境と人間との関係だけでなく、その場所で出会う人や情報、その場所にまつわる歴史や自然条件まで含めた総合的な環境の単位を表すものであり、このような総体的な環境の単位を通して実際の生活の様々な場面で場所の使い方を把握する必要性を指摘している。これまでの地域研究においては、建築計画、都市計画の側からは主に物的な環境の計画に関する研究が行われてきており、社会学の面からは主に対人環境や社会・文化的な環境の計画に関する研究が行われてきた。しかし、環境というのは本来一体としてあるものであり、生活行動の実態を捉えるためにはより総体的に環境を見る必要があることを示している。

「第2章 調査対象地および調査内容の概要」

今回の調査対象とした7つの調査対象地について調査地域、アンケート調査およびインタビュー調査の調査人数、調査内容について概要を述べている。アンケートによって得られたデータより各調査対象地の年齢構成、職業、世帯構成などの社会的な概要について報告している。

「第3章 行動の広がり和生活資源」

第3章では、生活資源個々の利用のあり方と生活資源相互の関係を見ている。

「3.1 生活資源の分布と利用の状況」では生活資源を個々の場所の面から分析している。各地域で利用される生活資源の数は一人当たりで見ると都心から遠ざかるほど多くなることを見出しているが、一方、地域全体でどの程度の場所が生活資源として利用されているかについて見ると、都心に近い地域ほど利用されている場所の総数は多くなっている。このことから都心に近い地域ほど利用する場所に居住者間でばらつ

きがあることを指摘している。また、生活資源の地理的な分布については物的な環境の影響、特に商業施設、広大なオープンスペース、最寄り駅といった要素に影響を受けていることを明らかにしている。さらに各地域ごとにそれぞれの地域の状況を踏まえて個々の生活資源の利用状況と類似する生活資源間の使い分けや利用の集中度について説明している。

「3. 2 情報を獲得する手段」においては生活資源の重要な構成要素の一つである生活情報の入手について述べている。生活情報の入手件数は都心から遠ざかる地域ほど多くなっていることを指摘している。また、情報の入手先については郊外の地域ほど知人や同僚などの身近な情報源から情報を得ている割合が高いことを示している。入手する情報の種類については各地域の社会構成特に子育て期にあたる子どもが多いのかいなかで差が出てくる傾向を指摘している。

「3. 3 地域の探検誘発性」では3. 2で見たような目的的な情報の獲得のほかにも情報を得ている可能性を指摘し、その他日常の生活行動のついでに様々な情報を得ている実例がなりあることを示している。それに伴い、地域によっては居住者が地域内を歩くことを誘発する性質があることを指摘して、この性質が居住者が生活資源を発見するにあたって重要な意味を持っているとしている。

「3. 4 つき合いの様態」では、情報とならび重要な生活資源の構成要素である知人について分析している。つき合いの人数では大規模に開発された住宅団地においてつき合いのある人の人数が多くなっていることを示している。つき合いの程度については、挨拶程度のつき合いが6割以上おり、訪問して上り込むようなつき合いをしているのは知人のうち1割に満たない地域が多い。他の居住者に比較して特につき合いが多い居住者も見られるが、上り込みむようなつき合いのある人の数は総数に比例して増えないことを指摘している。

「3. 5 生活資源を獲得するきっかけ」では普段利用している生活資源をどのように使い始めたかの分析を3. 3. 3. 4の分析とあわせて行っている。今回の調査で得られたデータから、(1)知人による案内、(2)知人からの情報、(3)地域の活字メディアからの情報、(4)自分の足を使った発見の4つのきっかけのパターンが見出された。

「3. 6 生活資源から見た行動範囲の展開」では居住年数とともに生活資源が地域野中にどのように展開していくかを分析している。自宅を中心として、生活資源が展開していく方向性と生活資源の存在する密度の変化の関係から、(1)同心円状、(2)線状、(3)密度上昇、(4)それらの複合した型、(5)近年生活資源の利用に変化が見られない型、(6)最近急速に生活資源の利用を決定した型、に分類している。居住者の行動範囲が広い地域においては(3)か(4)の型がよく見られるほか、(5)や(6)の型は居住年数に左右される傾向があることを説明している。

「3. 7 各調査地域の構造」では以上3章での議論をもとに生活資源の分散度と地域外への接続点となる最寄り駅までの距離の2つの軸で4つに分類した上で、地域内の生活資源の分布と居住者の行動する範囲の関係を模式的に示した。

「第4章 居住者が作り上げる地域での生活」

「4. 1 居住者が組み立てる地域での生活」では、地域への生活資源の展開のあり方に、(1)地域に生活資源の利用を広げている例、(2)生活資源の連鎖を利用して生活を展開している例、(3)人間関係より

も生活資源との関係を頼りに生活を展開している例、の3つの型を抽出し、それぞれについて、数名の居住者のケーススタディを行い、居住者が生活資源を自分の生活の中でどのように位置づけているかを見ていく。その結果、居住者は地域の環境を読み取りながら自らの生活スタイルに合わせて生活資源を生活の中に取り入れ、生活資源のネットワークを地域に張り巡らせ、生活を組み立てていることを示している。

第4章では、3章とは対照的に居住者個々からの生活資源のあり方を見ていく。

「4. 2 生活資源における他者との関係」では、まず、居住者と生活資源の関わり方として、他者との直接的関係と第一義的な機能への重要性という2つの軸から8つの型に分類しており、同じ生活資源であっても居住者の違いや状況の違いによって関わり方が様々であることを明らかにしている。

「4. 3 生活資源のアクセスとナビゲーター」では、居住者、特に新規居住者が地域へ生活資源を展開していくに当たって、生活資源となりうる場所へ居住者を案内してくれる知人(ナビゲーター)とそのようなナビゲーターと出会うことの出来る場所(アクセスポイント)が重要な役割を持っていることを指摘している。さらに、アクセスポイントで新しいナビゲーターに出会うことによって新しいアクセスポイントへと導かれる例を挙げて、アクセスポイントとナビゲーターの連鎖が地域の生活資源を自然に獲得するに当たって有益であることを示している。また、このようなアクセスポイントを通して地域の人間関係へと居住者が結びとった複数の接点でつながっていく、「ネットワーク型居住」の利点を指摘している。

「第5章 まとめ」

「5. 1 地域空間の価値と生活資源」では第3章および第4章で得られた知見をまとめた上で、多様な居住者が異なる価値観、様々な生活スタイルを持って多様な生活を送っているような都市内の地域で、多様な居住者の生活を許容するのに必要と思われる視点を(1)質・量ともに多様な生活資源の存在、(2)生活資源への接近可能性の保障、(3)生活資源との関わり方の居住者自身による調節可能性の3点にまとめている。この3つの面から各地域の持つ生活環境の評価を行い、都心に近い地域では多様な資源が存在するの比へ、郊外では多様性がかなり減少することともに、生活資源の多様性の高い地域では居住者と生活資源の関わり方も変化に富む傾向があることを指摘している。この要因として、郊外では多様な生活資源が存在できるほどの利用者が少ないとともに家族構成や生活スタイルの似通った居住者が多く、都心に近い地域ほど生活資源の多様性が要求されていないためである可能性をあげている。また、生活資源への接近可能性に関しては各地域で大きな違いは見られないことも述べている。

「5. 2 これからの課題」では、本研究では未解明のままに終わっている生活資源に関するいくつかの問題を挙げ、これらの問題を解決することによって生活資源が地域計画、施設計画、コミュニティ計画にとって有用なものとなる可能性を指摘している。

「添付資料」

添付資料として以下のものを付す。

付1: アンケート調査票例。

付2: 徒歩圏域地図記入例

付3: インタビュー・チェックリスト

付4: ケーススタディー個々の居住者の生活の例

第1章 研究の目的と背景

1.1 はじめに

1.2 研究の目的

1.3 関連既往研究と本研究の位置づけ

- ・地域計画・コミュニティ計画研究
- ・都市社会学
- ・建築計画における環境行動的研究
- ・本研究の位置づけ

第1章 研究の目的と背景

1.1 はじめに

現在、都市は消費するための場所、すなわち、郊外の住宅に住む人々が働きにやってくる、遊び、また、家に帰って行くための場所となりつつある。都市で生活するという営みが働く、遊ぶ、行こう、帰るといった個々の機転に割り当てられた別々の空間に分離しつつあると言ってよいだろう。もし、都市が完全にそのような場所となってしまう時、都市は今まで持っていた魅力を失ってしまうだろう。なぜなら、都市が本来的に持っていた大切な性質である住むための場所、生活するための総合的な環境を兼ね備えた場としての都市というものはなくなってしまうからである。

例えば、現在東京で人気のある街の多くが後背地にすぐ住宅地を抱えている（あるいはその街が盛り場として発展を始めた時期にはそうであった）ものが多いことを考えてみれば分かるだろう。原宿、青山、六本木、下北沢、代官山。いずれも、その街やその近くに住み着いた者たちの影響なくしては現在の姿はなかっただろうし、いま、それらの街を訪れる私たちも単に商業ビル、オフィスビルだけでできあがった街ではない、一般の住宅のやその他のものも密度を持って集まった、その街の姿や雰囲気を感じながらこそ足を向けるのではないだろうか。そこには生活するための環境が地域内において総合的に形成されているのである。

一方で現在の都市においては職と住の分離した生活構造、発達した交通手段による都市全体の利用可能性、自分の嗜好や生活に合わせて使い分けられるほど様々な施設が豊富に存在することなどにより、必ずしも自分の居住する地域でほとんどの行為を行わなくても済むようにはなっている。また、通信販売や電子ネットワークを使ったオンラインショッピングといった購買行動や電話、電子メールなどによるコミュニケーションなど場所を介さない行動形式も現れている。

しかし、生活の重要な拠点となる自宅とその周辺の地域が生活の中に占める価値の大きさは言うまでもない。私たちは日々の暮らしの中で自分の身体を基準に行動しており、いくらバーチャル空間が発達しようともこの身体性を消し去ることはできないだろう。むしろ今後の就労時間の短縮、ホームオフィスの試みや都心居住への回帰などを考え併せると地域での生活の重要性は決して低くなっているわけではない。実際のところ私たちは普段にげなく自分の家の周り、つまり地域を使って暮らしており、地域のありようは生活に重要な関係を持っている。

また、地域での生活環境の豊かさは行政や商業施設の事業者によってのみ作り出されるわけではなく、そこに住む人々の活動によっているのである。当たり前のことではあるが、生活環境が豊かであるかどうかは、そこで暮らす人々の生活の面から評価されなければならない。

都市は様々な地域とそれらの場所における人々の行動によって作られている。一つ一つの地域の生活環境の豊かさには都市全体での生活の豊かさは得られないのではないだろうか。

「東京ってどこでもおもしろいのよ」（荒木、1994）

10年後、20年後にも我々はこのように言うことができるだろうか？

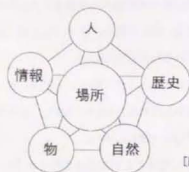
1.2 研究の目的

本研究の目的はいくつかの都市部の地域において、居住者の生活行動を生活資源の使い方という視点を通して分析することにより、それぞれの地域の特徴を見いだすことである。地域での生活において生活資源の使い方、生活資源を個人個人がどの様に生活の中に位置付けているのかを中心として、地域が多様な居住者の多様な生活を可能としている物理的、社会的な地域の構造を明らかにしようとするものである。

近年までの建築計画・地域計画においては物理的環境と人間の行動を比較の単純な対応関係として見る環境決定論的な見方が多かった。しかし、実際の私たちの行動を考えてみると環境の様々な様相の中で、意識的にせよ無意識的にせよ自らと環境との関係を築いて行動している場合が多い。この時、環境と人間はどちらかがどちらかを規定する様な関係にある場合はまれであり、両者が一体となつてあるシステムを作り上げ、そのシステムの中で様々な行動や現象が起きていると解釈するのが適当であることがほとんどであると言える。いわば、人間と環境は相互浸透的 (Transactional) な関係 (高橋 (廣), 1992) にあるのである。また、生活環境 (Living Environment) とはもともと「人間の生活を支える有形無形のあらゆる外部的条件」(日笠, 1965) のことであり、物理的環境に限らず対人的環境、社会・文化的環境も含めて考えることが必要であると思われる。

本論では居住者の地域における生活行動を捉えるために「生活資源」という観点から考察を加える。ここで、生活資源とは人間が日々利用している様々な場所を、物理的環境と人間との間の関係だけにとどめるのではなく、その場所では出会う人や情報、その場所にまつる歴史、自然条件も含めた総合的な環境のセットを表すものと定義する (図1-1)。場所を単に物理的・地理的なものでなくその場所ですんなりと交わり、どんな情報がかわされ、どんな雰囲気のある場所なのかということも含めて生活に利用される場所として考えようというのである。さらには、日々の生活における行動は大体の場合において様々な目的が複合したものであったり明確な目的のないものであったりする。施設の計画された機能や居住者の行動目的別に生活を分解することは、生活の多様な複雑さを切り捨ててしまう可能性があるため、生活資源という総合的な環境の単位から地域での生活を考えようという意図がある。

同じ施設や場所であっても、個々それぞれの居住者にとっての関わり方は様々であることが考えられる。また、同じ居住者と場所の組み合わせであっても、状況の違いによって生活資源としての場所のあり方 (一つの



【図1-1 生活資源の構成要素】

系としての人間と環境の関係のあり方) は変わってくる可能性がある。この様な多様な居住者が、ある地域環境の中で様々な場所をそれぞれのやり方で利用しながら多様な暮らしを営んでいる状況を分析するために、本論では生活資源という概念を導入して分析を行う。

生活資源はある場所という単位に分類した環境の単位であるが、その分節の程度 (大きさ) は特に規定していない。単体の施設程度の大きさを想定しているが、具体的な分析に当たっては、場所の分節の具合は居住者の認識によっている。例えば、複合的な施設 (ショッピングセンターなど) や様々なしつらえのされた大規模なオープンスペースでは、いく通りかの分節の仕方が想定できるが、居住者にとって利用しない場所は生活のための資源とは言えず、あまり意味を持たないと考えられる。居住者の生活行動から地域の特徴を考察するという本論の意図からは、どの様な場所が生活資源として機能しているかということとは、あくまでも居住者がどの程度に場所を分節して認識し、利用しているのかということにもとづいて個々の生活資源を定義することが妥当だと思われる。

分節のされ方を具体的に挙げれば、ある居住者にとっては商店街が全体として一つの生活資源であるが、別の居住者にとっては八百屋、電気屋、そば屋など個々の商店が生活資源となる。どちらの場合であっても、単にものの売買というだけでなく、店主や他の客との会話 (重要な情報交換であれ、たわいのない会話であれ)、その場所の雰囲気といったものも含んだ環境として生活資源が構成されていると考える。

また、特に本論で地域という場合には、居住者の自宅から半径800m程度の範囲を想定している。これは、ペリーの「近隣住区論」(Perry, 1929) によって示された学校および商店の利用圏の目安の数値 (1/2マイル) を参考にしている。また、この800mという距離は通常徒歩で10分弱の範囲であり、居住者が気軽に外出できると想像できる範囲である。実際の都市計画における住宅地計画においても近隣住区は一つの計画単位として (日笠, 1993)、比較的一般的なものであると思われる。つまり、個々の居住者や調査地によって差異はあるであろうが、地域での生活においてほぼ日常的な行動が行われると予想される地理的な範囲 (半径約800m内およびその周辺) のことを、地域と呼んでいる。

1.3 関連既往研究と本研究の位置づけ

・地域計画・コミュニティ計画研究

地域計画やコミュニティ計画に関しては、建築計画、都市計画に限らず社会学や地理学、心理学などの面からも多くの研究が蓄積されてきている。ここでは、建築計画と都市計画を主として、どのような研究が行われてきたのかを概観する。

地域計画においては密度計画、街区構成、施設規模、施設配置、利用圏域、施設そのものの計画など多面的に地域の計画について研究が行われてきた (註1-1)。また、建築計画においても地域施設の利用実態をもとにして、ビルディングタイプごとに大量の研究がなされてきているが、研究領域は公共的施設の研究に集中しており、商店などの小規模な民間の施設についての研究はこれからの課題となっている。以上は主に施設の側か

ら見た研究ということができらう(註1-2)。

建築計画におけるコミュニティの問題は集合住宅内、あるいは住宅団地内におけるコミュニティ形成を促す住戸の集合のさせ方の問題として、集合の規模、住棟配置、共用部分の利用、維持管理、近隣交流などの面から研究が進められてきた(野口、1989)。また、同時に一般住宅地における研究も進められてきている。

地域レベルでの居住者の生活を対象とした研究にとって重要な位置を占めるものとして領域研究がある。これはLynch(1960)に影響を受け、地域を機能性の面からだけでなく、居住者の心理面も含めて評価しようとするものである。鈴木ら(1966a、1966b、1966c、1967、1974)は生活領域という概念を提示し、行動圏であると同時に心理的に領有意識を持つ空間を生活領域としている。また、生活領域を二つに分け、空間の構成要素が位置を含め明確に認識されている区域を確定領域、確定領域ほど明確に把握されていない区域を潜在領域としている。さらには空間を潜在領域や確定領域として獲得し、領域を拡大していく過程を、居住者が地域を把握していく発達過程として捉えている。

その他の地域レベルでの領域研究の展開としては長倉ら(1976)による生活関連施設の位置に関する研究や重村ら(1976)による定住型と生活型の類型に関する研究、高橋(恒)ら(1981)による近隣交際に関する研究などが挙げられる。重村らの研究で生活型の類型に関する部分は、家の社会的成熟度、住居の機能的依存度、近隣性、広域性の4つの要素によって8つの類型に分けている。さらにそれぞれの類型に対して生活の展開しているパターンを金魚マップという模式図として提示しており、地域における生活の実態について詳細な調査を行っているわけではないが、他の研究には見られないユニークな視点と見ることができる。

以上、概観してきた様々な研究の多くは物的環境を制御することによって生活を規定あるいは誘導しようという傾向がある(註1-3)。これは建築や都市を作るあるいはデザインするという立場からはある意味では自然な発想であると言えるが、舟橋(1989)も言うように、必ずしも人間と環境との関係、特に地域での生活環境という様々な要素が関連してくるものとの関係を十分に捉えきれない可能性がある。

一方で地域での生活環境を総合的に捉えようとする研究も現れ始めている。その一例として東京大学高橋研究室による一連の研究を挙げることができる。西田ら(1993)は路上でのアクティビティ、地域情報の提示、視線の透過、日常的な生活行動などの面から開かれた地域の価値を導き出そうとしており、橋ら(1993)は既存の市街地と集合住宅団地における高齢者の場所の使い方の比較から居住者が地域と関係を作り上げるあり方の違いを抽出し、峰崎ら(1994、1996)は居住者の居住スタイルと場所の使い方から地域での居住様式や生活資源の獲得のきっかけについて説明している。橋ら(1996)は開かれた都市コミュニティの実態を報告し、そのようなコミュニティを可能にするソフト・ハード両面に渡る地域の資源について論じている。また、個人を単位として、日常的な生活のあり方に焦点をあてたケーススタディ(東京大学高橋研究室、1995)も発表している。また、Lynch(1981)は居住環境の質の規範(価値)として5つの基本的な規範と2つの超基準(註1-4)を挙げたうえで、総合的に都市の環境を考察する必要性を強調し、よりよい都市形態のデザインについて模索している。

・都市社会学

都市社会学においては、その発端となったシカゴ学派により参与観察の方法を用いて多くの都市民族誌(例えば、Anderson, 1923, Cressey, 1932)が書かれているが、ある地域における居住者個々についての場所の利用状況や場所場所での生活行動を扱ったものは少ない。シカゴ学派以外にも Whyte (1941) やそれに影響を受けた Gans (1962) により優れた都市民族誌が書かれている。これらはボストンにおける地域内の小集団の生活を描いており、その集団や関係する集団間のネットワーク、場所の利用状況が調査されている。同様に参与観察の手法を用いて日本における都市内の地域社会を調査したものとして Dore (1958) が挙げられるが、これも社会構造や対人関係の記述に終始している。

日本においても現代都市におけるコミュニティに関する研究は実に多量の研究が蓄積されている。例えば、奥田(1993)は戦後の日本における都市社会学の変遷について述べ(註1-5)、地域と都市の両面から現代都市を見ていく視点を提出しているし、具体的な研究としては東京の都市および都心隣接地域での研究としては高橋(勇)(1992)が、いくつかの集合住宅団地における研究としては倉沢(1990)が挙げられる。また、森岡・松本(1992)においては都市社会学での今日的なトピックのいくつかについて具体的な研究を通して分析を行っている。

また、都市におけるコミュニティのあり方に関する研究として、個人と個人の社会的なつながりの視点から見たソーシャルネットワークの研究が近年盛んになりつつある。大谷(1996)はソーシャル・ネットワークの研究には二つの立場があるとし、ネットワークを社会的制約の中での個人の選択の結果と位置づける立場と、ネットワークを自分の利益を叶えるための「社会的資源」と捉える立場に分け、問題ごとに両者の立場双方を利用して行くことが重要であるとしている。前者の立場としては Fischer (1982) を挙げ、大谷自信はこの立場を重視する方法で、中国西部地方の中核都市と小都市で調査を行っている。後者の立場としては Campbell (1986) と Granovetter (1973) を挙げている。特に、Campbell は資源としてのネットワークを、情報へのアクセスを提供する機能、有力者へのアクセスを得るための機能、個人の交渉能力を促進する機能の3点に分類している。

都市社会学においては都市環境と生活環境・社会環境の関係を明らかにすることが大きなテーマであるにも関わらず、都市内の様々な空間や具体的な物的環境と生活環境・社会環境の関係はあまり多くない。

例えば、現在の都市社会学の様相を幅広く概観している鈴木(1992)や Fischer (1996) においてもコミュニティ、地域、パーソナルネットワーク、都市環境、都市の生態学といったキーワードは繰返して現れ、「都市はそういう交流と結節のネットワークの場となる。そして人間はそうした機関の交流・結節機能の専門化した担い手として都市に集住する。結節機能とはたとえば銀行、工場、学校、役所などである。」(鈴木、1992) という認識も提示されるが、そこに空間あるいは場所と居住者の生活の関係に関する議論は希薄である。

その中で、奥田(1993)は東京の都心部におけるコミュニティの実態調査を通して、実際のまちづくりにおいて「まちづくりセンター」が住民各層をネットワークする結節点としての可能性を持つことを指摘しており、社会学と建築計画、都市計画との接近が見て取れる。

一方で、都市社会学におけるこの様な空間概念の希薄さに対して吉見(1992)は、日本における都市社会学の成果の豊かさを認めながらも、空間と社会の関係についての理解がおざなりになってきたことを指摘してい

る。同時に、シカゴ学派の提示した人間生態学的では「空間」は、社会性をまめかれた所与の前提」となっている」と批判している。「社会」はそもそも空間的な存在であり、空間もまた社会的実践の産物として存在する」と、「社会」と空間との二分法的な把握の限界を突破」する重要性を指摘している。

・建築計画における環境行動的研究

環境行動研究 (Environment-Behavior Studies) はまた環境心理学 (Environmental Psychology)、環境デザイン研究 (Environment Design Research) とも呼ばれ、人間の心理や行動と環境との関係を物的側面だけでなく対人的、社会・文化的な側面も含めて総合的に解明し、実際の問題の解決を目指す分野と言える (註1-6)。

建築計画研究においては人間を物的な環境の規定のもとに行動するものとして環境決定論 (Environmental Determinism) 的に捉えたもの、または人間を環境との相互作用論 (Interaction Theory) 的に捉えてきたものが多かった (舟橋, 1989)。しかし、舟橋 (1989) は環境決定論あるいは相互作用論では「人間と環境 (建築) との関係性を十分に捉え得ない」とし、建築計画においても、人間と環境を一体のものとして捉える相互浸透論 (Transactionalism) 的な視点の導入する必要性を訴えている。その後、集合住宅の研究を中心としていくつかの分野で相互浸透論的な視点を取り入れた研究が増えつつあるが、建築計画全体の研究の多さに比較するとまだごく一部であると言える (藤崎他, 1995)。また、研究の対象も設計・計画方法論を除く室内や施設といった小さなスケールを対象としたものがほとんどであり、地域や都市といった比較的大きなスケールで研究を行っ

ているものは少ない (図1-2)。特に地域での生活環境を相互浸透論的な視点から扱った研究はほとんどない。

環境行動研究という「人間生活全般の質と環境との関わりを問題とする」研究分野においては、「慣習的・便宜的に設けられてきた専門分野等の枠組みに捕らわれることは意味がないといえる」(舟橋, 1989) ために心理学などの分野からも生活環境を考える上で重要な概念が提出されている。これらはいずれも実験室的手法によって得られたものというよりも、実際のフィールドでの調査と密接に関わっている概念であることを指摘できる。

その一つとして Baker (1968) による行動場面 (Behavior Settings) を挙げることができる。行動場面の定義としては「行動場面プログラムと呼ばれる序列化された一連の行事を実行するために協調的に相互作用する置き換え可能な人および人以外の構成部分からなり、境界のある、自己調節機能をもったシステムである」(Wiener, 1994) とされるが、簡単には場所を基礎とした概念であり、人間の行動のあるまじりのある一場面であると考えることができる。本論での視点として提出した生活資源も場所を基礎とした概念であるが、以下のようないくつかの点で違いが見られる。

- ・行動場面では人間を (同じ機能を果たすなら) 置き換え可能と考えるが、生活資源では生活資源を構成する人間も固有の交換不可能なものと考ええる。

- ・行動場面で意識的に取りあげられている要素は人、人の行動、物的な環境であるが、生活資源ではさらに人と人の間で交わされる情報や歴史的な環境なども含む、総合的な環境の単位と考えることができる。

- ・やや恣意的な部分もあるが、行動場面では構成するメンバーの重視度、行動の連続性、空間の近接性など7つの指標の数値によって別個の行動場面であるかどうか判別しているが、生活資源においてはそのような判定法は今の所ない。

といったことが挙げられる。

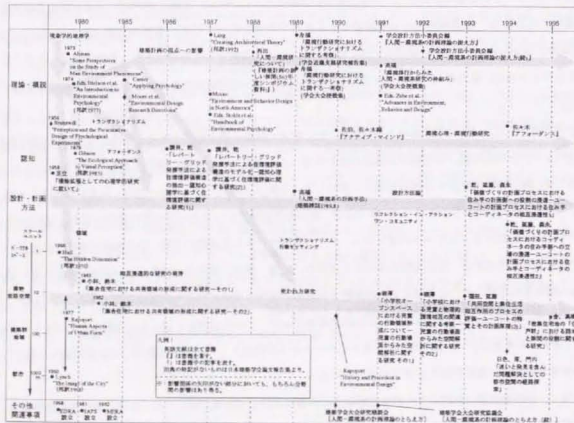
認知心理学の分野では Gibson (1979) によりアフォーダンス (Affordance) という概念が出され、それをもとに佐々木 (1994) は都市環境デザインを「ナビゲーションを可能にするリアルな情報」という観点から議論している。

発達心理学では環境移行 (Environmental Transition) に関する様々な研究が行われている。高橋 (肇) (1991) は環境移行を引き起こす環境の変化を (1) 組織・集団の変化、(2) 建物・施設の変化、(3) 場所・地理の変化の3つに分類し、このうちのいくつの要素が変化するかによって環境移行の型を3つの基本形にまとめている。1つの変化のみ起こる移行を一次的移行、2つの環境の変化を二次的移行、そして3つ共に変化する場合は三次的移行と名づけている。Wapner & Demick (1991) は環境移行において新しい環境に適応する段階で、物理的あるいは社会的アンカーポイントと他者による支援システムが大きな影響を持つことを述べている。

・本研究の位置づけ

本研究は、

- ・居住者をマスでない個人個人と捉えた上で
- ・居住者の地域での生活を生活資源という相互浸透論的な環境の単位を中心として



【図1-2 建築計画における環境行動研究の流れ】

・物的な環境にとどまらない対人環境や社会・文化的環境も含めて総合的に分析しようとするものとして位置づけるものである。

この3点のいずれかの立場からなされた研究は近年増えつつあるといえるが、全ての点をふまえた上で地域での居住者の生活環境について研究したものはほとんど見られない。

本論は、以上のような位置づけの上で、地域計画・施設計画の基礎的な視点を考察するものと考えられる。

[註1-1] 例えば、日笠(1993)を参照。

[註1-2] 地域施設の計画については柳澤他(1984)に体系的に述べられている。

[註1-3] 例えば、鈴木(1975)は次のように述べている。「建築空間を通じて新たな生活の姿へと誘導していくところに建築計画の重要課題があるというべきであろう。」

[註1-4] 3つの基本的な規範として、活力性(Vitality)、感覚(Sense)、適合(Fit)、アクセス(Access)、管理(Control)、2つの超基準として、効率(Efficiency)、公正(Justice)が挙げられている。

[註1-5] 特に本章においては3ページ以上に渡り、主な文献リストを挙げ、戦後日本における都市社会学について論じている。

[註1-6] 環境行動研究の総説としては、Ittelson 他(1974)、Stokis et al.(1987)などがある。環境行動研究的視点から建築・都市デザインの分野を概念的にまとめたものとしてはLang(1987)が挙げられる。

第2章 調査対象地および調査内容の概要

2.1 各調査対象地の位置づけ

2.2 調査対象地の概要

- ・根津
- ・千駄木
- ・北青山
- ・木場三好
- ・浜田山
- ・すすき野
- ・光が丘

2.3 調査内容

- ・アンケート調査
- ・アンケート票の配布数、回収数および回収率
- ・インタビュー調査
- ・インタビュー対象者の属性

2.4 アンケートから見た調査対象地の概要

- ・年齢構成
- ・居住年数
- ・職業
- ・世帯構成
- ・住戸形式

2.1 各調査対象地の位置づけ

本研究において調査対象としたのは東京との近郊に位置する7地域である。列挙すると、文京区根津、文京区千駄木、港区北青山、江東区木場三好、杉並区浜田山、横浜市すすき野、練馬区光が丘である(図2-1)。



各調査対象地の位置づけを表にすると以下のようになる(表2-1)。

この7つの地域は、主に立地と周辺環境により選択された。

[表 2-1 調査対象地の位置づけ]

対象地	立地	周辺環境	開発の形態	開発の規模	所有形態
根津	都心隣接地域	住商工混在地域	非計画的	----	----
千駄木	都心隣接地域	住商工混在地域	非計画的	----	----
北青山	都心地域	住商混在地域	計画的	中規模	賃貸
木場三好	都心隣接地域	住商工混在地域	計画的	小規模	分譲・賃貸
浜田山	準郊外	住宅地域	計画的	中規模	分譲
すすき野	郊外	住宅地域	計画的	中規模	分譲
光が丘	準郊外	住宅地域	計画的	大規模	分譲・賃貸

立地については都心地域、都心ではないが都市の中心部に近い都心隣接地域、周辺は市街化しているが都心からやや離れた準郊外地域、そして近年開発されてきた郊外地域の4類型に分け、周辺環境は住宅以外に様々な用途の混在している地域と、主に住宅からなる住宅地域の2類型に分けた。この2つの要素の組合せにより光が丘以外の6地域を選択した。また、光が丘は地域の広い範囲を含んだ一団地による大規模開発によるものの例として取り上げた。

本研究においては北青山、木場三好、浜田山、すすき野、光が丘の5地域の調査で得られたデータを中心とし、根津、千駄木のデータを適宜併用して分析を行う。

2.2 調査対象地の概要

・根津 (図 2-2)

根津は文京区の東部、台東区との区境に位置する地域である。武蔵野の洪積台地が掌上に張り出した突端近くの谷地にあり、東西を台地に挟まれた、ほぼ南北に伸びる根津谷に位置する。元々この根津谷には荒瀬川と呼ばれる川が流れていたが、現在は暗渠となっている。

周辺は谷中の寺町、根津神社など神社仏閣が多く存在するほか、東京大学をはじめ上野公園内の博物館・美術館など文教施設も多い。これらの神社仏閣や文教施設は地域の貴重なオープンスペースともなっている。

根津自体は住・商・工の混在したまちであり、関東大震災、第二次世界大戦による被害をほとんど受けておらず、戦前の家屋もいくつか見ることができる。しかし、近年はまちの軸である不忍通り沿いを中心に再開発が進み、高層マンション等も建ち始めている (図 2-3)。街区の内側には戸建ての住宅、住宅併用店舗やいわゆる木賃、鉄賃のアパートが雑ち並んでいる (図 2-4)。

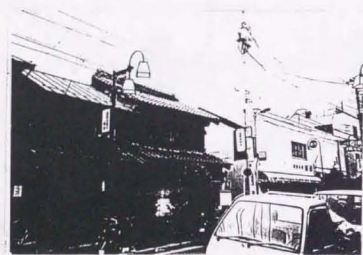
また、大通り沿いに限らず地域内に広く商店が分布していることも特徴の一つである。



[図 2-2 根津およびその周辺の状況]



【図2-3 根津の現況―裏通り沿い】

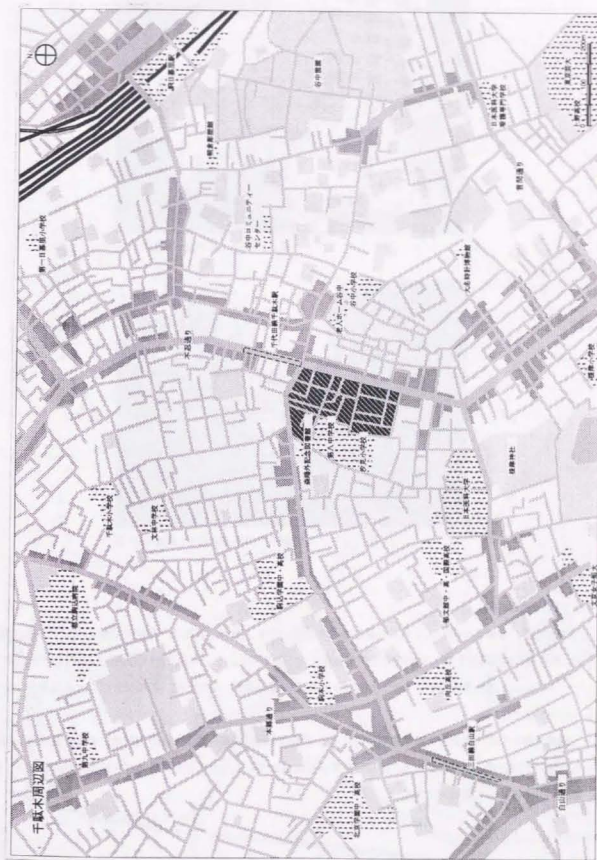


【図2-4 根津の現況―裏通り沿い】

・千駄木 (図2-5)

根津の北隣りに位置し、根津と同じ根津谷の中にある。周辺の状況は根津とほぼ同じであるが、震災、戦災の被害を受けており、建物はほとんど戦後のものである。根津と違い建て替えに伴う再開発が10年以上前から始まっており、不忍通り沿いはかなり高層化が進んでいる (図2-6)。大通り沿いとは対照的に街区内側においては戸建て住宅、木賃、鉄賃のアパートが建ち並び、RC造による低層の集合住宅も多く見られる (図2-7)。

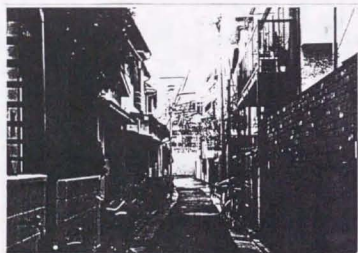
地域には、根津ほど多くの商業施設があるわけではないが、比較的近くに根津と谷中の商店街があり、日常的な買い物には不便しないと言える。



【図2-5 千駄木およびその周辺の状況】



【図2-6 千駄木の現況―表通り沿い】

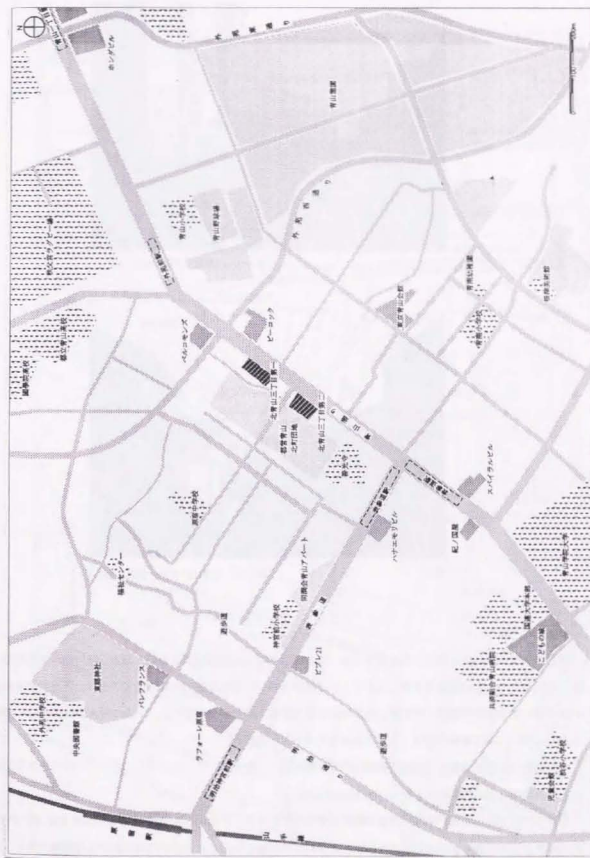


【図2-7 千駄木の現況―裏通り沿い】

・北青山（図2-8）

港区北部の青山通り沿いに立地する繁華な業務地区であり、商店、飲食店、事務所が多く存在するが（図2-9）、裏通りには低層の戸建て住宅や集合住宅も多く見られる（図2-10）。一方で食料品を扱う商店は少なく、スーパー2軒のほかはあまりない。また、周辺1km程度に青山墓地、神宮外苑、明治神宮など大きなオープンスペースがある。

調査対象としたのは住宅・都市整備公団による2棟の高層賃貸集合住宅に住む居住者である。住棟の1階から3階までは店舗と事務所が入り、上階に住戸が配置されている。女性単身者用の住戸が全住戸の半数近く計画されていることも特徴的である。



【図2-8 北青山およびその周辺の状況】

A black and white photograph of a narrow street in a Japanese town. The street is flanked by traditional wooden buildings. Power lines run overhead. A white arrow points forward on the road surface.

- 25 -

浜田山周辺地域図

高井戸区民センター

高井戸東小学校

高井戸中学校

浜田山公園

浜田山駅

商店街

西友

ライオン

浜田山

高井戸警察

都立多摩高等学校

かなめ公園

成田西公園

成田東公園

はら公園

善福寺公園

杉並南郵便局

浜田山小学校

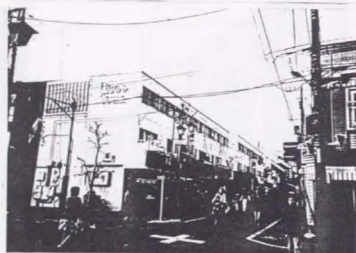
浜田山一丁目公園

西永福公園

成田カッパ公園

0 100 200m

- 27 -



【図 2-15 真田山の視況】

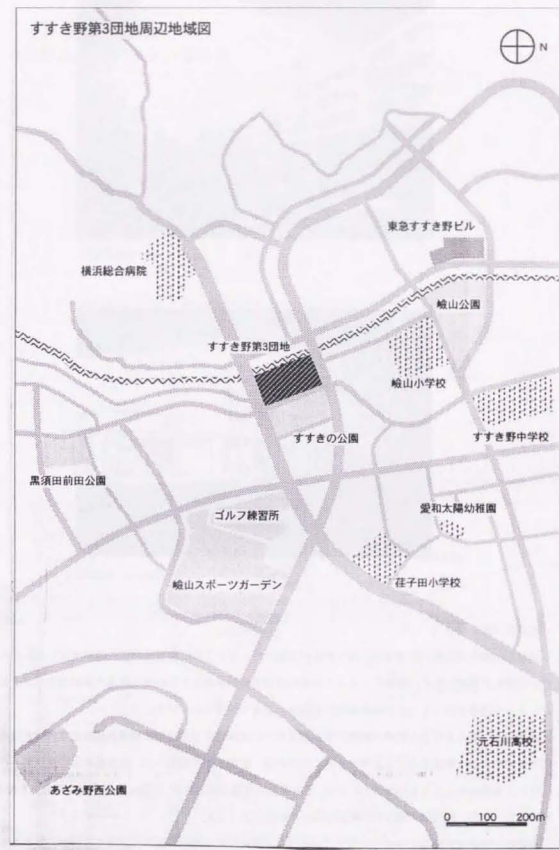


【図 2-16 井の頭通り】

・すすき野 (図 2-17)

横浜市青葉区の起伏の激しい丘陵地に開発されたニュータウンである (図 2-18)。最寄りの田園都市線あざみ野駅よりバスで10分弱の所に位置する。周囲は面的に開発された、中層の集合住宅による団地群が大きな面積を占めるが、その合間に戸建て住宅、集合住宅が混合して建ちならんでいる。商業施設はいくつかの大通り沿いに点在するほか、スーパーと個人商店が共存する商店街的な通りが約800mに渡って続く通りが一本存在する (図 2-19)。

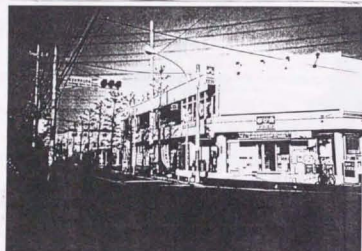
中規模の公園が計画的に配置されているほか、総合病院やスポーツセンターなどが整備されている。調査対象としたのは、川沿いに建つ住宅・都市整備公園による中層の集合住宅に住む居住者である。



【図 2-17 すずき野およびその周辺の状況】



[図 2-18 すずき野の現況]



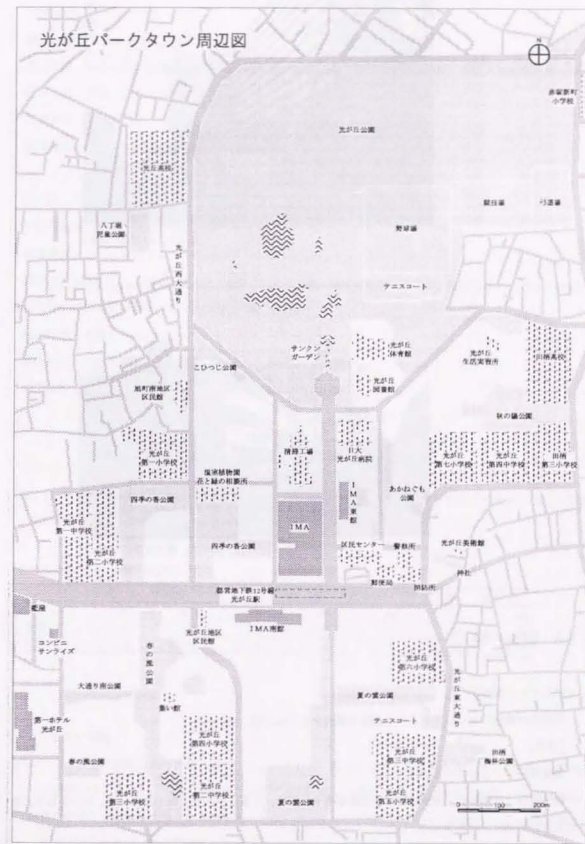
[図 2-19 商店街]

・光が丘 (図 2-20)

光が丘は練馬区北端に位置する。第二次世界大戦中の1943年に陸軍成増飛行場が現在の光が丘パークタウンの場所に建設される。戦後、1947年からは成増飛行場周辺もあわせて米軍の家族宿舎「グラントハイヅ」として整備され、1973年に日本に返還されるまで使用されていた。

返還前の1969年から跡地の利用方針が練られていたが、1978年に都市計画決定され、大規模な住宅団地を中心として整備することが決定された。その後、住宅・都市整備公団、東京都および東京都・住宅供給公社による開発が1992年まで行われた。中央部に大規模な商業施設、北側に広大な光が丘公園を配置し、住棟は中層、高層、超高層の混合した配置となっている (図 2-21)。

周辺は一部農地が残るものの、光が丘パークタウン開発以降宅地化が進み、戸建てのほかに集合住宅も増え (図 2-22)、ファミリーレストラン、コンビニ、一般商店なども増えた。また、ホテル、ホール、事務所の複合施設も光が丘パークタウンに隣接して建設されている。



[図 2-20 光が丘およびその周辺の状況]



[図2-21 光が丘の現況]



[図2-22 光が丘周辺の現況]

2.3 調査内容

・アンケート調査

各調査対象地におけるアンケート調査の概要を以下に示す。

[根津]

調査時期：1993年11月。

調査項目：居住状況、地域における交流の様子と場所、地域における生活上のルール、住戸まわりの使い方など。

配布方法：手渡し、または、ポスト投函。

回収方法：郵送。

配布対象：図2-2内に示した地区内の全住戸

[千駄木]

調査時期：1995年11月

調査項目：居住状況、地域における交流の様子、地域における施設の利用状況、街区内の細道の認知度など

配布方法：手渡し、または、ポスト投函

回収方法：郵送

配布対象：図2-5内に示した地区内の全住戸

[北青山] [木場三軒] [浜田山] [すすき野] [光が丘]

この5地域に関しては調査概要は同じである。

調査時期：1996年7月

調査項目：居住状況、利用交通手段、地域での社会活動、地域での交流の様子、生活情報の入手先と内容、地域における施設の利用状況（A1大の地図に記入）など

配布方法：手渡し

回収方法：手渡し、または、郵送

配布対象：図2-8、11、14、17、20に示した地区内の60戸

・アンケート票の配布数、回収数および回収率

表2-2に示すとおりである。ただし、根津については、居住していない住戸が5戸あったため、分析には残り108戸のデータを使う。

[表2-2 アンケート配布・回収数]

	根津	千駄木	北青山	木場三軒	浜田山	すすき野	光が丘
配布数	270	574	60	60	60	60	60
回収数	113	127	56	37	50	56	33
回収率	41.9%	22.1%	93.3%	61.7%	83.3%	93.3%	55.0%

・インタビュー調査

アンケート調査に回答のあった居住者のうちインタビュー調査に協力してくれる者に対してのみ、一人あたり1～2時間かけてアンケート調査の内容に加えてさらに詳しい内容について聞き取りを行った。世帯によっては配偶者や子どもを交えて答えたものもあったが、データとしてはアンケートに回答したもののみを取り上げた。以下、インタビュー調査の概要を示す。

〔根津〕(表2-3)

調査時期：1993年11～12月

調査人数：21人

〔表2-3 インタビュー対象者一覧 根津〕

No.	性別	年齢	職業	居住年数	世帯構成	住戸形式
A013	M	60	自営(自宅)	38	親十子(学生)	戸建て持家
A014	M	65	自営(自宅)	43	夫婦(高齢)	戸建て持家
B005	M	51	会社員	23	親十子(学生)	戸建て持家
B006	F	65	パート	65	親十子(社会人)	戸建て持家
B027	M	66	自営(自宅)	67	単身(高齢)	戸建て持家
B046	F	34	主婦	5	親十子(学生)	戸建て持家
B062	F	45	パート	10	親十子(学生)	賃貸集合住宅
C002	M	77	自営(自宅)	38	夫婦(高齢)	戸建て持家
C022	M	25	学生	2	単身(若年)	賃貸集合住宅
C024	M	21	学生	1	単身(若年)	賃貸集合住宅
C040	F	36	会社員	5	単身(若年)	賃貸集合住宅
C060	M	58	自営(自宅)	19	夫婦(若年)	戸建て持家
C065	F	41	自営(自宅外)	12	親十子(学生)	分譲集合住宅
C069	M	30	その他	20	単身(若年)	戸建て持家
C075	M	36	自営(自宅外)	29	親十子(学生)	戸建て持家
C080	M	46	会社員	19	親十子(学生)	戸建て持家
C095	M	53	自営(自宅外)	53	単身(若年)	戸建て持家
C103	M	74	無職	47	単身(高齢)	戸建て持家
D005	F	44	自営(自宅外)	18	親十子(学生)	戸建て持家
D013	M	45	自営(自宅)	1	親十子(学生)	戸建て持家
D035	M	65	会社員	4	夫婦(高齢)	分譲集合住宅

〔千駄木〕(表2-4)

調査時期：1995年11～12月

調査人数：23人

〔表2-4 インタビュー対象者一覧 千駄木〕

No.	性別	年齢	職業	居住年数	世帯構成	住戸形式
A02	M	75	無職	47	親十子(社会人)	戸建て持家
A10	M	46	会社員	1	親十子(学生)	戸建て持家
A12	M	72	その他	35	夫婦(高齢)	戸建て持家
A17	M	39	自営(自宅)	2	夫婦(若年)	賃貸集合住宅
A23	F	66	自営(自宅)	31	親十子(社会人)	戸建て持家
A32	M	64	自営(自宅)	64	親十子(社会人)	戸建て持家
A38	M	38	会社員	70	三世代	戸建て持家
A41	F	41	会社員	33	親十子(社会人)	戸建て持家
A42	M	60	その他	10	親十子(社会人)	戸建て持家
A44	M	66	自営(自宅)	34	親十子(学生)	戸建て持家
A46	M	74	自営(自宅)	44	夫婦(高齢)	賃貸集合住宅
A47	F	38	主婦	39	夫婦(若年)	賃貸集合住宅
A48	F	78	自営(自宅)	41	夫婦(高齢)	戸建て持家
K01	M	63	パート	51	夫婦(高齢)	賃貸集合住宅
K05	F	38	学生	7	単身(若年)	賃貸集合住宅
K06	M	70	会社員	43	夫婦(高齢)	分譲集合住宅
K10	M	36	自営(自宅)	3	単身(若年)	賃貸集合住宅
K12	F	27	学生	4	単身(若年)	賃貸集合住宅
K13	M	70	無職	50	夫婦(高齢)	分譲集合住宅
K24	M	61	無職	8	単身(高齢)	賃貸集合住宅
K40	M	69	会社員	4	夫婦(高齢)	分譲集合住宅
K49	F	31	その他	6	親十子(学生)	分譲集合住宅
K52	M	34	学生	1	単身(若年)	賃貸集合住宅

〔北青山〕(表2-5)

調査時期：1996年8～9月

調査人数：10人

〔表2-5 インタビュー対象者一覧 北青山〕

No.	性別	年齢	職業	居住年数	世帯構成	住戸形式
02	F	64	無職	28	単身(若年)	賃貸集合住宅
04	F	45	主婦	21	親十子(学生)	賃貸集合住宅
05	F	43	会社員・公務員	15	単身(若年)	賃貸集合住宅
10	F	60	会社員・公務員	33	単身(高齢)	賃貸集合住宅
27	F	44	会社員・公務員	6	単身(若年)	賃貸集合住宅
28	F	61	パート	7	単身(高齢)	賃貸集合住宅
40	F	59	自営(自宅外)	34	夫婦(高齢)	賃貸集合住宅
45	F	32	会社員・公務員	2	単身(若年)	賃貸集合住宅
47	F	25	会社員・公務員	1	単身(若年)	賃貸集合住宅
56	F	37	会社員・公務員	3	単身(若年)	賃貸集合住宅

〔本場三好〕(表2-6)

調査時期：1996年8～9月

調査人数：12人

〔表2-6 インタビュー対象者一覧 本場三好〕

No.	性別	年齢	職業	居住年数	世帯構成	住戸形式
01	F	47	主婦	14	親十子(学生)	賃貸集合住宅
12	F	43	パート	10	親十子(学生)	賃貸集合住宅
14	F	75	主婦	13	親十子(社会人)	賃貸集合住宅
16	F	47	主婦	12	夫婦(若年)	賃貸集合住宅
17	F	40	会社員・公務員	9	親十子(学生)	賃貸集合住宅
25	F	29	会社員・公務員	13	親十子(社会人)	賃貸集合住宅
27	F	49	主婦	10	親十子(社会人)	賃貸集合住宅
28	F	44	パート	11	親十子(学生)	賃貸集合住宅
31	F	37	パート	13	親十子(学生)	賃貸集合住宅
33	F	59	会社員・公務員	12	夫婦(高齢)	分譲集合住宅
34	F	55	主婦	14	親十子(社会人)	分譲集合住宅
37	F	45	会社員・公務員	12	三世代	賃貸集合住宅

〔浜田山〕(表2-7)

調査時期：1996年8～9月

調査人数：11人

〔表2-7 インタビュー対象者一覧 浜田山〕

No.	性別	年齢	職業	居住年数	世帯構成	住戸形式
04	F	63 主婦		19 夫婦(高齢)	分譲集合住宅	
08	F	47 自営(自宅)		16 親十子(学生)	分譲集合住宅	
09	F	54 主婦		6 夫婦(高齢)	分譲集合住宅	
11	F	63 その他		11 単身(高齢)	分譲集合住宅	
12	F	53 その他		19 三世代	分譲集合住宅	
19	F	58 主婦		19 親十子(社会人)	分譲集合住宅	
22	F	主婦		10 親十子(学生)	分譲集合住宅	
24	F	57 パート		19 親十子(社会人)	分譲集合住宅	
26	F	59 主婦		19 単身(若年)	分譲集合住宅	
27	F	60 主婦		18 親十子(社会人)	分譲集合住宅	
33	F	66 主婦		19 夫婦(高齢)	分譲集合住宅	

[すすき野] (表2-8)

調査時期: 1996年8~9月

調査人数: 11人

[表2-8 インタビュー対象者一覧 すすき野]

No.	性別	年齢	職業	居住年数	世帯構成	住戸形式
08	F	69	主婦	9	親子 (社会人)	分譲集合住宅
09	M	63	自営 (自宅)	9	単身 (高齢)	分譲集合住宅
12 (欠)	F	39	主婦	1	親子 (学生)	分譲集合住宅
13	F	59	主婦	8	夫婦 (高齢)	分譲集合住宅
15	F	79	主婦	9	親子 (社会人)	分譲集合住宅
16	F	48	その他	9	親子 (社会人)	分譲集合住宅
17	F	65	無職	9	夫婦 (高齢)	分譲集合住宅
24	F	43	パート	4	親子 (学生)	分譲集合住宅
29	F	39	会社員・公務員	1	親子 (学生)	分譲集合住宅
30	F	57	主婦	9	親子 (社会人)	分譲集合住宅
31	F	47	パート	10	親子 (学生)	分譲集合住宅

[光が丘] (表2-9)

調査時期: 1996年8~9月

調査人数: 10人

[表2-9 インタビュー対象者一覧 光が丘]

No.	性別	年齢	職業	居住年数	世帯構成	住戸形式
02	F	40	主婦	11	親子 (学生)	分譲集合住宅
04	F	38	主婦	2	親子 (学生)	分譲集合住宅
07	F	39	主婦	11	親子 (学生)	分譲集合住宅
10	F	47	主婦	12	親子 (学生)	賃貸集合住宅
20	F	48	パート	12	親子 (学生)	賃貸集合住宅
28	F	45	パート	12	親子 (社会人)	賃貸集合住宅
30	F	41	主婦	1	親子 (学生)	賃貸集合住宅
31	F	35	主婦	7	親子 (学生)	賃貸集合住宅
32	F	30	主婦	2	親子 (学生)	賃貸集合住宅
33	F	34	主婦	9	親子 (学生)	分譲集合住宅

・インタビュー対象者の属性

割合はやや異なるが、それぞれの項目において、次節で見るアンケート調査からの結果と似た分布を示している。

[性別] (表2-10)

	根津	千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
男	15	16	0	0	0	1	0
女	6	7	10	12	11	10	10
計	21	23	10	12	11	11	10

[年齢] (表2-11)

	根津	千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
20~29	2	1	2	1	0	0	0
30~39	3	7	1	1	0	2	5
40~49	4	2	3	7	1	4	5
50~60	3	0	1	2	5	1	0
60~	9	13	3	1	4	4	0
不明	0	0	0	0	1	0	0

[居住年数] (表2-12)

	根津	千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
~2年	3	3	2	0	0	1	3
3~9年	3	6	3	1	1	9	2
10~19年	5	1	1	11	10	1	5
20年~	10	13	4	---	0	---	---
不明	0	0	0	0	0	0	0

[職業] (表2-13)

	根津	千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
会社員・公務員	4	5	6	4	0	1	0
自営 (自宅)	6	7	0	0	1	1	0
自営 (自宅外)	4	0	1	0	0	0	0
主婦	1	1	1	5	7	5	8
パート	2	1	1	3	1	2	2
学生	2	3	0	0	0	0	0
無職	1	3	1	0	0	1	0
その他・不明	1	3	0	0	2	1	0

[世帯構成] (表2-14)

	根津	千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
単身 (若年)	5	4	6	0	1	0	0
単身 (高齢)	2	1	2	0	1	1	0
夫婦 (若年)	1	5	0	1	1	0	0
夫婦 (高齢)	3	6	1	1	2	2	0
親子 (学生)	9	3	1	5	2	4	9
親子 (社会人)	1	5	0	4	3	4	1
三世代	0	1	0	1	1	0	0
その他・不明	0	0	0	0	0	0	0

[住戸形式] (表2-15)

	根津	千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
戸建て持家	8	10	---	---	---	---	---
戸建て借家	7	0	---	---	---	---	---
分譲集合住宅	2	4	---	2	11	11	4
賃貸集合住宅	4	9	10	10	---	---	6
その他・不明	0	0	---	---	---	---	---

2.4 アンケートから見た調査対象地の概要

年齢構成のみはアンケート表に記入された世帯構成員すべてを集計したものであるが、その他の項目はアンケート回答者について集計したものである。

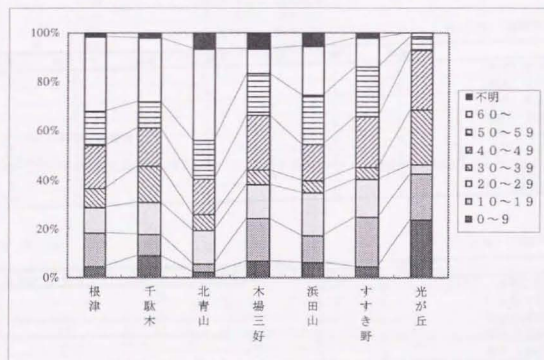
・年齢構成 (表 2-16、図 2-23)

光が丘を除くすべての調査地で広く人口が分布しているのが分かる。中でも根津と千駄木は高齢者の割合が高く、本郷三好においては低い。北青山で20代以下の若年人口の割合が少ないのは、女性単身者用の住戸に高齢の者が少なからずいるためである。

光が丘においては40代以下の比較的若い層がほとんどを占めており、未成年が4割以上であることと、後述べる世帯構成と併せて見ると子育てに携わっている世帯が多いことが分かる。

[表 2-16 年齢構成]

年齢	根津	千駄木	北青山	本郷三好	浜田山	すすき野	光が丘
0～9	11	28	2	7	9	9	29
10～19	33	28	3	19	17	40	23
20～29	26	43	12	15	26	30	5
30～39	20	48	6	6	8	10	27
40～49	43	49	13	24	22	41	30
50～59	34	34	14	18	30	40	7
60～	74	83	33	11	30	23	2
不明	4	7	6	7	8	4	0



[図 2-23 居住者の年齢]

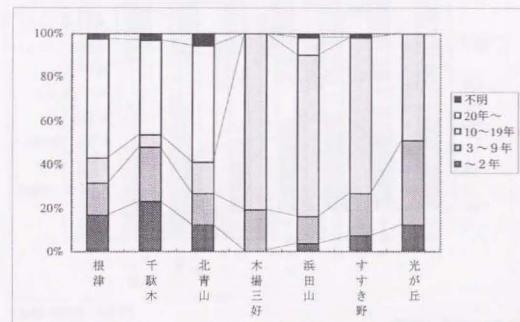
・居住年数 (表 2-17、図 2-24)

根津、千駄木、北青山の3地域で20年以上の長期居住者が多い。根津、千駄木は既存の市街地であり、北青山は完成以来住み続けた世帯の多いためである。一方で千駄木ではここ10年以内の居住者が約3割になり、近年建設された集合住宅に流入した居住者による影響がみられ、近年移り住んだ層と長年住み続けている層があることが分かる。同様の傾向は根津においても見られる。

本郷三好では10～19年の居住者が半数を越え、ほとんどの住戸が賃貸にも関わらず高い定住率が見られる。これは本郷公園の再開発による代替住宅として入居した世帯があり、そのまま住居し続け、居住者の入れ変わりが少ないためである。浜田山、すすき野ではすべて分譲の住戸であるため高い定住率が見られる。また、これは比較的面積に余裕のある住戸が用意されていたためと見ることもできる。光が丘で居住年数の長い世帯は分譲によるものが多い。

[表 2-17 居住年数]

	根津	千駄木	北青山	本郷三好	浜田山	すすき野	光が丘
～2年	18	29	7	0	2	4	4
3～9年	16	32	8	7	6	11	13
10～19年	13	7	8	30	37	40	16
20年～	58	55	30	---	4	---	---
不明	3	4	3	0	1	1	0
計	108	127	56	37	50	56	33



[図 2-24 居住者の居住年数]

・職業（表2-18、図2-25）

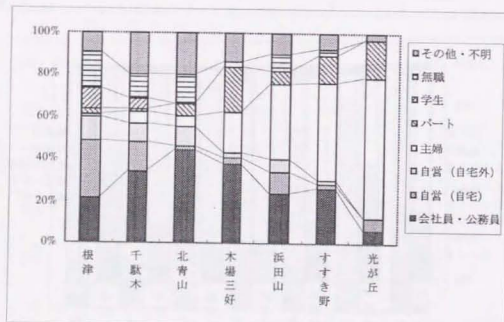
根津、千駄木においては女性の割合も自営や会員の者が多く、主婦はほとんどいない。特に光が丘では小学生以下の子どもを持つ子育て期の主婦がほとんどである。

一方、浜田山、すすき野、光が丘などにおいては主婦の割合がかなり高くなる。本場三好でパートの割合が高いことも併せると、以上4地は都心に比較的近くパートに出やすい地理にあるためと考えられる。

根津、千駄木、北青山における無職はすべて高齢の者である。

【表2-18 職業】

年齢	根津	千駄木	北青山	本場三好	浜田山	すすき野	光が丘
会社員・公務員	23	43	25	14	12	15	2
自営（自宅）	28	18	1	1	5	1	2
自営（自宅外）	12	11	5	1	3	1	0
主婦	1	7	3	7	18	26	22
パート	3	2	3	8	3	7	6
学生	10	6	0	0	0	0	0
無職	18	15	8	1	4	2	0
その他・不明	10	25	11	5	5	4	1



【図2-25 居住者の職業】

・世帯構成（表2-19、図2-26）

根津、千駄木においては様々な構成の世帯が共存していることが分かる。これは、根津と千駄木は既存の市街地であり、多様な形態、用途の建物が存在していることより説明できる。

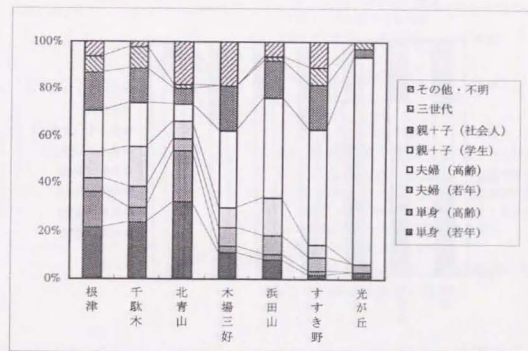
北青山は賃貸集合住宅であるが、女性単身者用の住戸が半数近く計画されており、それが反映している。

本場三好、浜田山、すすき野、光が丘の4地域においては親子の世帯が50%以上を占めている。光が丘にいたっては親子（学生）の世帯に大きく偏っており、建築年代が他の対象地に比べて新しいことも影響していると思われる。

【表2-19 世帯構成】

	根津	千駄木	北青山	本場三好	浜田山	すすき野	光が丘
単身（若年）	24	30	18	4	4	1	1
（高齢）	17	8	12	1	1	1	0
夫婦（若年）	6	11	3	3	4	3	1
（高齢）	13	21	4	3	8	3	0
親子（学生）	20	24	4	12	21	27	29
（社会人）	18	19	4	7	8	11	1
三世帯	8	11	1	0	1	4	1
その他・不明	7	3	10	7	3	6	0
計	113	127	56	37	50	56	33

若年は60才未満、高齢は60才以上を示す。



【図2-26 居住者の世帯構成】

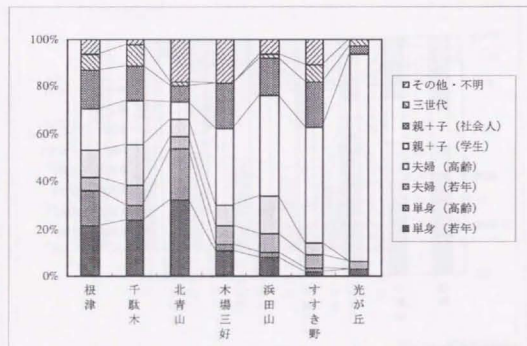
・住戸形式（表 2-20、図 2-27）

根津においては長屋も戸建てに含めて集計した。

同じ、既存の市街地であっても根津は戸建てが6割を越え、一方、千駄木では集合住宅が6割近くになり、両者の地域環境の違いを表している。これは千駄木が戦災により焼け、ほとんど戦後建てなされたことと、近年大通り沿いに高層集合住宅が多く建ったためと思われる。また、その他5地域においてはすべて集合住宅であり、賃貸と分譲の比率もほぼ計画された割合と等しくなっている。

〔表 2-20 職業〕

	根津	千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
戸建て持家	51	53	---	---	---	---	---
戸建て借家	20	2	---	---	---	---	---
分譲集合住宅	4	30	---	7	50	56	12
賃貸集合住宅	27	41	56	30	0	0	18
その他・不明	6	1	0	0	0	0	3



〔図 2-27 住戸形式〕

第3章 行動圏の広がり和生活資源

3.1 生活資源の分布と利用の状況

- ・利用する場所の数
- ・各地域での生活資源の分布
- ・各対象地での利用の状況

3.2 地域生活情報を獲得する手段

- ・地域生活情報の内容
- ・地域での生活情報の入手先

3.3 地域の探検誘発性

- ・歩くことと生活資源の発見
- ・歩くことを誘発する地域

3.4 つき合いの様態

- ・知人の分布
- ・知人の人数と交際の深さ
- ・子どもをきっかけとしたつき合い
- ・場所を介したつき合い
- ・あっさりとした人間関係

3.5 生活資源を獲得するきっかけ

- ・知人に連れられて知ることによる生活資源の獲得
- ・知人の情報から知ることによる生活資源の獲得
- ・地域のメディアからの情報による生活資源の獲得
- ・自らの足を使った生活資源の獲得
- ・習慣で利用し続ける生活資源

3.6 生活資源から見た行動範囲の展開

3.7 各調査対象地の構造

第3章 行動圏の広がり和生活資源

この章では居住者が地域で日常的に行動する範囲を行動圏と呼び、行動圏の広がりや行動圏内の生活資源の数について検討する。また、地域に居住する年数と共に生活資源の利用がどのように変化してきたのか、その変化した理由や新しく生活資源を獲得したきっかけなどについても考察を加える。

3.1 生活資源の分布と利用の状況

横津を除く6地域での比較を行う。

・利用する場所の数

利用する場所の数から居住者個人個人が利用する生活資源の大体の量が推測できる。

地域で利用する場所の一人当たりでの数を比較すると、調査方法が違うので単純には比較できないが、千駄木が一人当たり平均で27.1ヶ所と圧倒的に多い(表3-1)。千駄木に限らず、谷中、根津等の地域内とその周辺に日用品を扱う商店などの生活関連施設が多く存在していることが影響していると言える。また、同じ方法で調査した北青山、木場三軒、浜田山、すすき野、光が丘の5地域については、ほぼ都心から離れるにつれて利用する場所の数が増加する傾向が見られた(表3-2、3、4、5、6、7)。

[表3-1 一人当たりの利用する場所の数-千駄木]

利用する場所の種類	利用する場所の数	利用する場所の種類	利用する場所の数	利用する場所の種類	利用する場所の数
1. 商店	12.5	11. 公園	1.2	20. 公民館	0.5
2. 学校	1.5	12. 図書館	0.8	21. 福祉施設	0.3
3. 病院	0.5	13. 児童館	0.2	22. 老人ホーム	0.1
4. 役所	0.2	14. 青少年センター	0.1	23. 障害者施設	0.1
5. 警察署	0.1	15. スポーツセンター	0.1	24. その他	0.1
6. 消防署	0.1	16. 市民会館	0.1		
7. 郵便局	0.1	17. 市民センター	0.1		
8. 銀行	0.1	18. 市民ホール	0.1		
9. 公民館	0.1	19. その他	0.1		
10. その他	0.1				
合計	27.1				

[表3-2 一人当たりの利用する場所の数-北青山]

利用する場所の種類	利用する場所の数	利用する場所の種類	利用する場所の数	利用する場所の種類	利用する場所の数
1. 商店	1.5	11. 公園	0.1	20. 公民館	0.1
2. 学校	0.1	12. 図書館	0.1	21. 福祉施設	0.1
3. 病院	0.1	13. 児童館	0.1	22. 老人ホーム	0.1
4. 役所	0.1	14. 青少年センター	0.1	23. 障害者施設	0.1
5. 警察署	0.1	15. スポーツセンター	0.1	24. その他	0.1
6. 消防署	0.1	16. 市民会館	0.1		
7. 郵便局	0.1	17. 市民センター	0.1		
8. 銀行	0.1	18. 市民ホール	0.1		
9. 公民館	0.1	19. その他	0.1		
10. その他	0.1				
合計	3.5				

〔表3-3 一人当たりの利用する場所の数一木場三好〕

[illegible]

年份	项目	单位	姓名	性别	年龄	身高	体重	成绩	备注
1991	男子100米	广东	李金	男	20	1.70	65	11.2	
1991	男子200米	广东	李金	男	20	1.70	65	24.5	
1991	男子400米	广东	李金	男	20	1.70	65	1:02.0	
1991	男子800米	广东	李金	男	20	1.70	65	2:15.0	
1991	男子1500米	广东	李金	男	20	1.70	65	4:35.0	
1991	男子5000米	广东	李金	男	20	1.70	65	17:45.0	
1991	男子10000米	广东	李金	男	20	1.70	65	37:15.0	
1991	男子20000米	广东	李金	男	20	1.70	65	75:45.0	
1991	男子40000米	广东	李金	男	20	1.70	65	1:51:15.0	
1991	男子80000米	广东	李金	男	20	1.70	65	3:42:45.0	
1991	男子160000米	广东	李金	男	20	1.70	65	7:29:15.0	
1991	男子320000米	广东	李金	男	20	1.70	65	14:58:30.0	
1991	男子640000米	广东	李金	男	20	1.70	65	30:37:00.0	
1991	男子1280000米	广东	李金	男	20	1.70	65	61:14:00.0	
1991	男子2560000米	广东	李金	男	20	1.70	65	122:28:00.0	
1991	男子5120000米	广东	李金	男	20	1.70	65	244:56:00.0	
1991	男子10240000米	广东	李金	男	20	1.70	65	489:52:00.0	
1991	男子20480000米	广东	李金	男	20	1.70	65	979:44:00.0	
1991	男子40960000米	广东	李金	男	20	1.70	65	1959:28:00.0	
1991	男子81920000米	广东	李金	男	20	1.70	65	3918:56:00.0	
1991	男子163840000米	广东	李金	男	20	1.70	65	7837:52:00.0	
1991	男子327680000米	广东	李金	男	20	1.70	65	15675:44:00.0	
1991	男子655360000米	广东	李金	男	20	1.70	65	31351:28:00.0	
1991	男子1280000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	62702:56:00.0	
1991	男子2560000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	125405:52:00.0	
1991	男子5120000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	250811:44:00.0	
1991	男子10240000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	501623:28:00.0	
1991	男子20480000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	1003246:56:00.0	
1991	男子40960000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	2006493:52:00.0	
1991	男子81920000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	4012987:44:00.0	
1991	男子163840000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	8025975:28:00.0	
1991	男子327680000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	16051950:56:00.0	
1991	男子655360000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	32103901:52:00.0	
1991	男子1280000000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	64207803:44:00.0	
1991	男子2560000000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	128415606:28:00.0	
1991	男子5120000000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	256831212:56:00.0	
1991	男子10240000000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	513662425:44:00.0	
1991	男子20480000000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	1027324851:28:00.0	
1991	男子40960000000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	2054649702:56:00.0	
1991	男子81920000000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	4109299405:52:00.0	
1991	男子163840000000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	8218598811:44:00.0	
1991	男子327680000000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	16437197623:28:00.0	
1991	男子655360000000000米	广东	李金	男	20	1.70	65	32874395246:56:00.0	

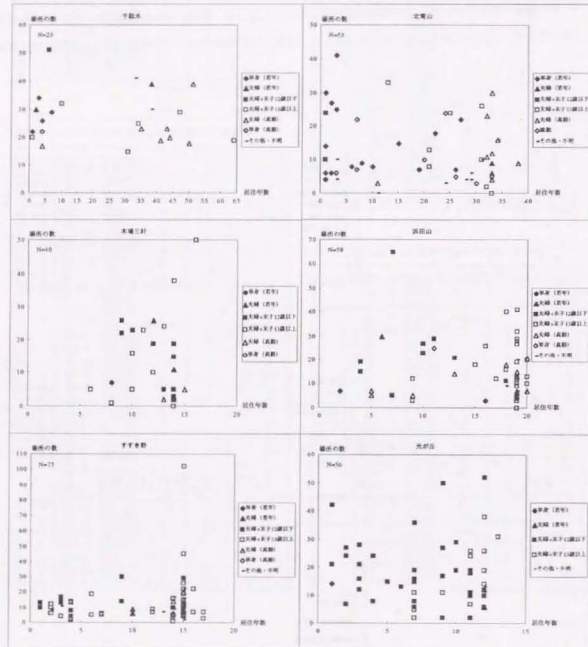
序号	姓名	性别	年龄	民族	籍贯	学历	学位	职称	职务	备注
1	王德胜	男	45	汉族	山东烟台	本科		教授	系主任	
2	李小明	男	38	汉族	江苏南京	硕士		副教授	教研室主任	
3	张小红	女	32	汉族	浙江杭州	本科		讲师	辅导员	
4	陈伟强	男	42	汉族	广东广州	本科		教授	系主任	
5	刘小华	女	35	汉族	湖北武汉	硕士		副教授	教研室主任	
6	赵国强	男	40	汉族	河南郑州	本科		教授	系主任	
7	孙丽娟	女	30	汉族	四川成都	本科		讲师	辅导员	
8	周大伟	男	37	汉族	湖南长沙	硕士		副教授	教研室主任	
9	吴小芳	女	33	汉族	安徽合肥	本科		讲师	辅导员	
10	郑国强	男	41	汉族	江西九江	本科		教授	系主任	
11	李小红	女	29	汉族	福建厦门	本科		讲师	辅导员	
12	王小明	男	36	汉族	广西桂林	硕士		副教授	教研室主任	
13	张小红	女	31	汉族	云南昆明	本科		讲师	辅导员	
14	陈伟强	男	39	汉族	贵州贵阳	本科		教授	系主任	
15	刘小华	女	34	汉族	陕西西安	硕士		副教授	教研室主任	
16	赵国强	男	43	汉族	山西太原	本科		教授	系主任	
17	孙丽娟	女	28	汉族	辽宁沈阳	本科		讲师	辅导员	
18	周大伟	男	35	汉族	吉林长春	硕士		副教授	教研室主任	
19	吴小芳	女	32	汉族	黑龙江哈尔滨	本科		讲师	辅导员	
20	郑国强	男	44	汉族	内蒙古呼和浩特	本科		教授	系主任	
21	李小红	女	30	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
22	王小明	男	37	汉族	新疆乌鲁木齐	硕士		副教授	教研室主任	
23	张小红	女	31	汉族	甘肃兰州	本科		讲师	辅导员	
24	陈伟强	男	38	汉族	青海西宁	本科		教授	系主任	
25	刘小华	女	33	汉族	宁夏银川	硕士		副教授	教研室主任	
26	赵国强	男	40	汉族	宁夏银川	本科		教授	系主任	
27	孙丽娟	女	29	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
28	周大伟	男	36	汉族	宁夏银川	硕士		副教授	教研室主任	
29	吴小芳	女	32	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
30	郑国强	男	41	汉族	宁夏银川	本科		教授	系主任	
31	李小红	女	30	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
32	王小明	男	37	汉族	宁夏银川	硕士		副教授	教研室主任	
33	张小红	女	31	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
34	陈伟强	男	39	汉族	宁夏银川	本科		教授	系主任	
35	刘小华	女	34	汉族	宁夏银川	硕士		副教授	教研室主任	
36	赵国强	男	43	汉族	宁夏银川	本科		教授	系主任	
37	孙丽娟	女	28	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
38	周大伟	男	35	汉族	宁夏银川	硕士		副教授	教研室主任	
39	吴小芳	女	32	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
40	郑国强	男	44	汉族	宁夏银川	本科		教授	系主任	
41	李小红	女	30	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
42	王小明	男	37	汉族	宁夏银川	硕士		副教授	教研室主任	
43	张小红	女	31	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
44	陈伟强	男	38	汉族	宁夏银川	本科		教授	系主任	
45	刘小华	女	33	汉族	宁夏银川	硕士		副教授	教研室主任	
46	赵国强	男	40	汉族	宁夏银川	本科		教授	系主任	
47	孙丽娟	女	29	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
48	周大伟	男	36	汉族	宁夏银川	硕士		副教授	教研室主任	
49	吴小芳	女	32	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
50	郑国强	男	41	汉族	宁夏银川	本科		教授	系主任	
51	李小红	女	30	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
52	王小明	男	37	汉族	宁夏银川	硕士		副教授	教研室主任	
53	张小红	女	31	汉族	宁夏银川	本科		讲师	辅导员	
54	陈伟强	男	39	汉族	宁夏银川	本科		教授	系主任	
55	刘小华	女	34	汉族	宁夏银川	硕士		副教授	教研室主任	
56	赵国强	男	43	汉族	宁夏银川	本科		教授	系主任	</

[illegible]

	北青山	木場二好	浜田山	すすき野	光が丘
3年以上利用	6.9	8.5	12.7	8.0	8.7
1年以上利用	2.2	2.1	1.7	2.8	6.3
1年未満利用	2.8	0.5	0.8	1.0	2.1
不明	0.4	1.2	0.3	0.7	0.4
計	12.2	12.3	15.5	12.5	17.5

にあることが分かる。

家族型ごとの違いについては、北青山以外は共通した傾向が見られる。単身および夫婦のみの世帯の居住者よりも子供のいる世帯の居住者の方が利用する施設数が多いと言える。これは、本章3.2～3.4でも見るように、子供を介して様々なつき合いが広がり、いろいろな生活関連施設を利用することになったり、生活関連施設の情報を手に入れることが多くなり、施設を利用しやすくなる状況ができるためであると考えられる。北青山において単身の居住者も利用施設が多くなっているのは、20代、30代の女性が多く、生活関連施設が豊富に存在



〔図3-2 居住年数と利用する場所の数〕

〔表3-8 地域滞在時間・居住年数と利用する場所の数の相関係数〕

変数	千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すずき野	光が丘
地域滞在時間	---	0.0003	0.0166	0.0289	0.0431	0.3161
居住年数	0.0153	0.0278	0.0021	0.0227	0.0343	0.0033

値は(相関係数)を表す

する地域であることも相まって、青山・表参道・原宿という地域を積極的に利用している者がいるためである。

一方で、地域への生活の密着度を表すと考えられるもう一つの指標である居住年数と利用する場所の数の関係においても居住年数とともに利用する場所の数が増えていく傾向が見られる(図3-2)。しかし、地域滞在時間と居住年数のそれぞれを変数とした場合に、利用する場所の数との関係を1次式で単、回帰分析すると、千駄木、北青山を除き相関係数の値は、地域滞在時間を変数とした場合の方が大きい(表3-8)。

これは、数値的に見れば、居住年数よりも地域での滞在時間の方が生活資源と居住者との関係に与える影響が大きいと言える。必ずしも生活資源の量の多寡が生活の質を決定づけとは言えず、むしろ個人の生活の中で居住者がどのように生活資源を位置づけているかによって評価されるべきであると考えられる。

各地域での生活資源の分布

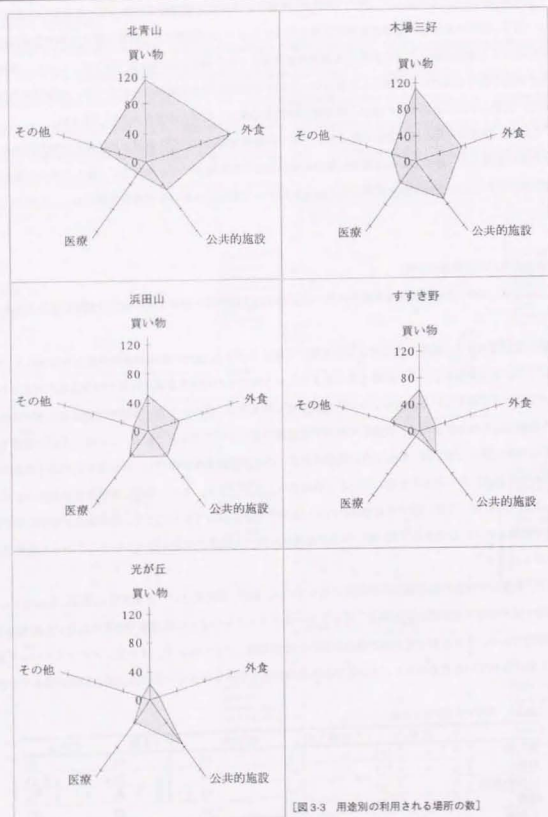
ここでは、前項で述べた利用する場所の数の差が地域の生活資源の分布とどのような関係にあるのかを見る。

居住者が利用すると回答した場所を重複を除いて数え上げると、場所の数は調査地が都心から離れるに従い、減少している(表3-9)。一方、前項で述べたように一人当たりの利用する場所の数では調査地が都心から離れるにしたがって増えている。この2つの結果を併せて考えると、都心から遠い地域ほど居住者一人一人の利用する場所のばらつきが少なく、共通して利用する場所が多いということができる。これは、今回の調査で取り上げた地域に限って言えば、都心に近い地域ほど多くの生活関連施設が存在し、居住者がその多くの施設の中から自分の生活に合ったものを選んで利用していると推測することができる。また、地域に繁華な商業地区のある北青山と木場三好において買い物や外食で使われている場所が多くなっていることや、商業施設が地域の中心に集まって配置されている光が丘で買い物、外食が他地域に比べて極度に少なくなっていることから裏付けられる(図3-3)。

また、北青山ではその他の施設の数が多くなっている。銀行、美容院といった施設は他地域にも存在するが、他地域と比べかなり数が多いのに加え、ギャラリーやスパイラルのように他地域では見られないものもあるのが特徴的である。すずき野でその他の場所が多いのは美容院、クリーニング、ガソリンスタンドといった施設が多く挙げられているためであり、光が丘で公共施設の利用が多くなっているのは公園の利用が盛んであった

〔表3-9 利用する場所全ての数〕

	北青山	木場三好	浜田山	すずき野	光が丘
買い物	115	112	49	61	23
外食	123	73	44	25	13
公共的施設	49	69	43	41	76
医療	21	41	43	10	37
その他	66	38	22	46	12
計	374	333	201	183	161



【図3-3 用途別の利用される場所の数】

【表3-10 利用する場所の最大距離ごとの人数】

	千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
～400m	0	11	3	13	4	1
～800m	0	27	7	15	54	10
800m～	23	17	30	32	19	45

である。光が丘では光が丘公園という広大な公園の魅力と同時に子育て世帯の多さが影響しているものと思われる。

利用する場所の自宅からの距離については各地域で大きな差がある（表3-10）。

千駄木においてすべての居住者が800m以上となっているのは、根津の商店街の一部が800m以上の距離にあるほか、東大、上野公園、谷中公園など利用度の高いオープンスペースがやや離れて存在するためである。

木場三好でほとんどの居住者について800m以上となっているのは、最寄り3駅の中でも最も利用される度合いが多い門前仲町とそれに次ぐ木場の両駅が共に800m以上の距離にあり、門前仲町の商店街も同様に800m以上の距離にあるためである。

浜田山では800m以上となっている居住者が多いが、ほとんどの居住者において800m以上の範囲において利用しているのは高井戸の区民センター（特にプール）のみであり、区民センターを除くとかなりの割合の居住者が800m以内の範囲内に行動圏がおさまっている。また、400m以内の居住者も1/4程度と他の地域に比べて大幅に多くっており、駅と自宅が近いことが表れている。

すすき野において800m以内がほとんどを占めるのは、商店街や公園が800mより近い距離にあり、その他の場所の利用をする場合は多くがあざみ野駅や沿線の大きな駅近辺まで出てしまうためである。

光が丘では光が丘公園をほとんどの居住者が利用しており、これは光が丘公園が光が丘パークタウンの北半分位置し、今回調査対象とした南半分からの距離が800m以上になってしまうためである。

・各対象地での利用の状況

以下、それぞれの地域での利用の様子を見る。

千駄木では地域内の様々な施設が均等に利用されていることが分かる（図3-4）。個人商店、スーパー、公共施設、オープンスペースなどいずれも比較的良好に利用されている。買い物に関しては、

「会話のある小売店が好き。」（千駄木K-12）

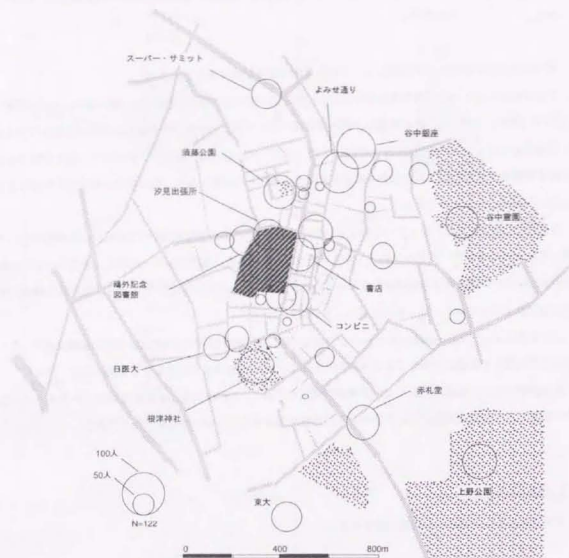
というように個人商店での買い物を評価する者もいるが、一方で、

「スーパーに慣れているので谷中銀座はあまり使わない。」（千駄木K-43）

というように主にスーパーを利用するものも見られる。しかし、

「店は小売りとスーパーを使い分ける。」（千駄木K-10）

というように適宜両者を使い分けている居住者が多い。



【図3-4 利用する居住者数一千軒木】

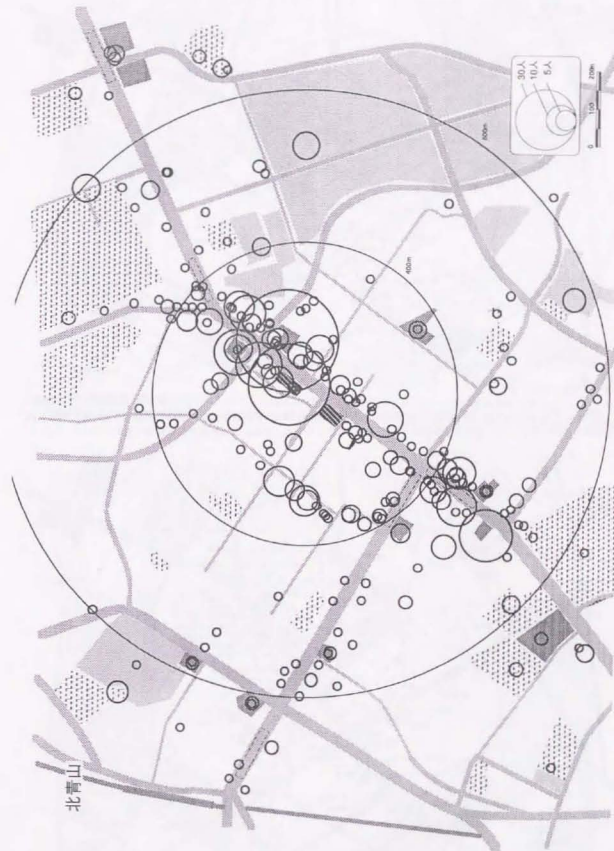
北青山は最寄り駅である神宮前と表参道の間に利用する場所がかたまっており、利用度ではスーパー2つに利用が集中している。(図3-5、6、7、8、9、10) 青山通りと小さな商店街のある裏通りに利用する場所が集中しており、表参道沿いの場所を利用する人は少ない。ただし、数人以下しか利用しない場所は地域内に比較的多く存在しており、地域内の様々な場所から居住者それぞれの要求にあったものを選択する結果、利用が分散しているものと思われる。この様子は外食する飲食店が青山通りを中心に、数多く分布していることから見て取ることができる。また、洋服や雑貨といった地域外からの消費者を対象としているであろう商店の利用も見ることができる。また、利用する場所の種類も様々であり、

「趣味の食器・家具を見る店」(北青山-27)

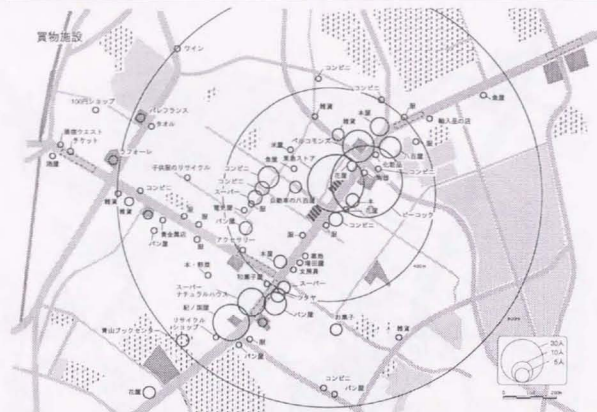
「清水湯(銭湯)」(北青山-45)

「好きな曲のかかるクラブ」(北青山-56)

といった他地域では見られなかった場所も挙げられている。



【図3-5 全施設の利用者数(北青山)】



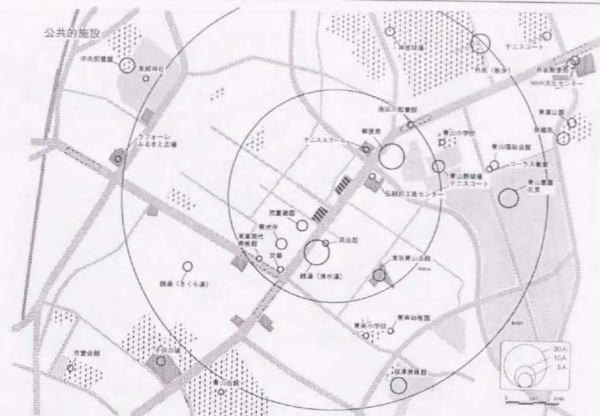
【図3-6 買物施設の利用者数】

東急ストアとピーコックに利用が集中しており、その他の施設に関しては利用が大きく地域内に分散している。利用される施設が比較的高まっているのは、青山通りの他に青山通りから北に1本裏に入った通りと表参道である。



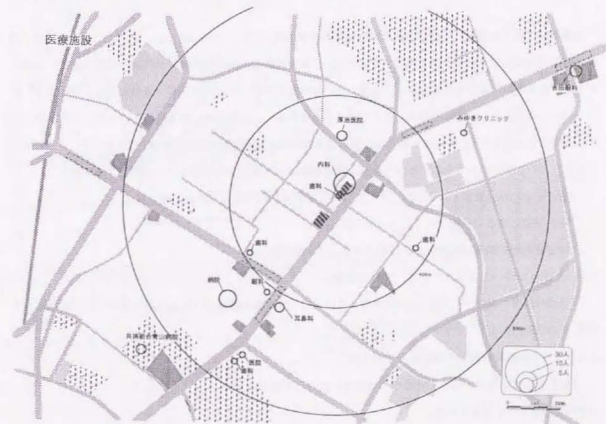
【図3-7 外食施設の利用者数】

突出して利用の多い施設はないが、いくつかの施設が集まっているベルコムズと地下スペースの利用が多いのが目につく。それ以外ではファーストフードや喫茶店など気軽に利用する施設が多くを占めている。



【図3-8 公共施設の利用者数】

子育て期の子供を持つ世帯が少ないため、他地域と比較して公園の利用が少ない。神宮外苑や青山霊園といったこの地域特有の施設の利用がある程度あるのが分かる。また、住棟内に十分な入浴設備がないために銭湯の利用が多いのも特徴的である。



【図3-9 医療施設の利用者数】

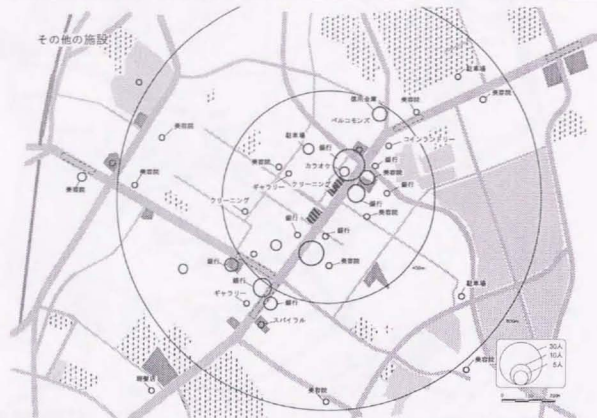


図3-10 その他の施設の利用者数
銀行、美容院の選択性が高く、利用される施設が分散している。多くの施設が青山通り沿いに分布している。

木場三好では自宅周辺と門前仲町駅周辺に利用する場所が分かれている(図3-11、12、13、14、15、16)。門前仲町駅周辺では飲食店や医院を利用する者が多い。調査対象者のかなりの部分が門前仲町駅を通勤に利用しており、帰宅途中に利用する者も多い。日常の買い物は自宅のすぐそばの商店街(資料館通りと呼ばれる)にスーパー、小売店ともに揃っており、ここで済ませる者が多い。木場公園、清澄庭園といったオープンスペースの利用も行われている。特に広大な木場公園は様々な目的に利用されており、散歩、ジョギング、フリーマーケット、犬の散歩といったものが挙げられる。清澄庭園はよく整備されていることが評価されており、

「行くときには、散歩というより、そこに行くことを目的に行く。」(木場三好-33)

「誰かが家に来ると一緒に行く。」(木場三好-14)

「お客さんが家に遊びに来たときに案内する。」(木場三好-16)

といったような使い方がされている。富岡八幡宮は、

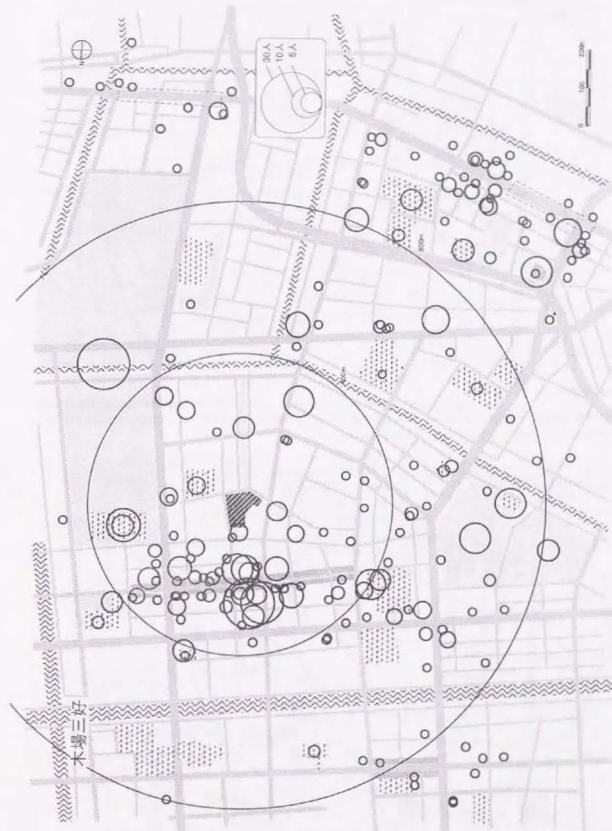
「富岡八幡宮の縁日(1、15、28日にある)には月に1回家族で散歩がてらぶらぶら歩き、甘い物を買って帰る。」(木場三好-01)

というような定期的な利用がほとんどであるが、

「縁日をしているが、込んでいるので避けていた。」(木場三好-27)

と逆の見方をしている者もいる。

やや離れるが東陽町の「イースト21」を利用する者も数名見られた。距離があるために全て自転車または車を使って利用する例であった。



【図3-11 全施設の利用者数—木場三好】



図3-12 買物施設の利用者数

利用者数では近隣の商店街のスーパー、小売店の利用が多く、その他は門前仲町駅付近の専門店と駅から住戸までの間にあるスーパー、ディスカウントストアの利用が目につく。

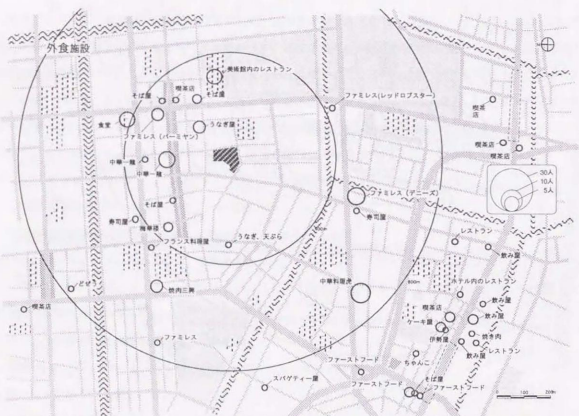


図3-13 外食施設の利用者数

自宅近くと駅前の施設の利用が多くなっているが、利用者数はそれほど多くはなく、外食する回数はあまり多くないことがうかがえる。

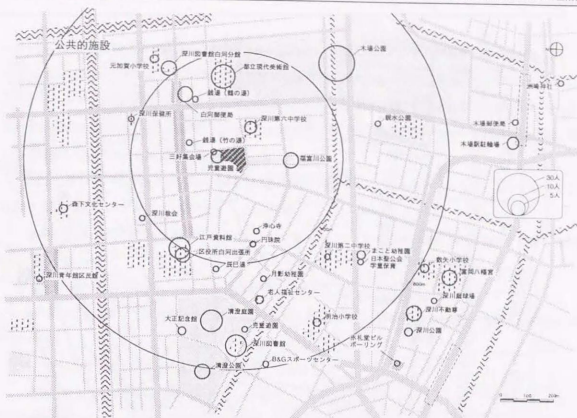


図3-14 公共施設の利用者数

自治体による公共施設の利用が目立つほか、木場公園や寺といった比較的大きなオープンスペースが存在し、ある程度の利用が行われている。

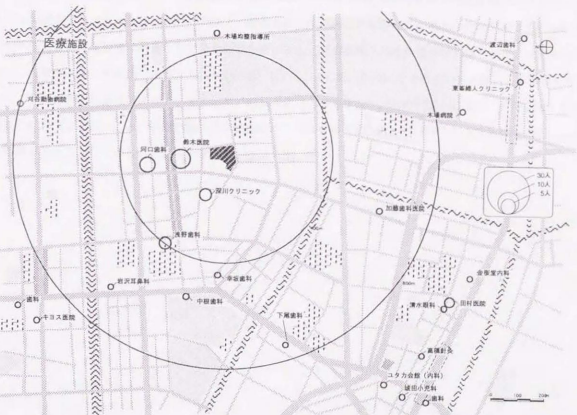
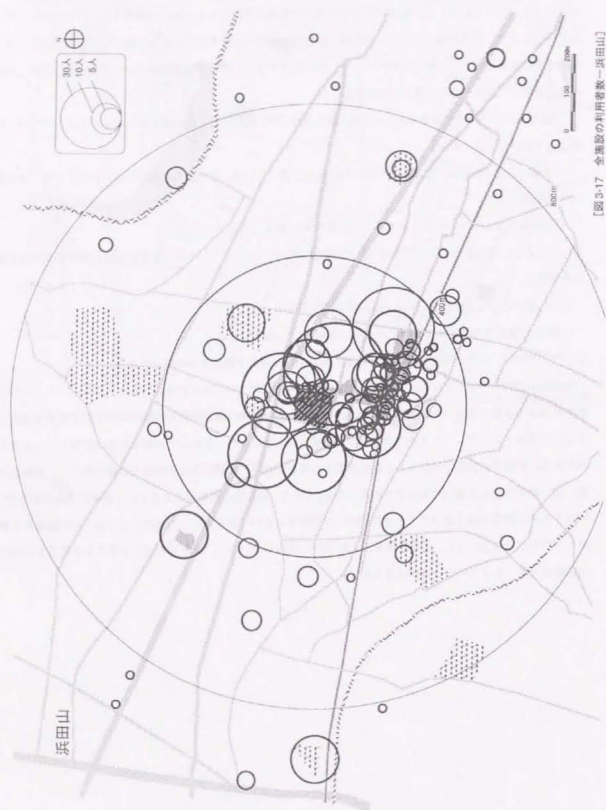


図4-11 医療施設の利用者数

ほとんどの居住者は自宅近くのいくつかの医療施設を利用しており、特に鈴木医院は昔からのかかりつけとなっていたり、近所にあつたので知っていたので利用したなど認知度が高いといえる。

ここにおいても自宅近辺と門前仲町駅付近との二極化を見て取ることができる。

地域に公共施設やオープンスペースは少なく、利用も多くはない。主に利用されるオープンスペースとして駅前の浜田山公園と善福寺公園、神田川沿いが挙げられる。神田川沿いは散歩の場所や犬を散歩させる場所としての利用がインタビュー11例中5例あり、調査対象全例においてもかなりの割合の者が利用している者と思われる。善福寺山公園は散歩と集合住宅からほどほど距離にある経緯から公園であり、一見神田川沿いより散歩に適した場所であるように思われる。しかし、同じ様に川沿いであるという条件にもかかわらず、利用するのは調査対象全例中5人と神田川沿いの利用者に比べて少ない。この要因としては、井の頭通りを横断しなければならないこと、谷地を降りていかなければならないこと、駅と逆方向にあること等により心理的な距離がきくなっていることが考えられる。



【図3-17 全施設の利用者数—浜田山】

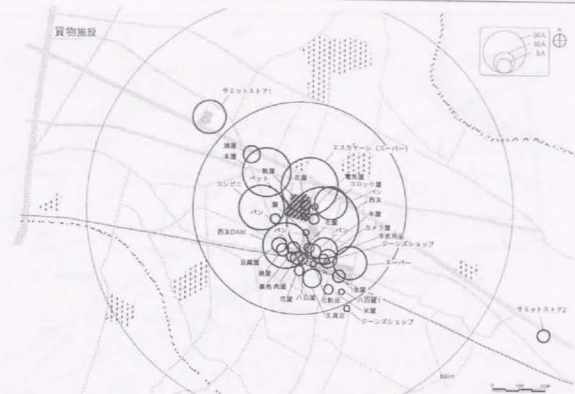


図3-18 買物施設の利用者数

ほとんどの施設が駅と自宅間の商店街のものであり、中でも西友とエスカマーレの利用が群を抜いて多い。多くの居住者が利用する施設と少数の利用者が利用する施設との間での利用者数の差が大きい。その他には駅の反対側の商店街と自宅まわりにあるいくつかの施設以外の利用は少ない。

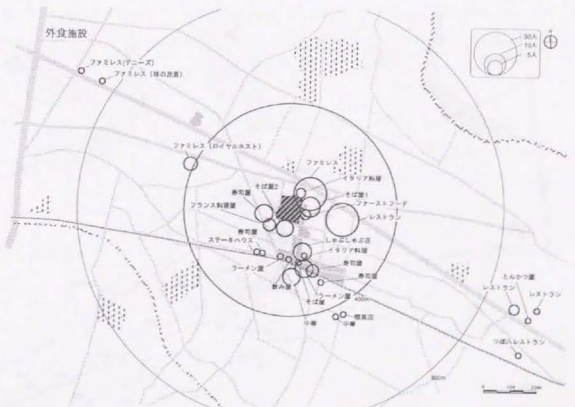


図3-19 外食施設の利用者数

これも駅から自宅までの間に多くの施設が集中しており、その他にいくつかのファミリーレストラン系の店が駅の真横通り沿いに点在する。

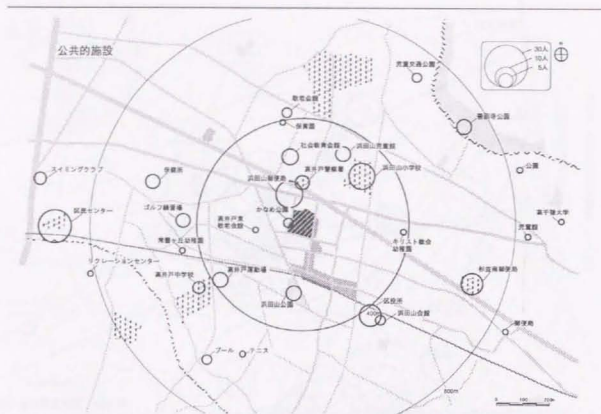


図3-20 公共施設の利用者数
ほとんどが自治体による施設である。地域に広く施設が点在しており、買い物、外食といった民間の施設が多いものが集中して存在するのとは対照的である。

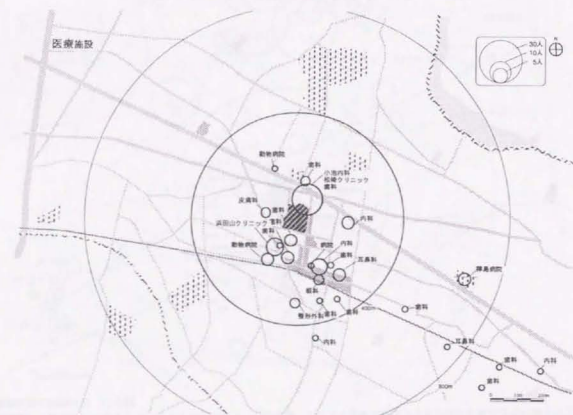


図3-21 医療施設の利用者数
駅から自宅までに施設が集中する傾向があるが、それ以外にも地域内のある程度の範囲に渡って、利用度は少ないが、施設が存在する

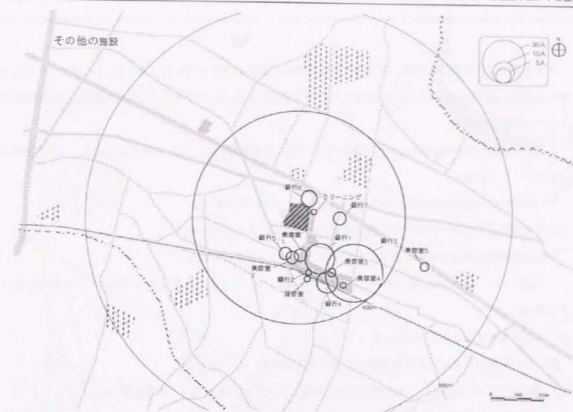


図3-22 その他の施設の利用者数
ここにおいても自宅と駅間に施設が集中しているほか、施設の種類として銀行と飲食店のみであることが特徴的である。

すき野では自宅周辺の商店、飲食店と商店街周辺に利用が集まっている(図3-23、24、25、26、27、28)。駅へと通じる通り沿いにもいくつか利用されている場所を見ることができる。これらの場所の中では特に東急ストアの利用が目立ち、

「昔から個人商店には行かない。東急ストアや丸正で事足りる。あとは本屋さん程度。」(すき野-16)というコメントがあり、

「スーパーができたのでみんなつぶれてしまった。」(すき野-13)

という言葉のようにスーパー以外の商店は魅力にとばしいことが分かる。

一方で積極的に地域を探索し多くの場所を利用している居住者もあり、

「豆腐、パン、魚等は気に入った特定のお店で買っている。こういった店は自分で歩いていてみつけた。」(すき野-30)

といった例を挙げることができる。

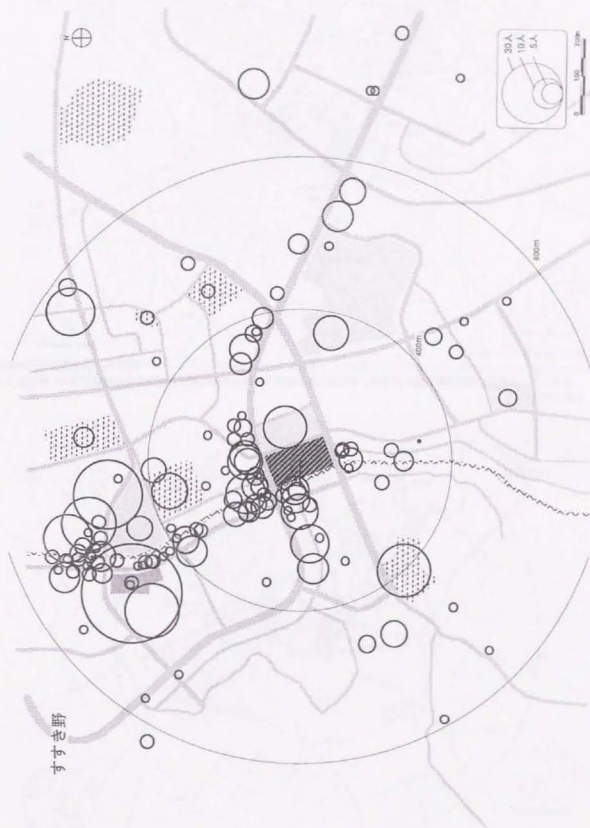
駅からやや離れた立地のためか場所への近さを意識する、

「クリーニングは、新しく目の前にできたお店。便利だから変えた。」(すき野-16)

「美容院は「彩夢」。ここはわりと新しい。それまでは玉川高島屋の「エンドウハツコ」に行っていたが近いから行ってみようと思って。」(すき野-15)

といった意見も多い。

子育て期の世帯が多いのに比較して、近隣の公園の利用はあまり多いとは言えない。利用されているのは調査対象者の住む集合住宅横にあるすき野公園および東急ストアと小学校にはさまれた緑山公園の2カ所が中心であり、他のオープンスペースはあまり利用されているとは言えない。



【図3-23 全施設の利用者数-すき野】

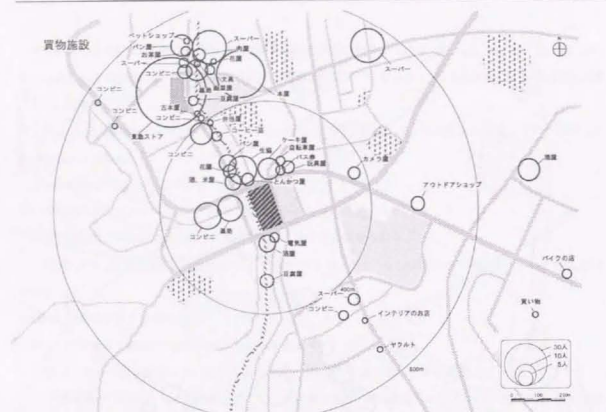


図3-24 買物施設の利用者数

東急ストアと木塚の利用者が群を抜いて多い。その他は東急ストア周辺の商店街と自宅まわりの施設が多く、それ以外の施設は少ない。



図4-21 外食施設の利用者数

外食する場所は地域には少なく、利用者数も多くはない。

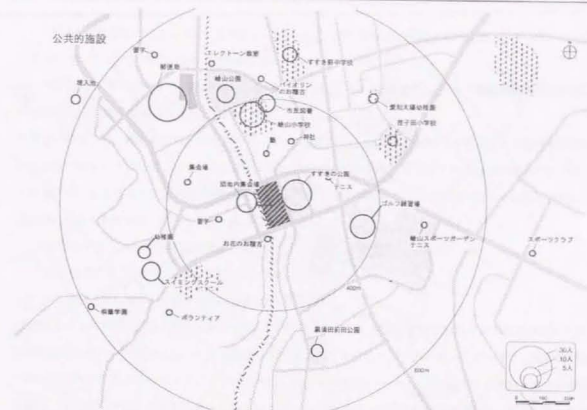


図3-25 公共施設の利用者数

すすき野公園、郵便局といった自宅から比較的近い、自治体による施設の利用が多いが、民間のスポーツ施設や古くから使われる施設のように趣味やレクリエーションのための場所がいくつか利用されているのが目につく。

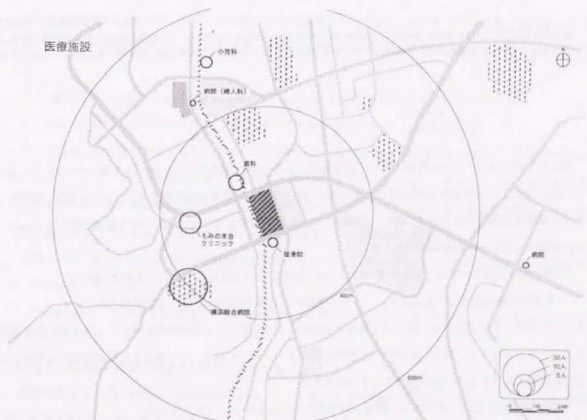


図3-27 医療施設の利用者数

自宅近くのもみの木クリニックと大規模な総合病院である横浜総合病院に利用が集中している。



図4-24 買物施設の利用者数

自宅から商店街にかけて施設が点在すると同時に最寄り駅方向の道路沿いにもいくつか施設が見られるのが特徴である。ガソリンスタンド、コイン洗車のような車関係やペットクリニックといった施設の利用は他の地域では見られないものである。

光が丘ではIMA、IMA南館の2つの商業施設といくつかの公園の利用が目立つ（図3-29、30、31、32、33、34）。光が丘パークタウンでは周辺地域からの利用も想定した大規模な商業施設をIMA（東館、南館）として中央部に計画的に集合させており、利用がIMAに偏る結果になっている。IMA東館を除くIMAとIMA南館にはどちらも商業施設があるが、

「買い物はIMAですることが多い。」「IMA南館はそのときに応じて。」（光が丘-33）

「IMAは特に偏ることなく使う。」「IMA南館は八百屋なんかは使う。」（光が丘-04）

というように、IMAをメインにIMA南館を必要に応じて利用している居住者が多い。IMA内の商業施設を大別するとダイエー、西友のスーパーと専門店街の3つに分けられる。この複合により居住者の必要とする日用品はほとんどIMAでまかなうことができるため、

「特に偏ることなく、ダイエー、西友、専門店街いずれも使う。」（光が丘-04）

として、これらを3つの部分を組み合わせて利用する居住者がほとんどである。

「IMAでは西友のことが多い。品物がいろいろある。肉や魚などの生物は専門店街で。ダイエーは安売りをするので、そういう時に日用品や調味料を買っておく。」（光が丘-10）

「専門店街で買い物をする人が多い。豆腐、肉、野菜、甘い物。食料品はダイエー。洋服、食器は西武。ダイエーにない物が多い。」（光が丘-30）

などというように、食料品や特売品を買うダイエー、品揃えのいい西友、新鮮さを要求される者は専門店街という位置づけをしている者が多い。それぞれの部分の特性を読み取りながら個々の居住者の嗜好により使い分けを行っていると言える。光が丘では生協に加入している居住者も多く、この嗜好に合わせながらの使い分けは生協の間でもなされており、

「生協でしかない無添加の調味料や無農薬の野菜は生協で買う。」（光が丘-10）

「生協は卵、魚、ヨーグルト、牛乳などの乳製品。」（光が丘-32）

といったように無添加の生鮮食料品が一番の購入目的である。

光が丘パークタウン周辺にもコンビニ、ファミリーレストランを主として商業施設がある程度存在するが、利用頻度は高くない。周辺部においてある程度の利用があるものとして、すかいらーくガーデン、藍屋の隣接して建つ2つのファミリーレストランとサンライズという小規模なスーパー、光が丘ホテルといったものが挙げられる。サンライズはすぐ近くの居住者がIMAまでわざわざ買いに出るのが面倒である、少量の買い物や買い忘れた物を買うのが主たる利用である。光が丘ホテルは主婦同士連れ立っての喫茶や家族での食事で使われることが多く、少し改まった場として捉えられている。

光が丘公園は広大であるが、利用される部分はある程度決まっており、中でも一番多く利用されるのは中央部の芝生の広場である。ここでは家族連れで行く居住者が多く、平日に子どもを遊ばせに連れていく以外にも、

「子供が光が丘公園の中央部で遊ぶのが好き。お弁当を持って自転車で行く。」（光が丘-04）

「日曜、主人が休みの時に家族で、お弁当持って一日中ゆっくりと。」（光が丘-32）

というように、休日にピクニック気分で平日あるいは一日中過ごすという利用形態が多い。それ以外では図書館前のサンクンガーデン（段差のあるしつらえと水遊びができる水路がある）とテニスコートの利用が目につく。夏の雲公園、春の黒公園など住戸から近い公園の利用も盛んである。また、夏の雲公園はファミリーマーケットの会場となることもあり、ミニコミ紙や人づてに情報を仕入れ助けることもある。

公園の利用が多いことと、外食が比較的に少ないことは小学生以下の小さな子どもがいる世帯が多いためであり、子供が大きくなった居住者では、

「今は行かなくなりました。子供が小さい時、小学校の中学年くらいまでは、しょつめう行っていた。」（光が丘-10）

というように利用が急激に減少するのが一般的である。

医療施設については情報をごまかに手に入れ、より自分にあった施設を探者とあまりこだわらずに初め利用した所をそのまま使い続ける者がいた。



【図3-29】全施設の利用圏数—光が丘—

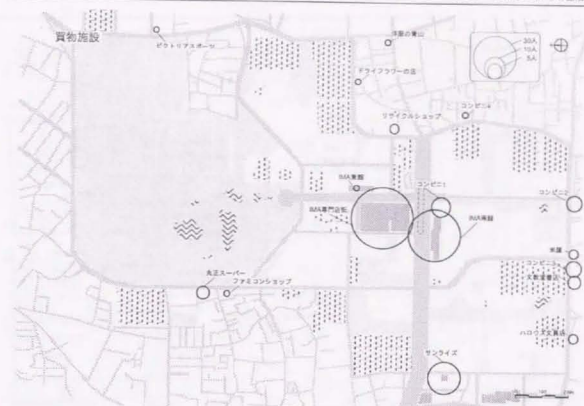


図3-30 買物施設の利用者数

ほとんどIMAの利用である。サンライズという小規模のスーパーの利用も程度見られるが、役割としてはIMAの補完的なものとどまっている。光が丘パークタウンの外周道路沿いの施設もいくつか利用されているが、あまり多くの居住者に利用度されている訳ではない。

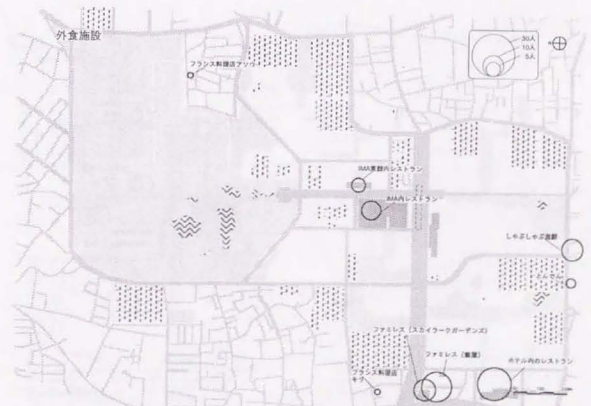


図3-31 外食施設の利用者数

IMA内のレストランもある程度利用されているがその他にも光が丘ホテル内のレストランや外周道路沿いのファミリーレストランの利用が多い。その他の施設はほとんどない。

3.2 地域生活情報を獲得する手段

根津、千駄木を除く5地域で地域での生活に関する情報の入手先と情報の種類を比較する。

・地域生活情報の内容

情報の種類についても各地域によって差が認められる。

一人当たりの情報の件数で見ると、北青山、木場三好の都心に近い地域とすすき野、光が丘の比較的郊外に近い地域とで大きな差が見られる(表3-11)。北青山や木場三好は地域内の広い範囲に渡って、量的にも多くの施設が存在し、普段の行動で自然に地域の生活情報を獲得しやすい地域と言えるのに対し、すすき野は最寄り駅と反対方向に施設が展開している地域であり、光が丘は一ヶ所にかたまって施設が配置されている地域であるために、意識して情報を収集していないと地域の情報が入りにくい地域であると考えられる。この情報に対する意識の違いが、入手する情報の量の違いになって表れているのではないかと推測される。意識されないで自宅から最寄り駅までの間に多くの買い物施設がある浜田山で、北青山や木場三好といった多くの施設がある地域よりも買い物に関する情報量が少ないこともこれを裏付けていると言える。意識されずに獲得されている情報の量を評価することは難しく、必ずしも今回の調査から得られた情報量の値が高くなっている地域の方が生活に関する情報の総量が多いとは言えないであろう。

また、獲得する情報の内容についても地域ごとで違ってきている(図3-35)。これは、地域に流れている情報の内容と量が異なっているだけでなく、求められている情報の種類が地域ごとに様々であることを示している。

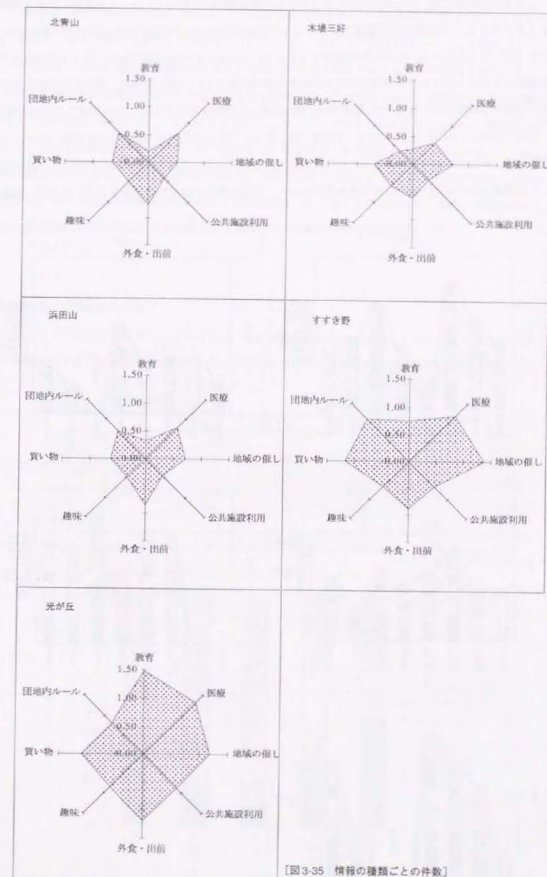
教育に関する情報量は子育て期の子どもがいるかないかで、異なっており、女性単身者や子育て期の子どもが多い世帯が多い北青山で教育に関する情報が極端に少なく、ほとんどが子育て期の世帯である光が丘で教育に関する情報が最も多いなど対照的である。

医療に関してはやはり小さな子どもの多い光が丘での情報量が多くなっている。

地域の値しに関しては郊外の地域になるほど情報量が増えていく傾向が見られる。地域の値しに関する情報については大別すると2種類あり、自治体によって行われる様々な講演会やお祭りといったものとフリーマーケットやバザーなどの民間や学校・幼稚園単位で行われるものに分けられる。

【表3-11】生活情報の種類

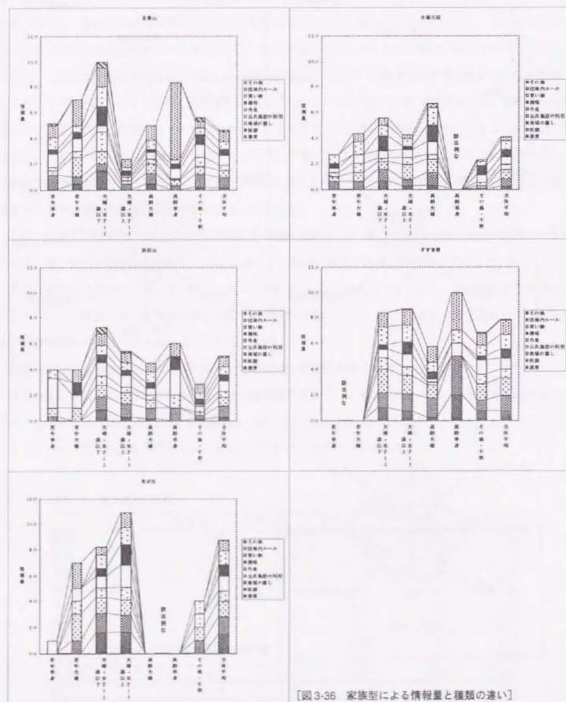
	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
教育	0.20	0.27	0.32	0.75	1.48
医療	0.79	0.54	0.80	1.20	1.30
地域の値し	0.52	0.70	0.72	1.38	1.18
公共施設利用	0.41	0.41	0.44	0.64	0.85
外食・出前	0.77	0.59	0.84	0.88	1.18
趣味	0.48	0.57	0.46	0.66	0.82
買い物	0.66	0.68	0.62	1.16	1.09
団地内ルール	0.79	0.32	0.70	1.11	0.79
その他	0.13	0.00	0.12	0.07	0.03
計	4.73	4.08	5.02	7.84	8.73



【図3-35】情報の種類ごとの件数

公共施設の利用にしても郊外に行くほど少しずつ情報量が多くなっていく。これに関しても2種類に分けることができる。1つは自分達で組織したサークルや勉強会などのために集会所を利用するためのものであり、どこで貸してくれるのか、利用可能時間はどうなっているのかといった情報である。もう1つは個人的な趣味や興味のためのものであり体育館や図書館の利用時間や休館日という情報である。郊外の地域ほど公共施設の利用に関する情報が多くなるのは、郊外のほど地域活動への参加が盛んであることが関連していると思われる。

外食・出前については光が丘を除く4地域では、新しくできた店の情報や既存の店の評判（おいしいか、雰囲気がいいかなど）がほとんどだったのに比較して、光が丘においてはそれに加え、出前をしてくれる店についての情報も多かった。光が丘は開発規模が大きく、また住様の番号づけが分かりにくいために、出前をして



[図3-36 家族型による情報量と種類の違い]

くれる飲食店が少なかったという事情があるためである。

「電話帳で探したけど団地に出前をしてくれる店がなかなかなくて、引越して8ヶ月くらいはびびりながらなかった。そんな話を公園でしたら教えてくれて少しずつ知っている店が増えた。」(光が丘-32)

というように、知人を通して情報を得る人もいるが、多くは広告やチラシによって情報を得ている。

個々の家族型の標本数が少ないものもあるために確定的なことは言えないが、家族型の面から情報の内容を見ると、若年単身、若年夫婦、夫婦+未子12歳以下とライフステージを経るに従って段々と情報量が多くなっていき、子どもが独立していくにつれて減少していく傾向が、ある程度どの地域でも存在していることが分かる(図3-36)。しかし、高齢の単身者になると、情報の内容に地域によって違いがあるものの、また情報量が増加する。特に北青山の高齢単身者においては団地内ルールに関する情報が多く、風呂、洗濯が共用となっており、その使い方に気を配らざるを得ないことがことが影響していると言える。

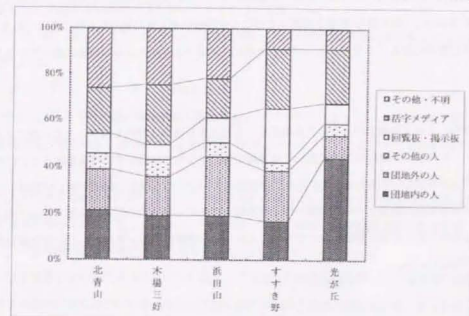
・地域での生活情報の入手先

一人あたりの情報の件数については北青山、木場三好の都心に近い地域とすすき野、光が丘の比較的郊外に近い地域とで大きな差が見られる(表3-12)。自宅のそばに多くの施設があり、普段の行動で自然に地域の情報

[表3-12 生活情報の量]

	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
団地内の人	1.00	0.78	0.96	1.30	3.82
団地外の人	0.84	0.68	1.26	1.71	0.88
その他の人	0.32	0.30	0.32	0.27	0.42
回覧板・掲示板	0.41	0.27	0.52	1.84	0.76
活字メディア	0.93	1.05	0.86	2.02	2.09
その他・不明	1.23	1.00	1.1	0.70	0.76
計	4.73	4.08	5.02	7.84	8.73

一人当たり平均の件数



[図3-37 情報の入手先]

が入る地域と、自宅から離れた場所に施設がある地域や一ヶ所にかたまって施設の存在する地域といった意識していないと地域の情報が入りにくい地域との違いと考えることもできる。情報の入手先でも都心に近い地域ほど「その他・不明」の項目の割合が多くなっており(図3-37)、その中のかなりの部分が「買い物に関する情報」といったように、何らかのメディアを通して得た情報というよりも普段の生活のうちに自然に獲得した情報である可能性が高いことも関連して指摘できる。インタビューにおいても、

「八百屋は通りがかりに見つけた。安い。」(北青山-05)

「その散歩の途中で見つけた店。」(北青山-45)

「飛び込みで見つけた」(木場三好-33)

「いつも通る資料館通りにあるので昔から知っていた。」(木場三好-37)

などといった、普段、別の目的のために歩いているうちに、あるいは散歩の途中で新しい場所を発見する例がいくつか見られた。

入手先については、団地内外を問わず知人からの情報が4割以上になり、口コミの情報が最も重要な情報源になっている。団地内と団地外の人からの情報の量を比較すると団地内外の顔見知りの割合とほぼ同じ比率になっており、団地内に限らず地域の中にある人的ネットワークを利用して情報を手に入れていることが分かる。

広報紙やミニコミなど地域で流通している活字メディアについては各地域とも2割前後で大きな差は見られなかったが、地域での情報の提供に一定の役割を果たしている。広報紙とミニコミは両者のメディアとしての性格の違いから、広報紙からは公共施設の利用や公共施設で行われる講習会、医療(健康診断、夜間・休日時の救急病院など)、杜々の祭礼に関する情報が多く、ミニコミでは外食や買い物、フリーマーケット、バザーに関する情報が多くなっている。

また、わずかな割合ながら、郊外の地域ほど団地内外の知人や回覧版・掲示板等の身近な情報源から情報を得ている傾向が見られる。

内容別の情報の入手先については、教育、医療などについては団地内外の人を中心とした口コミによる割合が高いのが目につく(図3-38)。教育と医療はどちらも生活の中で大きな重要性を持つものであり、また、食事や買い物ほど簡単に試してみることもしづらいために、信頼できる知人からの情報に頼っていることが推測できる。

情報の種類によっては特定のメディアを用意してそれにより地域に情報を流すことも必要であるが、買い物や食事といった非常に日常的な活動に関しては普段の生活のうちに意識せずに情報を知ることができているような状態の方が好ましいと言える。そのためには意識していなくても新しい施設や新しい情報に出会うことのできる生活関連施設の配置といった地域の構造や施設そのものの作り方の計画が必要であると考えられる。意識して手に入れられる情報と意識しないでも手に入れられる情報のバランスがとれている地域のあり方が重要と言えるのではないかと。

3.3 地域の探検誘発性

前節で見たように日常の生活のうちに新しい生活資源を発見するということは自然に起こっている。特に歩くという行為に伴って発見する機会が多い。この歩くという行為を通して地域の違いを見てみる。

・歩くことと生活資源の発見

歩くという行為と生活資源の発見の関係を大別すると、

- (1) 目的を持って何らかの生活資源を発見しようとして歩く。
- (2) 別の目的のために歩いていて、ついでに新しい生活資源を発見する。
- (3) 散歩などの特定の明確な目的のなく歩いている途中に生活資源を発見する。

の3つに分けられるだろう。

特に(2)と(3)のタイプは知らず知らずのうちに地域の情報や場所の知識を増やすことにつながり、自然な形で地域の生活資源を獲得する上で価値があると考えられる。

千駄木、北青山においてはただ散歩するだけでなく途中で出会う様々なもの、店、家々の様子などについてのコメントがインタビュー調査した居住者の多くから得られた。いくつか例を挙げると、

「(地域内の文学散歩をしながら)自分の足で歩き回り、新しくお店を開拓したりするのが好き」(千駄木A-10)

「西日暮里駅を使うようになって谷中銀座が思ったより近いことを知った。」(千駄木K-52)

「散歩は、表参道や青蓮通りを、お店を見ながら歩くことが多い。」(北青山-27)

「(手作りパンのおいしいパン屋は)休みの日にぶらぶらして見つけた。」(北青山-45)

「散歩は外苑の絵画館の方まで友人とぶらぶらしに行く。あとは表参道を買い物物がてら散歩したり、渋谷に行く時に表参道に直交している遊歩道を歩いたりする。」(北青山-56)

となる。このように(2)と(3)のタイプの歩きが多い。その他特に目的を持たずぶらぶらと散策する例もいくつか見られる。

木場三好でも(2)・(3)のタイプは見られるが、

「涼しいときは毎日木場公園や清澄庭園に散歩あるいはジョギングをしている。」(木場三好-16)

「清澄庭園は、素晴らしい庭で、行くときには、散歩というより、そこに行くことを目的に行く。」(木場三好-33)

と、散歩のような歩くこととその途中でのいろいろな物事の発見ということよりも目的を持って移動することに重点が移ってくる(註3-1)。また、木場公園、富岡八幡宮、清澄庭園などのある意味では地域の名所とでもいえるべき規模の大きな場所を目的地とするものが多い。

浜田山、すすき野、光が丘では(2)・(3)のタイプはほとんど見られなかった。浜田山では神田川沿いでの散歩、すすき野では並木道での散歩、光が丘では公園での散歩と散歩行動自体は多く見られるが、千駄木や

北青山のようなることによって生活資源を発見したり、地域のいろいろな変化を楽しむというような例は少なかった。

・歩くことを誘発する地域

このように歩くあるいは散歩という生活行為一つとってみてもそのあり方は個人個人、対象地によって様々である。地域によっては(2)や(3)のタイプによる生活資源の発見があまり行われていない所もあるが、そのようなところでも散歩といった(2)や(3)のタイプの生活資源の発見に結びつきやすいような行為が行われていないわけではない(表3-13)。それでも地域間に差が出てくるということは、歩くという行為に対応して生活資源を発見できるような地域の構造が用意されているためであると考えることができる。千駄木、北青山、木場三好では住宅地と商業地が混在して分かれていない訳でなく、地域内に広く分布している一方で、浜田山、すすき野、光が丘では住宅地と商業地の区分がはっきりしている。また、浜田山での神田川沿いやすすき野での並木道といった所は住宅地の中の道であり、光が丘でよく散歩に使われるのは公園であるために、散歩の途中でたまに新しい生活資源を発見するという可能性が低い。

【表3-13】散歩に関するコメントをした人数

	千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
コメントあり	10	11	8	11	10	10

さらには、千駄木や北青山では何となく歩きたくなる地域の雰囲気とも言うべきものがあり、

「歩いてみてふいふものが残っているとほっとする。」(千駄木A-32)

「裏門板のあたりや根津の奥のほう等の変化に富んだ藪っぽいところへ散歩しに行く」(千駄木K-10)

「ブラブラしながら表参道や246号線歩く。歩道が広くゆったり歩ける。」(北青山-05)

というように地域が明確な目的なく歩くことを許容していたり、歩くことを誘い出す性質を持っていることが分かる。

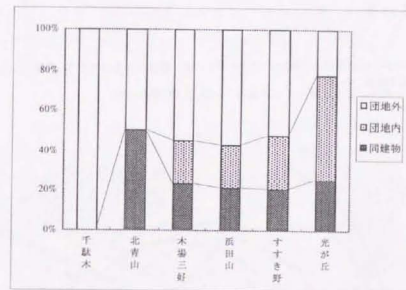
様々な場所が地域内に広く分布していることも含めて、このような歩くことを誘発し生活資源を発見することを可能にする、地域の探検誘発性が生活資源の発見に際して重要な意味を持っていると言えるだろう。

3.4 つき合いの様態

つき合いのある人々も生活資源の重要な構成要素の一つである。訪問する知人宅はその場所そのものが生活資源となるし、知人と連れだってある場所を利用するような場合はその知人はその場所が生活資源となるうえで欠かせない要素である。

・知人の分布

知人の人数は、いずれの調査対象地においても半数以上は団地外の人とのつき合いとなっており(図3-38)、必ずしも近距離に住む者とのつき合いが多くなっているわけではないことが分かる。特に光が丘だけで半数以上の人数が団地内となっているのは、開発規模の大きさから、他の調査地では団地外となる範囲までが開発範囲になっているためであり、これはアンケートにおいて地図上に記入された訪問する知人宅の分布からも確認できる。



【図3-38】知人の分属

A1大地図のアンケート票に書き記された訪問する知人宅の位置をもとに知人の分布範囲を集計すると、利用する生活関連施設の場合と違い、ほとんどの居住者にとって知人が住むのは自宅から800m以内の範囲に収まっており、浜田山を除けば400m以内におさまるのが全居住者の4割以上になる(表3-14)。この集計方法によりすべての知人宅を集計することはできないが、「訪問する」という特に親密な関係にある知人の住む場所を通し

【表3-14】知人の分布範囲

	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
～400m	12	9	3	15	17
～800m	4	7	11	18	6
800m～	0	3	5	3	1

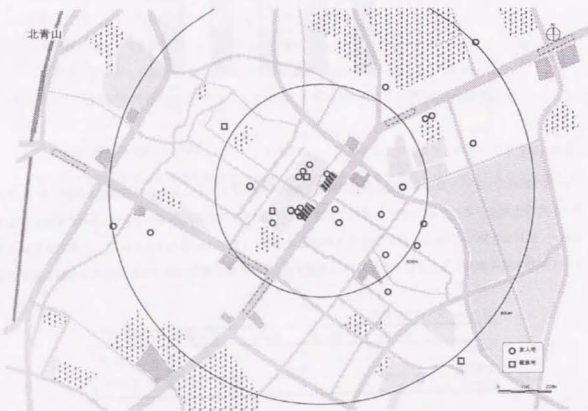
て知人全体についても推測できる。知人があまり広い範囲に分布していない理由は、次節で見るように、顔見知りとなるきっかけとして子どもを介して親同士がPTAなどで知り合いになる場合が多く、学区を超えるほどあまり離れたところに住む知人とのつき合いは少ないためと考えられる。それ以外の場合では同じ団地内の人であったり、サークルなどで知り合った人でも自宅が近くの者同士でのつき合いが多くなるためではないかと推測される。800mより遠くに知人宅がある居住者でも、そのような知人宅はほとんどの場合1軒か2軒のみとなっている。

このように、人間関係は必ずしも団地内に限らず地域内に展開しているが、ある程度の距離内に収まっている者が多いと言える。特に訪問するような知人は自宅からほぼ800m以内に住んでいる例がほとんどであった。

以下、各地域での訪問する知人宅の分布について簡単に述べる。

北青山では、地域の人口がそれほど高くなく、単身で地域との関係が薄い居住者が多いためもあり、散在体があり多くなく、分布範囲も6割以上が半径400mの円内に含まれてしまう(図3-39)。本章3.1でも見たように行動範囲が他地域に比べて狭い居住者が多いことも関係していると思われる。また、小規模な商店などの経営者とのつき合いも、

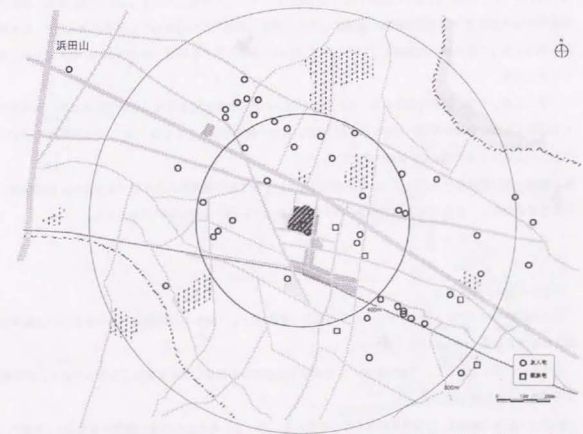
「店のオーナーが同年代の女性なので話が合い、時々電話がかかってきて、今暇だから店に遊びに来ないかといわれて行ったり、わりと親しくつきあっている。」(北青山-27)



【図3-39 訪問する知人宅・北青山】



【図3-40 訪問する知人宅・中野三軒】



【図3-41 訪問する知人宅・浜田山】

というような感じで行われている。

本郷三好においてはほとんどが自宅近くと小学校区内であり、それ以外での訪問するような知人宅は少ない(図3-40)。また、同じ団地内でのつき合いもある程度あることが分かる。

浜田山では、利用施設の分布範囲と対照的に駅と反対方向である井の頭通りを越えた方面に知人宅が多く見られる(図3-41)。これも小学校区に含まれる区域の者が多く、子供を介したつき合いが多く行われているためとみられる。団地内においては、特に通りに面して商店を営む者とのつき合いが多くなっており、

「おもちゃ屋をやっている子どもやお客さんが大勢やってくるので、この辺りの地域では顔が広い方だと思う。」(浜田山-33)

というように商店が団地内の居住者のつき合いを繋ぐ場所として機能しているのを見ることができる。

すすき野では団地内に多くの知人宅がある(図3-42)。階段室ごとで草取りや掃除といった管理の時に知り合ったり、

「集会所は私は使っていないが、油絵、コーラス、読書会など団地の方であつたりよそから来て借りている人もいる。」(すすき野-13)

といったように、以前、団地内の施設を使った活動があったことが影響していると思われる。また、調査対象者の住むすすき野第三団地には過去に隣接するすすき野第二団地などに居住していた者が数名おり、その時に知り合った知人とつき合いが継続しているために、図5-5においてすすき野第三団地の北西に知人宅が多く見ることができる。

光が丘においては、調査対象者の多く住む南西の部分に多くの知人宅を見ることができるほか、光が丘大通りを越えて北側に住む知り合いは少ない(図3-43)。また、範囲的にもあまり広くなく、1人を除きすべての居住者の知人宅は自宅から800m以内の範囲にある。

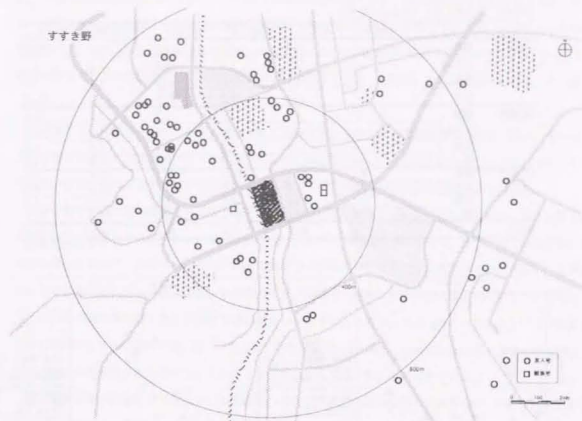
他の地域と違い親族が一人もいないのも特徴的である。子育て期の世帯がほとんどであるほか、居住年数の長い居住者が少なく、子供が独立して住み始めるまでに到っていない世帯が多いためである。

・知人の人数と交際の深さ

知人の人数では、すすき野、光が丘という周囲も住宅団地として開発された地域でのつき合いの人数が他地域と比較すると多くなっている(表3-15)。

つき合いの深さを見ると、千駄木を除く5地域では挨拶のみの関係の者が6割以上となっており、立ち話も合わせると9割を超える。

挨拶のみの知人を除き、ある程度の深さのつき合いをしていると考えられる者の数だけを取ると、北青山、浜田山で10人代後半と少なくなっており、光が丘では37.0人とかなり多くなっている。立ち話または訪問する人



【図3-42 訪問する知人宅-すすき野】

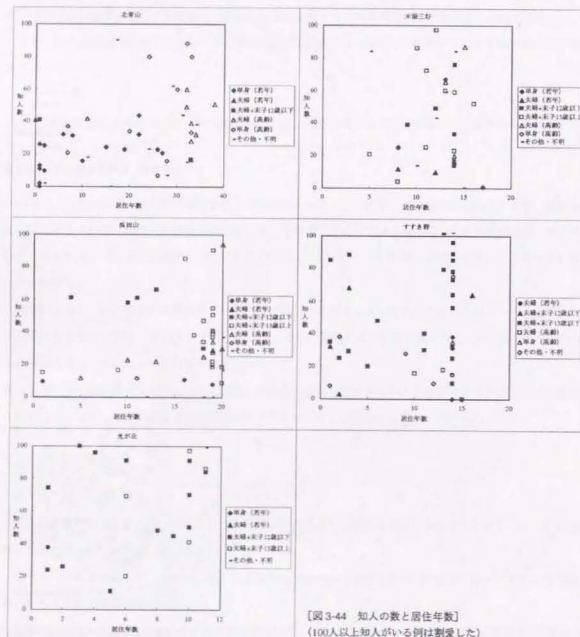


【図3-43 訪問する知人宅-光が丘】

【表3-15】知人の人数とつき合いの深さ

		千駄木	北青山	木場三好	浜田山	すすき野	光が丘
同建物	挨拶	---	14.9	7.9	7.2	10.0	18.0
	立ち話	---	5.7	3.5	2.8	4.2	5.1
	訪問	---	1.8	1.6	0.5	1.1	1.7
	計	---	22.4	13.0	10.5	15.2	24.8
団地内	挨拶	---	---	3.3	7.7	12.9	31.5
	立ち話	---	---	2.0	2.5	5.8	14.9
	訪問	---	---	6.9	0.4	1.4	4.6
	計	---	---	12.2	10.6	20.1	51.1
団地外	挨拶	4.1	14.1	15.8	17.5	22.8	11.5
	立ち話	6.0	5.4	7.5	7.5	12.6	6.9
	訪問	2.2	2.6	6.9	3.1	3.4	3.7
	計	12.4	22.1	30.2	28.0	38.8	22.1
総計		12.4	44.5	55.4	49.1	74.1	98.0

一人当たり平均

【図3-44】知人の数と居住年数
(100人以上知人がいる例は割愛した)

数の割合を見ると、木場三好においてのみ知人全体の半数を超えるが、他の地域では35%前後であり、あまり大きな差はない。立ち話をする知人の割合に地域間で大きな差はなく、訪問するつき合いのある人の割合が木場三好において27.8%と他地域に比べて高くなっているために、立ち話+訪問の割合が特に大きくなっている。訪問するような知人の割合は他の地域においては1割以下であり、人数的にも最も光が丘で10人とさほど多くはない。

居住者によってはつき合いのある人数が100人を超えるような広い交流関係を持つ者もいるが、そのほとんどはやはり挨拶と立ち話程度であり、訪問するようなつき合いをしている知人が20人以上となる者はごく一部である。また、このように多くの人と交流がある場合、そのほとんどの相手は団地外の人である。

居住年数と知人の数の関係を見ると、すすき野と光が丘以外では居住年数が増えるに従って知人の数も増えていく傾向が見られる(図3-44)。これは、家族型ごとに見ても同様な傾向がある。また、同じ居住年数においては北青山を除いて、夫婦のみの世帯や単身の世帯より子供がいる世帯の方が顔見知りの数が多い。北青山においては高齢単身者に知人が多いのは、単身者用住戸では風呂、洗濯などが共同施設を利用することになっているために同じ階の居住者と顔を合わせる機会が多いからであると考えられる。表3-15においても、北青山での同じ建物内の知人の数は木場三好、浜田山、すすき野よりかなり多く、光が丘に迫る多さであるのに対し、団地外の知人は光が丘と並んでもっとも少なくなっていることがこのことを示している。

居住年数が長い居住者や子どもがいる家族型の居住者が多くの知人を持っているのは、それぞれの居住者がいくつかのライフステージを経ていくにつれて、個人的な活動、社会的な活動を通して顔見知りを増やし、人間関係を拡げていくためだと思われる。以下では具体的にどのようなきっかけによりつき合いが始まるのかを見ていく。

・子どもをきっかけとしたつき合い

今回の調査対象とした居住者のうち多くの部分が子育て期の母親、あるいは子育てを終わった母親である。そのために子どもの学校、幼稚園などの関係で知り合いの始まった例が多く見られる。つき合いの始まったきっかけこそは学校であるが、その後つき合いの続く相手に関しては子どもの学校卒業後も定期的に集まる母親だけのつき合いが続いている例が多く見られる。

「PTA関係でのつきあいはまだ続いていて、共に旅行などに年2回行く。」(千駄木A-34)

「おなじルネにはいていた人で、PTA関係の知り合いはいない。いまだにお付き合いがある。」(千駄木A-42)

「子供は大きくなって子供同志は関係がなくなったが、親同志は今でも親しくしていて、今度も7人で仲間に行く予定。」(北青山-04)

「近隣とお付き合いはとくに子供ができてから始まった。」(浜田山-22)

「幼稚園の時のお友達はとずっと月に1度集まっていた。会費を取って、ファミリーレストランみたいな所で食事をする。たまには都内に出てフランス料理や懐石で食事したり高尾山に行くことも。会費がたまった

ら、何年かに一度は旅行にも行く。」(光が丘-10)

と食事、観劇、ショッピング、旅行等と一緒に出かけられるようになる。その他にも、

「ブレイロットに集まった仲間を中心にルーナ(テニスサークル)ができた。」「旦那達と一緒にやる様になって、そのうち自分たちだけのサークルを作った」(光が丘-07)

というように趣味のサークルや生協といったグループを作って子ども関係に限らない人間関係として展開させていく例も見られた。この場合はテニスコートや生協商品を配布する家といったものが居住者の生活を展開させていく生活資源として機能している。

もちろん、子どもの卒業後は疎遠になり付き合いが消滅していくのを寂しがる例も見られた。

また、付き合いが始めるのは学校関係に限らず、子どもが小さい場合には子どもを公園などで遊ばせるうちに母親同士が知り合いになることが多く、

「公園で知り合った方とは今でも行き来したり付き合いはある。子供の手が放れてからも子供なしでもお付き合いできる。子供の存在は大きい。子供がいなかったらこんなに友達ではできなかった。」(浜田山-22)

「小さい子がいる同士で何となく公園で声をかけ合ったり、同じ棟内で小さい子を連れていってお母さんと挨拶したりして知り合う。」(光が丘-33)

というように子供を介して親同士の付き合いが広がっていく。

子育て期の子供がいる者においては子供をきっかけにした付き合いに偏る傾向があり、

「子供が小中高ぐらいまでは子供を通したネットワークがあったが、それをはずすとほとんどない。」(浜田山-24)

「最近越してきた人は子供の関係もないので話したこともない。」(すすき野-31)

と子供以外の人間関係に関しては希薄になる者が多い。

しかし、子育て期の子供もいる者においては、子どもをきっかけにした付き合いに偏る傾向があり、

「子どもが小中高ぐらいまでは子どもを通したネットワークがあったが、それをはずすとほとんどない。」(浜田山-24)

「最近越してきた人は子どもの関係もないので話したこともない。」(すすき野-31)

と子ども以外の人間関係に関しては希薄になる者が多い。

子どもをきっかけとした付き合いの場合、付き合いの相手は小学校の学区内に広く分布する。そのため、前項で見たように、木場三好、浜田山、すすき野において訪問するような付き合いのある人の範囲が800m以内の範囲にまわっている居住者の割合が比較的多いのは、子育て期の世帯が多いことから説明できる。一方で子育て

世帯が最も多いのは光が丘で400m以上に渡って付き合いのある人が少ないのは、光が丘が高層集合住宅を中心とした高密度の住宅地であるために、小学校区が他の地域に比べて狭いためであると言える。

また、このこどもをきっかけとした付き合いに似通ったものとして、犬を介した付き合いが挙げられる。犬の散歩の途中で同じように犬を散歩させている人と知り合う形である。「犬を通じて、合うと挨拶するようになったり、名前が知らないけれど顔は知っているとか。うちの犬は人見知り、犬見知りしないので走っていってしまう。そこから、おはようございますとか話が出てくる。」(浜田山-22)

これは数としては少ないが自然な形でお互いにコミュニケーションを始めることができることが評価できる。

・場所を介した付き合い

人間関係を作るためには人と出会うという面と付き合いを深めていくという面がある。このうち付き合いを深めていくような行動が行われる場所として自宅と自宅以外の商店、飲食店、公共施設などがある。また、前項で述べた公園での付き合いは、子どもをきっかけとした付き合いと場所を介した付き合いの両面の性格を持つものの例と言えるだろう。

自宅での付き合いはこの節のはじめで見たように量としてはあまり多くない。次項で見るように深い付き合いを避けてあえて上り込まないことも影響していると思われる。

「引越した頃、近所のペット屋さんに「猫あげます」という写真が張っており、それを見て連絡をとり猫をいただいた。それまでは全然知らない人だったが、たまたま3丁目に住んでいた為、時々猫の様子を見に来て、お茶を飲んで夕方まで話をしたりする。」(浜田山-09)

というように、たまたま知り合いになった人と自宅での付き合いを通して親しくなっていく例も見られたが、自宅における付き合いはほとんど子どもの関係で付き合いができた人、隣近所の人との付き合いであり、

「お母さん達が、・・・「今度ガレッジセールしましょう」とか、「作りすぎたから食べて」とか、で知り合いが増えた。家でフリーマーケットみたいで、パズワークで作ったものや、着れなくなった服等を交換した。」(浜田山-09)

というように付き合いを深めていく。

自宅以外の場所での付き合いとしては、主に飲食店と公共(的な)施設がある。

飲食店では店主との付き合いと他の客との付き合いに大別されるが、他の客との付き合いでは、

「向かいの小料理屋で知り合った近所のおばちゃんに田舎から送ってきた野菜をお裾分けする。」(根津C-40)

「よく行く居酒屋で知り合いになった人達にいい店を教えてもらったり、その人達の家に遊びに行く」(千駄木K-12)

のように他の場所でのつき合いに展開するコメントが多かったのに対して、店主とのつき合いでは、

「青山小学校前のブティックは、服が気に入って通っているうちに、ママと親しくなった。旅行に行った時に、おみやげを買ってきてくれたりする」(北青山-10)

「店のオーナーが同年代の女性なので話が合い、時々電話がかかってきて、今暇だから店に遊びに来ないかといわれて行ったり、わりと親しくつきあっている。」(北青山-27)

のように店を中心にしたつき合いにとどまる例しか得られなかった。

ある場所を介してのつき合いはその場所を使う第一義的な目的があることがほとんどであるために、そこで出会う人と自然につき合いを始めることができ、

「お風呂屋さんで知り合い、どこの誰かは知らなくても、顔だけ知っていて、会うとよく話すということも多かった。」(根津D-05)

「ラジオ体操が終わって一緒にお茶するわけでもないし、特別に集まって食事をしたりするわけでもないのだが、毎朝集まってみんなと雑談することがとても楽しい。」(浜田山-33)

のように特に親しい関係ではないが、なんとなく親密感のわく関係を築いていくことのできる可能性を持っている。

・あっさりとした人間関係

すべての調査地において共通してみられたつき合いに対する態度として必要に応じた時だけ必要に応じた関係を持つようなさらっとした関係を持つようにしていることが挙げられる。常に深い関係を持ち続けることを負担に感じている居住者が多い。また、このようなさらっとした関係を多くの居住者が評価しており、例えば、

「上がり込んでくちやくちやお喋りしない。誰かに教わってそうしているというより、皆そうしているので自然とそうしている。」(根津A-038)

「近隣交流は「サラサラくらい」がよい。挨拶してたまにお茶するくらい。現状の近所つき合いに満足している。」(北青山-05)

「ここは昔から言われるような下町風情はあまり感じられない。近所付き合いがないからかもしれないが、

意外とクールなところがある。ベタベタしたところがないのが好きである。」(木場三好-27)

「個人個人はきちんと独立はしているけれど、何かあった時に声がかかれれば助け合える事が必要だと思う。」

「あまりなまかまでは踏み込まず、一線を引いた状態で付き合い合いたいと思う。」(すすき野-30)

といったコメントをしている。これは、一般的に下町と呼ばれるような根津、千駄木、木場三好と行った地域でも同様である。

それぞれの地域は何らかの社会的なイメージを持っており、そのイメージには街並みや景観といった物的なイメージだけでなく、その地域に住む人々の生活と様々な行動のイメージも含んでいる。「下町」と言われる時はステレオタイプとして親密すぎるぐらいの向こ三軒両隣なつき合い方が想起されたり、「ニュータウン」と言われる場合は居住者同士の人間関係が少ない、社会的関係の薄さを感じ出されたりするかもしれない。

しかし、実際の地域生活においては人間関係の濃淡こそあれ、お互いのことを認識しながら、それぞれの生活を尊重して人間関係において適度な距離感を保ち、必要に合わせて関係を持つ「共生の作法」(奥田他、1994、楠他、1996)が作り上げられていると言えるのではない。

3.5 生活資源を獲得するきっかけ

居住者がどのように生活資源を獲得していくかは地域での確立していくことに重要なことであると思われる。

「3.1 情報を獲得する手段」および「3.3 地域の探検誘発性」で見たように、新しく場所を知り生活資源として使い始めるきっかけは様々であるが、今回の調査で得られたものは大きく4つに整理することができる。

・知人に連れられて知ることによる生活資源の獲得

これは知人が利用している生活資源、あるいは生活資源として利用したいと思っていた場所に連れられていくことによって新しい生活資源を知り、利用するようになるものである。

この場合、新しい生活資源において新しい情報を手に入れたり、そこで出会った人に連れられるなどしてさらに新しい生活資源を獲得する。

「山岳サークルの知り合いが近くに住んでいたために、その人に「乱歩」を教えてもらった。」「乱歩ではおおくもともと住んでいた人の知り合いが出来た。上がり込んだりする仲の人もいる。二十歳ぐらいの人からお年寄りまで幅広い。」(千駄木K-12)

「夫婦で門前仲町まで歩いて、2軒ほど決まっていく店がある。主人一人で行くこともあり、行くとき知り合いがいるときもあるし、いなくてもすぐに友達を作ってしまう。」(木場三好-28)

ような場合と、その生活資源を介してはそれ以上新しい生活資源を獲得することのない、

「アソウ（フランス料理）は友人から教えてもらった。味がいい、家族的な雰囲気、込んでいなくてゆったり楽しめる。お店の方と知り合いになるまでは行ってない。」（光が丘-07）

のような場合がある。

・知人の情報から知ることによる生活資源の獲得

これは前項のタイプと似ているが、誰か他の人が利用した後で、その場所の評価をもとに利用するというところに特徴がある。

「マンションの方からロコミで店の場所を知ったりする。」（千駄木K-49）

「フランス料理『はっとり』は何かの話のついでに出たのを覚えていて行ってみた。」（木場三好-33）

「松葉寿司」や魚屋は昔から（木場があった時代から）住んでいる人に紹介してもらった。」（木場三好-33）

「飲食店はロコミで聞いて利用する。」（すすき野-31）

「バザーの場所は夏の公園でやっているというのを子供の友達のお母さんから聞いた。」（光が丘-04）

「シェ・アソウ」友人から教えてもらった。」（光が丘-07）

「すかいらくーガーデンは友達から朝食バイキングがいろいろと聞かされて、主人と土曜日にランチをとりに行ったことがある。」（光が丘-30）

「ここ（春の風公園）でプレ幼稚園のことを教えてもらった。」（光が丘-32）

といったように、量的には最も多いタイプである。

特に医療については積極的に知人に情報を教えてもらい、利用する例が多く見られた。いくつか例を挙げる。

「青山クリニックは健康診断の時どこに行こうかと思っていたら団地の5階に住む友達から教えてくれた。」（北青山-28）

「どこかにいい歯医者がいない？」と聞いたら教えてくれた。」（木場三好-16）

また、情報を手には入れ、利用したいと思うが何らかの理由により利用に到らない例もいくつか見られる。

・地域のメディアからの情報による生活資源の獲得

「3.2 情報を獲得した手段」で見たように、情報の約2割は地域の活字メディアから得たものである。例えば、

「ドライフラワーの店『月刊光が丘』というミニコミ紙に出ていた。」（光が丘-30）

といった例が挙げられる。

・自らの足を使った生活資源の獲得

これは自分で地域を歩いた結果、新しい資源を発見して使い始めるようになるものである。何らかの機能を持った生活資源を発見するために、

「新しい店は基本的に自分の足で開拓する。」（千駄木K-10）

というように目的的に歩いて見つける例と他の目的のために歩いていてそのついでに見つける。

「お店は目的をもって歩いているときに見つけて、あとでゆっくりためしに行くというのが多い。」（千駄木A-47）

「新しくできた『安いカラオケBOXキャロル』は団地の2〜3軒となりで、道を歩いていて自分で見つけた。」（北青山-27）

という例とがある。

また、他の地域において既に良い評価や印象を持っている、スーパーなどの系列店であることから地域内にその系列店を使い始める例もこのタイプに含めていいだろう。

「最近できた『富士マート』は、その本店が西島にあり、そこで支店が近所にできることを知り行き始めた。」（木場三好-28）

「美容院（表参道沿いのスタジオV）は以前から同じ系列の店に行っていた。ここに住むようになってから近いほうがいいと思って表参道店に行くことにした。」（北青山-47）

・習慣で利用し続ける生活資源

また、居住者の選択の結果というよりも知らず知らずのうちに習慣的に利用していたり、初めは他に選択肢が無い時に使い始めその後もそのまま使い続けるような例が見られた。

木場三好においては居住者の中には子どもの頃からこの地域に居住している者が数名みられた。こういった居住者は同じような機能を持つ場所を新たに使い始めるといったことは少なく、

「（鈴木病院は）子供の頃から親に連れられて通院していたので、先生が替わっても安心して利用できるし、時間外でも融通してくれる。」（木場三好-31）

といったように使い慣れた場所を使い続ける傾向がある。

すき野や光が丘のようにニュータウンとして開発された調査地では建設当初は生活関連施設が少なかつたために、居住年数の長い居住者においては、

「20年間同じ店にいつている。当時はこともう一つくらいしかなかった。」(すき野-31)

「ここしか眼科がなかったので開業した当初から行っている。」(光が丘-02)

「小児科はここ(飯島医院)しかなかった。」(光が丘-10)

と、初期の頃からの場所をそのまま使い続ける例が見られた。

3.6 生活資源から見た行動範囲の展開

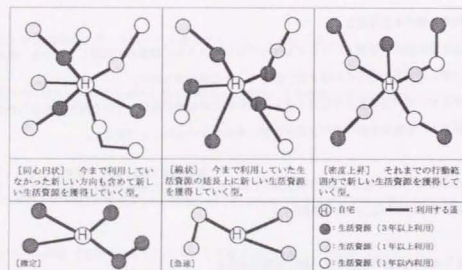
本節では、獲得される生活資源の地理的な配置が時間と共にどのように変わっていくのかを分析する。これによって居住者が地域のどのように生活を展開させて行っているのかを見ることが出来る。

生活資源と行動範囲の変化のタイプとしては以下の3つのタイプがある(図3-45)。

- (1) 同心円状の展開
- (2) 線状の展開
- (3) 生活資源の密度の上昇

また、個々の居住者においてはこれらの3つのタイプが複合したものも見ることができ、今回の調査では(1) + (3)と(2) + (3)の複合がほとんどであった。

アンケートにおいては場所を使い始めた時期を、3年以上前・1年以上3年未満・1年以内の3つの期間に分けて質問したため、ここ3年以内に使い始めた新しい場所がなく、3年以上前からの確定した場所のみを利用



【図3-45 生活資源と行動範囲の展開の型】

している例や、1、2年の短期間のうちに利用する場所を急速に獲得してしまいその後の変化が見られない例も見られた。

これらのタイプの各調査地ごとの人数は表3-16のようになる。

北青山では確定型の居住者が多いが、その多くは居住年数20年以上であり、居住年数の長い調査対象者の多いことが表れていると言える。

行動範囲の広く、自宅と最寄り駅の2点を極とするような生活資源の利用するパターンの居住者が多い本場三好で密度上昇型が多い。居住年数が10～19年の比較的居住年数の長い居住者がことから確定型もある程度見ることができる。

浜田山では同心円状、密度上昇、確定の3つの型が代表的である。駅、商店街、最寄り駅の近接したこの地域では住戸周辺では

すき野では線状型(および密度上昇+線状型)の割合が前3地域に比べて大きくなっているが、これは住戸から商店街へと伸びる線と住戸から駅へと延びる線に沿って存在する生活資源を新たに利用していることによるものである。

光が丘においても密度上昇+線状型の居住者が多いが、住戸から1MAを越えて光が丘公園内に新しくできた図書館と体育館の利用を始めたタイプと、新しい知人を訪問するようになったタイプとがある。

5地域をまとめてみると居住年数が20年を超えるものに確定型の割合が高く、それよりやや居住年数の短い者においては同心円状型、密度上昇型、複合型の割合が高い。

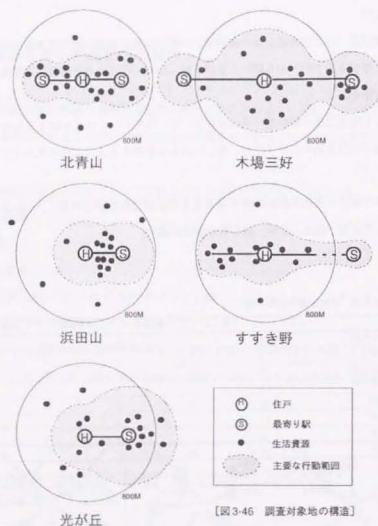
【表3-16 生活資源の展開の型】

	北青山	本場三好	浜田山	すき野	光が丘
同心円状	8	3	12	8	11
線状	2	1	2	4	3
密度上昇	9	17	14	18	7
複合型*	3	6	9	25	32
確定	20	10	17	15	0
急座	11	0	4	7	3
不明	4	3	4	0	0
合計	57	40	62	77	56

* 密度上昇+同心円状 密度上昇+同心円状 密度上昇+同心円状 同心円状+線状+密度上昇+同心円状
線状+密度上昇+同心円状 線状+密度上昇+同心円状 線状+密度上昇+同心円状 線状+密度上昇+同心円状
線状+密度上昇+同心円状 線状+密度上昇+同心円状 線状+密度上昇+同心円状 線状+密度上昇+同心円状

3.7 各調査対象地の構造

本章で見てきた生活資源のあり方から各地域の構造を模式的に表すと以下の図のようになる(図3-46)。地域を中心となるものとして住戸と地域外への移動の拠点となる最寄り駅を選び、これらを結ぶ軸を横軸にとる。縦軸はこの軸からはずれて地域内にどれだけ生活資源が広がっているかを表す軸である。さらに、駅への距離の大小と生活資源の分散の度合いの大小をもとに4つに分けると下の表のようになる(表3-17)。



[図3-46 調査対象地の構造]

[表3-17 調査対象地の分類]

		生活資源の分散	
		大	小
駅への距離	大	木場三好	すすき野
	小	北青山 光が丘	浜田山

以下、各地域の特徴を簡単に説明する。

北青山では至近距離(約300m~400m)に最寄り駅が2つ反対方向にあり、横軸に沿って両方向に生活が開いている。この横軸沿いに非常に多くの生活資源が存在し、駅を越える場所まで生活資源として利用されているが、住戸から半径800m以内のものが多い。生活資源は住戸と駅を結ぶ軸に沿って集中しているだけでなく、地域内に広く分布している。

木場三好においても最寄り駅は2つあり、生活資源は自宅の付近と最寄り駅の一方の付近の2ヶ所に集中している。住戸から駅への中間地帯に色々な種類の生活資源があり、地域の広い範囲に生活資源が分散しているが、自宅と駅を囲む範囲の外にあるものは少ない。

浜田山では駅と住戸が約300mと近接しておりこの短い距離の間にほとんどの生活資源が集中している。この範囲の外においては生活資源はあまり多くなく、住戸から半径400m以内にはほとんどの生活資源が存在し、その外で多くの居住者に利用されている生活資源は少ない。

すすき野では駅は近隣から離れたところにある。駅へ向かう軸沿いにもいくつか生活資源があるが、ほとんどは自宅まわりと駅と反対側の方向に存在する2極構造である。その他の方向にある生活資源は少なく、広く地域に分散しているとはいえない。

光が丘では自宅のそばに知人や公園といった生活資源がある。一番多く生活資源が集まっているのは駅のまわりであるが、さらにその先の範囲にまで生活資源が分布している。その他の方向にも生活資源が分布しているがその多くは公園であり、一部飲食施設がある。

[註3-1] もちろんどの調査地においても、この目的地への移動のために歩くことは一般的に見られる。

第4章 居住者がつくりあげる地域での生活

4.1 居住者が組み立てる地域での生活

- ・地域内に広く生活資源の利用を広げている例
- ・生活資源の連鎖を利用して生活を展開していく例
- ・人間関係は薄いが生活資源を自分なりに位置づけている例

4.2 生活資源における他者との関係

4.3 生活資源へのアクセスとナビゲーター

第4章 居住者がつくりあげる地域での生活

第3章では個々の生活資源のあり方や地域全体での生活資源の特長について見た。本章ではそのような生活資源を居住者個人個人が地域での生活においてどのように位置づけて生活を組み立てているのかを居住者個人個人のケーススタディを通して見る。

4.1 居住者が組み立てる地域での生活

生活資源を地域での生活の中でどのように位置づけ、生活資源のネットワークをどのように地域の中に巡らせているかによって、大きく分けて3つの類型が見られる。列記すると、

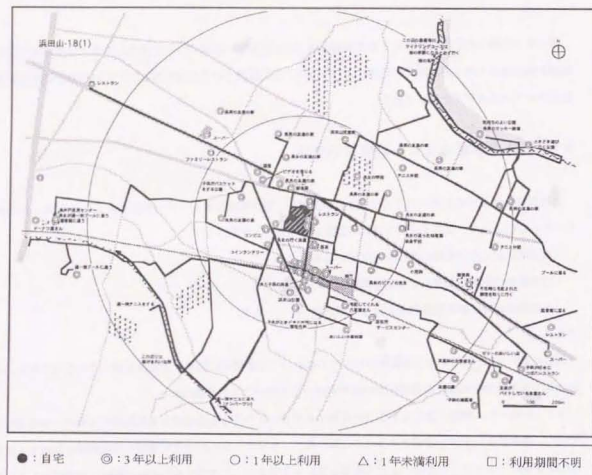
- ・地域内に広く生活資源の利用を広げている例
- ・生活資源の連鎖を利用して生活を展開していく例
- ・人間関係は薄いが生活資源を自分なりに位置づけている例

である。

前者においては、利用する生活資源のいくつかにおいては直接的に他者との関係を持っているのに対し、3番目の例では直接的な他者との関係を持つ場所がほとんどないことが特徴である。

以下、それぞれの類型に当てはまる居住者個々のケーススタディを見ながら地域生活の実態の一部を説明していく。居住者はいずれも地域を自分なりに読み取り、自分の生活に合わせて地域の生活資源を選択して地域に生活資源のネットワークを作り上げて生活していると言える。ここではそれぞれの類型に特徴的と思われる居住者を数名ずつ取り上げる。

・地域内に広く生活資源の利用を広げている例

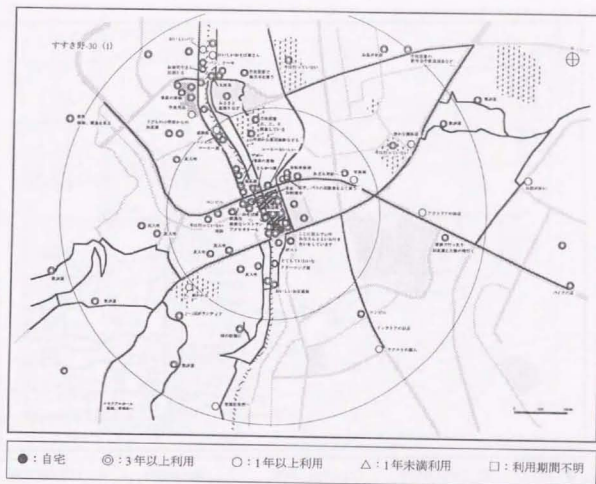


【図4-1 行動圏：浜田山-18】

【浜田山-18】(図4-1)

年齢：40才 性別：女 職業：パート 居住年数：8年
家族構成：本人+夫(47)+長男(13)+長女(8) 地域滞在時間：15時間

子ども2人を介したつき合いを地域に広く展開しているだけでなく、テニス仲間といった自身の趣味を通したつき合いも持ち地域に複数の人的ネットワークを築いている。地域の利用についても駅前の商店街だけに片寄らず駅の反対側や井の頭通り沿いに離れたレストラン、善福寺川公園と広く利用している。「地域の情報は自分の努力で得ていくもの。地域に生活に必要な最小限のものが揃えばよく、あとは個人の生活スタイルに合わせて取捨選択すればよい。」という考えを持っており、個人を大切にしながらも積極的に地域を使っていくとする志向が窺える。



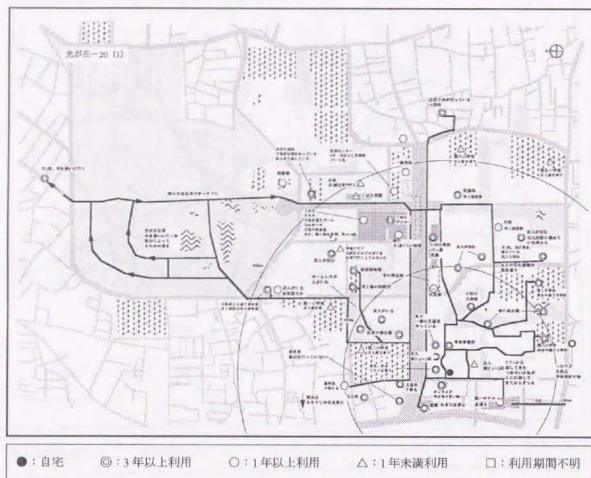
【図4-2 行動圏：すすき野-30】

【すすき野-30】(図4-2)

年齢：57才 性別：女 職業：主婦 居住年数：14年
家族構成：本人+夫(54)+長女(22) 地域滞在時間：24時間

散歩をよくし、地域の自然を楽しんでいるだけでなく道路拡張や宅配センター建設などに危機を持ち、緑豊かな環境を守りたいと思っている。つき合いは地域に多くの知り合いを持つ。地域で最も中心的な商業施設である東急ストアだけでなく、豆腐、魚、パンなどは気に入った小売店を見つけ出して利用している。その他の小売店や飲食店も他の居住者には見られないほど様々な施設を広い範囲にわたって探し出し、利用している。歩こう会や民生委員、市民図書館のボランティアなど地域の活動にも積極的に参加している。また、畑で作物を栽培したり、市の福祉ボランティアを始めるなど積極的に地域を使おうとしている様子が見て取れる。

・生活資源の連鎖を利用して生活を展開していく例



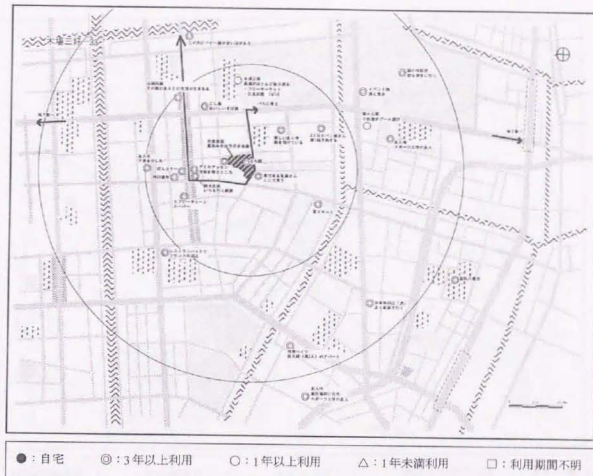
[図4-3 行動図：光が丘-20]

[光が丘-20] (図4-3)

年齢：48才 性別：女 職業：主婦 居住年数：11年
 家族構成：本人+夫(44)+長女(13)+次女(10) 地域滞在時間：24時間

利用する施設も多いが、地域に広く人間関係のネットワークを張り巡らせているのが特徴である。大通りを挟んだパークタウン光が丘の北側にも友人がいるのは珍しいが、団地外には友人はいない。

買い物は1MAが中心だが、自宅すぐ近くにあるサンライズというスーパーも補完的に利用している。買い物は生協、1MA、サンライズ(スーパー)と品物と必要な時にあわせて使い分けている。1MAは買い物だけでなく、娘のピアノ発表会や催し物を見るなど多角的に利用されている。光が丘公園をはじめとして充実している近隣の公園を季節の移り変わりを感じる場所とし楽しんでいる。区報や光が丘新聞など地域のメディアを医者選りやリサイクル市の情報集めなどに利用している。児童館でのパートや生協、生け花の講師など地域活動も盛んであり、児童館に子どもを遊ばせに来る母親から、こちらは顔を覚えていないのに、挨拶されて戸惑うことも。



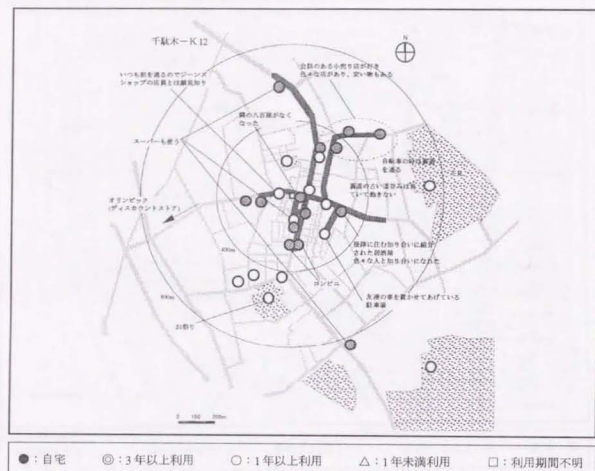
[図4-4 行動図：木場三好-33]

[木場三好-33] (図4-4)

年齢：63才 性別：女 職業：主婦 居住年数：14年
 家族構成：本人+夫(60)

生活資源の数はあまり多くはないが、それぞれの生活資源をうまく活用して生活を展開させていっている。たまたま見つけたデリカテッセンは情報を手に入れる場所であり、かかりつけとなるような医者を紹介してもらったりしている。また、子どもを通して馴染みの肉屋とつき合いが始まり、そこでさらに別の友人とつき合いが生まれるなど、うまく自分の生活を作り上げるのに利用している。

・人間関係は薄いが生活資源を自分なりに位置づけている例

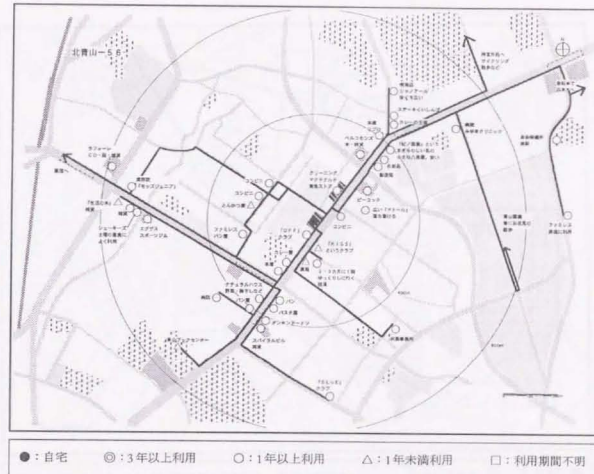


[図4-5 行動圏：千駄木-K12]

[千駄木-K12] (図4-5)

年齢：27才 性別：女 職業：学生 居住年数：3年
 家族構成：単身

たまたま親戚の所有するマンションが空いていたので現在地に住み始めた。この親戚から近くにどんな場所や商店があるのかは大体知っていた。偶然、山岳会で一緒だった人が近くに住んでおり、その人の行きつけの居酒屋を紹介してもらった。この店でいろいろな人に紹介してもらった。こういった人達に地域の店の情報を教えてもらったり、家に遊びに行って、また新しい知り合いを増やすなど、地域との接点を増やすのに有効に働いている。また、商店は谷中や千駄木の小売店も使うが、スーパーも同時に使っており、適宜使い分けている。また、谷中や根津、上野近辺を歩くこともあり、農道は古い家などが残っていて見て歩いても飽きない。

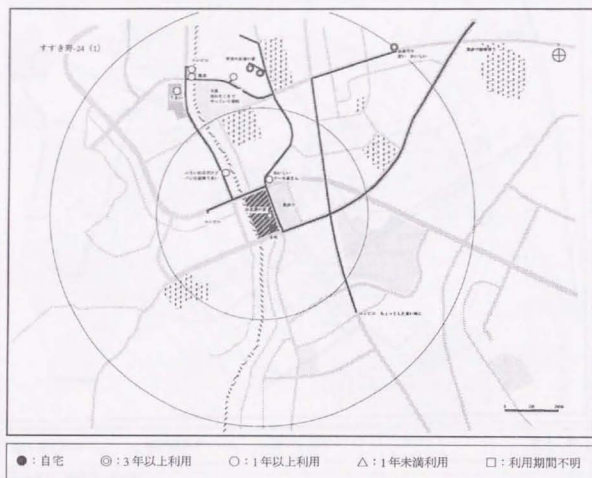


[図4-6 行動圏：北青山-56]

[北青山-56] (図4-6)

年齢：27才 性別：女 職業：会社員・公務員 居住年数：3年
 家族構成：単身 地域滞在時間：15時間

女性単身者であり、地域でのつき合いは薄く、挨拶や立ち話程度で訪問するような知人はいない。しかし、青山に特有の来訪者向けの様々な商業施設と地域に住む者向けの施設をうまくあわせて使っている。青山ならではの雑貨店、美容院、クラブを多く利用している一方、銭湯は疲れた時に、八百屋は安さを評価するというように地元の人を主な対象とした場所も生活の中で位置付けて利用している。また、ファーストフード店も広くて落ちつける、待ち合わせに便利などその時の状況に合わせて選択している。

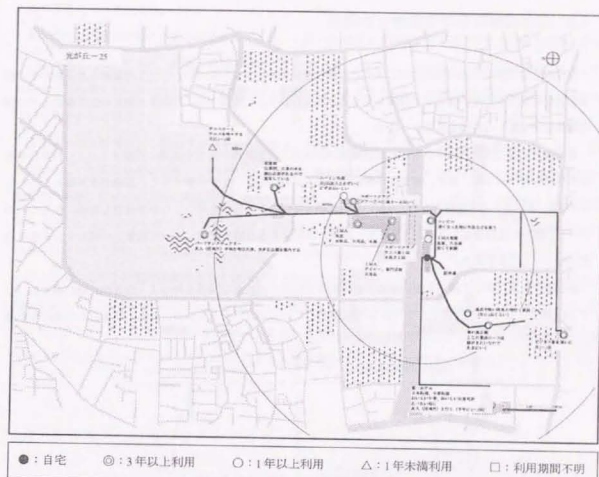


[図4-7 行動図：すすき野-24]

[すすき野-24] (図4-7)

年齢：44才 性別：男 職業：会社員・公務員 居住年数：4年
 家族構成：本人+妻（43）+長男（18）+長女（16） 地域滞在時間：8時間

地域滞在8時間なので普段は朝家を出て、寝に帰るだけという生活であり、地域との結びつきは深くはない。「地域で何かしようとするには年齢と時間が合わないような気がする」とアンケート票に記入しており、そんな生活であるが夜遅くまでやっている本屋や、自分の味覚にあったいくつかの食料品店、飲食店を地域の中から見つけ出して利用している。



[図4-8 行動図：光が丘-25]

[光が丘-25] (図4-8)

年齢：45才 性別：女 職業：自営（自宅） 家族構成：単身
 居住年数：1年 地域滞在時間：外出する用事がないときは24時間

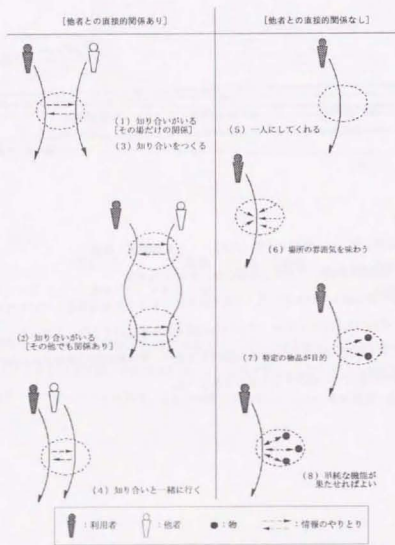
前住地から徒歩5分の所に越して住んでいる。単身で自宅にこもってする仕事をしているため、地域との接点はあまり多くない。それでもおいしいレストランがあれば毎月1度は行くようにしているし、光が丘公園内のバードサンクチュアリーは友人が遊びに来た時は案内する場所、春の風公園は緑がきれいなので、という様に地域内の場所に意味づけを行い、利用することができる。

4.2 生活資源における他者との関係

それぞれの生活資源がある居住者にとってどのような意味を持つてくるかには、その生活資源と居住者がどのような関係を築きうるかということが関係してくると考えられる。この節では、居住者が個々の生活資源とどのような関係を持っているのかを見る。

各対象地で得られたデータをもとに生活資源での他者との関係の持ち方を基準に分類すると8つの型を見ることができた(図4-9)。まず、他者との直接的な関係があるかないかで分類すると、直接的な関係があるものが4種類、ないものが4種類あった。実際の利用に際しては、これらの型のいくつかが複合した形になることが多いし、同一の生活資源であったとしても、居住者が利用する日時や状況によって他者との関わり方が様々に変わることがある。

ある居住者が、新しく場所を使い始め、その場所で他者と直接的な関係を持つような方向に進む場合は(3)や(4)の型となり、やがて(1)や(2)の型に発展していくことが考えられる。一方、他者との直接的な関係



[図4-9 生活資源での他者との関わり方]

を持たない場合は、居住者の趣向や利用するに際してその場所に求めるものの違いによって、(5)～(8)のどれかの型をとることになる。

個々の生活資源が生活に占める意味の大きさという面では、他者との関係がある場合の方が大きな意味を持っていると思われる。しかし、他者との関係のない(5)や(6)、(7)のような型をとる生活資源であっても、それぞれの居住者においては生活の中で意味づけで利用していると考えられ、生活の質を考える場合には欠かさない要素であると言える。

各地域での生活資源との関わり方の特徴を見ると、根津、千駄木、北青山、木場三好では(1)、(2)、(3)の型がいくつか見られたのに対し、他の地域ではあまり多くの例を見ることができなかった。具体的には商店、飲食店、銭湯、などにおける利用者同士、あるいは店主などと関わりが多い。利用者同士が関係を持つ場合には(2)の型も多くあったが、店主との関係においてはその場所だけに限られる(1)の型の例しか得られなかった。また、生協の共同購入による知人宅の利用という例も、木場三好、光が丘を中心としていくつかある。特に(1)の型では関係のある相手がこのだけか特定しては知らないが、その場所ではある程度の親しさをもってつき合いがあるという例もいくつか見られた。特に必要以上の深い関わりをあえて持たないというあつさりとしたつき合いの作法が背後にあるものと考えられる。(4)の型は多くの地域で見ることができたが、子どもをきっかけとしてつき合いの始まった母親同士のグループによるものが多い。

4.3 生活資源へのアクセスとナビゲーター

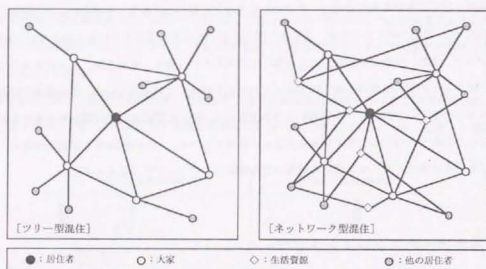
居住者、特に新規居住者が地域の生活資源を新たに獲得する場合に地域の生活資源へ案内してくれる人(これをナビゲーターと名づける)(図4-10)とそのようなナビゲーターの存在する地域の生活資源(これをアクセスポイントと名づける)が重要な役割を果たしていることが分かる。両者の働きによって、居住者が自然形でなおかつ効率的に地域の生活資源を獲得して、地域での生活を組み立てやすくなる。また、生活資源のネットワークを地域内に張り巡らせることによって、人的な交流が促進され地域へけ込みやすくなる。また、ナビゲーターとナビゲートされる者は会話や行動を共にすることによって意識的にせよ、無意識的にせよ情報の交換を行っている。この情報交換の過程で両者の役割が入れ替わり、ナビゲートされる者がナビゲーターにのってナビゲーターとなる相互的な関係の可能性も想定できる。これらは居住者の入れ替わりが多く、単身者や共働き夫婦など地域との接点が少ないがちな居住者の多く住む都市の居住地において、新旧住民の



[図4-10 アクセスポイントとナビゲーター]

相互交流や新居住者自身の生活の確立に対して大きな影響があると考えられる。

新田住民の居住に関しては、賃貸住宅に住む住民が大家を通して地域と関わりを持って行くツリー型混住のモデルが提出されている(図4-11)(小林, 1992)。しかし、これは地域への接点向大家という質的にも量的にも限られた点でしかつながらない点に問題があると思われる。これに対して、上で述べたようなアクセスポイントとなる生活資源を地域にネットワーク状に張り巡らし、個人の生活のスタイルにあわせて選択された複数のアクセスポイントを通して地域との関係を作り上げていくネットワーク混住モデルの方が実際の状況に適合している上、都市に住む多様な居住者の多様な生活を成り立たせていくためには重要ではないかと考えられる。



小林(1992)をもとに作成

【図4-11 ツリー型混住とネットワーク型混住の模式図】

地域圏の生活環境へのアクセスポイントとなる生活資源は新しい関係を構築できる関係性の開かれた場所であるとも考えることができる。一方、これの対極として、一つの目的を果たすための限定された関係性しかない場所というものを考えることができる。これは例えば銀行やコンビニなどにあたるかも知れない。

地域における生活資源のネットワークは、居住者が地域に入り、なじみ、生活を展開させて行くといった環境移行にあたって、居住者の生活行動をサポートする、公的および私的な場所場所とそれらに様々な環境の要素が作り上げているサポートシステムと考えることもできる。これは、同じ地域であっても、居住者の生活資源のネットワークの形成のあり方によって、様々な属性や嗜好、ライフスタイルを持った別々の居住者がそれぞれに合った生活を構築できる可能性を意味しているのではないだろうか。

生活資源の実際の利用においては、その場所が最初に計画された機能だけでなく、様々な複合した役目を果たしているものも多い。Jacobs(1961)は都市の多様性を発生させる要因の一つとして「地区内のできるだけ多くの場所が一つの基本的機能だけでなく、それ以上の働きをしなければならない」としており、この章で見たような複合した用途を果たしている生活資源のあり方は都市の多様性を作り出すことに貢献していると言えるのではないだろうか。

第5章 まとめ

5.1 地域の価値と生活資源

5.2 これからの課題

第5章 まとめ

5.1 地域の価値と生活資源

本節では、以上の議論から地域の生活環境の持つ価値とそれに対して生活資源がどのような関係を持つのかを考察する。それに先立ち、ここまでで得られた結果を簡単にまとめる。

(1) 一人当たりの利用する場所の数は都心から離れるほど多い。また、地域滞在時間が長い居住者ほど利用する場所の数が増える傾向がある。居住年数に関しても同様な傾向が見られた。

(2) 地域全体で利用される場所は(1)と逆に都心に近いほど多くなる。

(3) (1)と(2)より、都心に近い地域では利用する場所に居住者ごとのばらつきがあること大きいがかかる。

(4) 地域の物的な構造によって利用される場所の分布する範囲が違ってくる。影響する物的要因としては商業施設、広大なオープンスペース、最寄り駅などである。

(5) 地域の生活情報の件数で都心から離れる地域ほど多くなる傾向が見られる。情報の種類も地域によって異なってくる。また、日常生活行動のうちに自然に得られる情報がかなりあり、地域が歩くことを誘導するかしないかの影響が見られる。

(6) つき合いの始まるのは子どもをきっかけとするような人を介したものと場所を介したものとがある。

(7) 人間関係は持ちたいと思うが必要以上の関係を求めない居住者が多い。

(8) 生活資源を獲得する手段としては知人の案内、知人の情報、メディアの情報、自分の足で歩くことが挙げられる。

(9) 居住者は地域の環境を踏み取りながら自分のライフスタイルにあった生活資源を選び取りながら生活を構成している。

(10) 地域の生活資源へと案内してくれるナビゲーターとナビゲーターと出会うことのできる場所であるアクセスポイントが重要となる。居住者、特に新規居住者が生活資源を獲得するにあたって、ナビゲーターとア

タセスポイントによる生活資源の連鎖があることは地域で生活を展開していくにあたって自然な形の助けとなる。

この様な居住者の地域生活の特徴に作用する生活環境の要素には様々なものがあると考えられるが、本研究で得られたものとしては、

・物理的・環境的要素

- (1) 生活関連施設の分布・配置・種類・量
- (2) 生活関連施設をつなぐ道
- (3) 最寄り駅への距離と方向
- (4) 利用交通手段

・社会的・人的環境的要素

- (5) 家族型
- (6) 人的ネットワーク
- (7) 意識される情報と意識されない情報

・両要素の混在した要素

- (8) 施設における他者との関わり方

の8つをあげることができる。

以下、それぞれの概要を記す。

(1) 生活関連施設の分布・配置・種類・量

居住者は日々様々な生活関連施設を利用して生活している。生活関連施設としては公共施設や大規模な商業施設といったいわゆる「施設」に限らず、公園や寺社などのオープンスペース、小さな商店、飲食店も含んだ生活のために利用される場所すべてが含まれると考えるとよい。

居住者がこういった生活関連施設を利用するにあたって関係してくるのは、自宅を中心として地域を見た場合に、どのような種類の施設がどの方向にどれだけ存在しているか、あるいはその存在を知っているかということである。施設が地域内の一部分に固まって存在しているのか散在しているのか、数多くの施設が集中している所があるのか、あるとすればどの程度の数の施設が集中しているのか、といったことである。こういったことにより居住者にとって個々の施設が利用するに値する魅力のある施設なのかどうかということに影響してくる。

(2) 生活関連施設をつなぐ道

ある生活関連施設の分布を前提とした時に、それらの施設をどのようにに関連させて使用するか、あるいは自宅や駅からその施設へと到る道がどのようなものであるかによって、利用する施設が左右される場合がある。

また、特に利用しようとする目的の施設がない場合でも、道の様相によって散歩やウインドショッピングなどを誘発することがある。

(3) 最寄り駅への距離と方向

居住者が施設を利用するかどうかということに、施設の分布とからんで地域の外への主要な接続口としての最寄り駅の位置が重要な意味を持っている。施設の集中している場所と自宅から同じ方向にあるのか、逆方向なのか、近距離なのか遠距離なのかといったことにより施設の利用が違ってくる。これは特に毎日地域の外へと通勤や通学している居住者にとって影響が大きい。

(4) 利用交通手段

地域内の移動を徒歩とするのか自転車によってするのかにより道や施設の利用の仕方が違ってくる。徒歩の場合はほどよい人混みにより歩いていて楽しい通日も、自転車にとっては走りにくい通りとなる。

また、自転車や徒歩では毎日のように買い物に行かなければならないのに対し、自動車を利用することにより週に1、2回だけまとめて買い物をする居住者も見られた。また、地域内に満足できる施設がないと考える居住者で毎日のように自動車を利用して地域外の施設を利用する者もいる。

(5) 家族型

地域生活の様々な面での違いが家族型によって整理されることを各章で見てきた。家族型でもっとも地域生活に影響するのは幼年期から学童期の小学生がいるかどうかということであった。子どもの学校やクラブなどを通じて大人同士の間でつながりができたり、関心を持つ情報が通ってきたりする。さらに利用する施設も公園や小学校、児童館などの子ども関係の施設の利用が多くなる。

また、幼年期の子どもを持つ母親においては子育てで生活のかんりの部分を集中している者も多く、地域生活に限らず生活全般の前提条件となっており、ほとんどの施設の利用は子どもを連れてのものとなる。

(6) 人的ネットワーク

居住者は自らで地域の中で獲得した生活関連施設のネットワークを利用して生活を組み立てているのと同様に、地域の中で作り上げた人的ネットワークを利用して生活している。人的ネットワークの構成としては単なる友人・知人関係のインフォーマルなネットワークとサークルなどのフォーマルなネットワークの混成でできている。人的ネットワークの役割としては様々な生活上の情報の交換と獲得という面と、新しい施設を獲得する際に助けとなってくれるという面がある。

今回の研究では深く触れなかったが、生活情報は他者から自分へと一方向的に流れるものというよりも、日常の会話の中で双方向的な情報の交換という性質を持っており、自分と他者との相互的な関係性を作り上げていくことになる。

また、今まで利用していなかった施設に知人に連れられて行くことにより新しい施設を獲得したり、そのような新しい施設でさらに新しい人のネットワークを獲得することもあり、地域生活を展開していく上で人的ネットワークは生活をサポートする重要な役割を果たしている。

(7) 意識される情報と意識されない情報

地域には広報紙やミニコミ、回覧板、掲示板といった有形のメディアにより様々な情報が流れている。また、情報の入手先として最も多かったのは地域に張り巡らされた団地内外の知人のネットワークを通して口コミであった。また、情報として意識していないが、日常の地域生活のなげない場面場面で情報を手にしやすい地域があることも指摘した。このようにして手に入れた情報が施設の利用にあたっての取捨選択の基準の一つとなる。

(8) 施設における他者との関わり方

施設を利用するにあたっては単にある機能を求めて利用する場合だけでなく、その施設での他者との様々な可能性も考慮に入れて利用する場合がある。施設との関わり方にはいくつかの類型が見られ、利用者同士で関わりを持つ場合もあれば、施設の運営者・経営者との関わりを持つ場合もあり、さらにはその施設においては一人になれるという関係性のとりかたもあり得る。ある施設における関係性の取り方はいわばその「場の雰囲気」に左右され、しつらえ等の物的環境に限らず、その場に居あわせる他者などの社会的・人的環境も混合した環境に影響される。居住者自身がどのような関係を取ろうかという志向性も重要な要因となっている。

居住者はある施設においてどのような関係性を取れるかということを施設の利用の基準の一つとしており、関係性のあり方により施設の生活の中での位置づけは大きく異なってくる。そのために、個々の施設において単一的な関係だけでなく、状況に応じて多様な関係性を取ることができるのかといったことは、地域生活に大きな意味を持つ。

居住者は地域において生活資源を利用しながら生活を送っている。しかし、都市においては多様な居住者が同じ地域内に生活している。居住者それぞれによって生活スタイルや価値観、嗜好は違う。例えば地域生活への重みづけや地域コミュニティへの指向性についても千差万別であろう。地域がこのように多様な生活を許容できることが地域の価値を評価する重要な点であると思われる。そのために地域に備わっているべき特質を、第3章および第4章で得られた結果より、生活資源に関して3つ挙げることができる。

・地域に多様な生活資源が用意されていること。

居住者は地域においてそれぞれのライフスタイルや嗜好、価値観に合わせた生活を送ろうとしている。居住者それぞれの多様な要求を満たすためには地域に量的にも質的にも様々な生活資源が用意されていることが必要であると言える。多様な生活資源が用意されていれば居住者が生活資源を選び出し、自分の生活に組み込んで行きやすくなると考えてよいだろう。

・生活資源へのアクセスが保証されていること。

そのように用意された生活資源が利用されにくい、あるいは利用をためらわせるようなものであってはいけない。生活資源へのアクセスを保証するものはその生活資源の物的なしつらえであるかもしれないし、そこをマネジメントする人（例えば、商店の店主や公共施設の職員）や集まる人々のつくり出す場の雰囲気である場合もあるだろうし、単純に閉まっている物品の値段かもしれない。誰も相手をせず、ほおっておいてくれることによってアクセスしやすくなることもある。さらには生活資源の存在する場所や地域が探検を誘発する特徴を持っているかいないかにも左右されるだろう。

何らかの方法によって個々の生活資源への居住者のアクセスが保証されていなければならない。

・生活資源との関係のあり方が居住者自身によって調整できること。

居住者の求めるものはいつも同じであるとは限らない。その日の気分や状況によって変化する。その場の必要に合わせて生活資源と自身がどのような関係をとるのかを調整できなくてはならない。つき合にしても挨拶だけで済ませたい時もあればじっくり話をしたい時もある。居酒屋に行くにしても、店主や他の客と交流したいと思う時もあれば、一人静かに飲みたいときもある。関係性のあり方やその程度を自分で調整できる、居方の許容度の大きい場所の魅力は大きいと思われる。

同じ場所だとしても、利用する人によって様々な利用の仕方があってよい。一つの利用の仕方しか許容できない場所では多様な居住者の生活を許容することはできない。

今回調査対象とした7つの地域について、この3点をもとにした評価を簡略に記す。

都心および都心に近い地域（横津、千駄木、北青山、木場三好）においては、生活資源となりうる多くの場所や施設があり、多様な生活資源を見ることができた。一方、すすき野、光が丘といった郊外に近い地域では多様性がかなり減少する。このことは単純に利用者数が都心に比べて少なく、多様な施設を維持していくことができないという見方をすることもできるが、家族構成やライフスタイルの似通った居住者が多く住む地域であることから考えることもできる。同質性の高い居住者層からなる地域では多様な居住者の住む地域に比べ生活資源の多様性が要求されていないためと見ることもできる。

アクセスの保証はある程度どの地域でも成り立っているが、千駄木、北青山などのように地域の探検を誘発するような地域においてはその程度が高いと言える。逆に、光が丘のように周囲の生活資源の利用があまり促進されていない地域もある。

アクセスの程度の調節に関しては、生活資源の多様性が少ない地域では、単一の生活資源における他者との関係性が画一的である傾向がある。これも居住者の要求の同質性から説明できるかもしれない。また、知人の家といった生活資源については第3章3.4でも述べたようにうまく調節している例が多いと言える。

5.2 これからの課題

本研究では居住者の地域における生活資源の利用実態について分析することを試みてきたがいまだ不十分である。地域という環境と居住者の関係をさらに解明することや地域の計画論に結びつけるまでには到っていない。最後に、生活資源という観点から見た環境行動研究や地域の計画論にとっての課題を挙げて、むすびに代える。

・調査対象の選定

地域に存在する生活資源のどの程度を数え上げるには居住者のうちどの程度の割合を調査対象として抽出すればよいのか。また、居住者層ごとにどの程度の割合の居住者を抽出して調査すればよいのか。

個人個人にとっての生活資源のあり方は家族構成、年齢、性別、地域への生活の密着度など多くの要因がからみあっているため、単純な階層分けでは居住者の多様な生活のあり方を説明できないために、居住者層をどのように設定するかから考えなければならない。生活資源の利用のパターンを整理して階層分けをしなければならないが、今回の調査によってはすくい上げられていない生活資源の利用のパターンもあると思われる。

・生活資源の分類

本論では生活資源と一括りにしてきたが居住者の生活のなかでの位置づけや利用の仕方によってどのように分類されるのか。

同じ場所であっても生活資源としてのあり方が居住者によって違う場合があり、それを踏まえた上での分類が必要である。また、より精緻な生活資源のあり方を分析するには、施設におけるビルディングタイプのような生活資源の分類を確立することが必要であると思われる。

生活資源は人間と環境の相互浸透した関係にあるものであるもので、これはいまだ明らかになっていない人間と環境の相互浸透的な関係の分類にもつながると思われる。

・地域の評価方法

生活資源の分類を踏まえた上での地域の評価方法ほどのようなものになるか。

現在、地域の評価については主に数値的、物理的観点から評価されることが多い。まちづくりにおけるワークショップなどの場では地域の様々な種類の資源を評価しようという動きもあるが、居住者個人個人の生活を単位としての評価をしているものは少ないと思われる。

地域を評価するには種別の面からどのような生活資源があるかを明らかにするだけでなく、量的な評価や地理的な分布の評価も必要になってくる。

これにより地域の特質や価値についてもより詳細な評価が可能になる。

・地域計画・施設計画への適用

生活資源の分類や配置に基づく地域の評価ができれば、さらに地域計画にも応用していくことが期待できる。居住者の行動や生活の中での生活資源の位置づけからコミュニティ計画、地域の様々な場所や施設の配置計画や施設そのものの計画にまで役立つものと思われる。

今後さらに女性の社会進出、都心居住の見直し、在宅勤務などの新しい就労形態などといった多くの要因により、生活スタイルはますます多様化していくものと思われる。このような状況の下では、地域の生活関連施設についても、利用者数、利用時間、利用圏、運営のプログラムといった面からだけでなく、その施設が住民一人一人にとって生活の中でどのような位置を占めて利用されているのか、他の施設とどのような関係にあるのかといった面にも着目して計画されていくべきだと思う。それに際し、計画される場所に関わる環境の様々な要素を考慮することも必要である。例としては、新たな生活の展開をはかる上で大きな役割を果たすことのできる、ナビゲーターやアクセスポイントを地域の中にかに用意していくかという課題やいろいろな関わり方を許容できる生活資源をどのようにつくっていくかという課題をあげることができる。

また、生活資源という観点から施設、場所を見直した場合、既存の施設体系に拘らない施設のあり方というものも考えられる。現在の計画論では段階的な施設計画や住宅地計画が行われているが、本研究でも一部明らかになったように、居住者の生活は必ずしも段階構成的になっておらず、施設の利用に関しても人間関係に関しても計画段階のグルーピングにのっとらない実態となっている。居住者は地域の中から広く生活資源を拾い出し、利用して生活を組み立てている様が見て取れており、このような実態に合わせて地域や施設の計画論を修正していく必要がある。

・地域での生活と都市全体にわたる生活、家庭内での生活との関係

今回の調査では地域内での生活に対象を絞ったために、都市全体の中で個人の生活がどうなっているのか、あるいは住戸内での生活はどうなっているのかということについてはほとんど調査していない。都市における生活環境を考えた場合に地域での生活環境というものがより重要であるという前提で調査を行ったためであるが、個人の総合的な生活環境を捉えるという面からは都市全域から地域、住戸内といったいくつかのスケールにわたる調査も断片的に行う必要がある。

今後の調査・研究によってこれらの課題の解決に少しでも貢献していきたい。

参考文献

- ・荒木経惟 (1994)『日付のある町』『東京人 NO. 77』東京都文化振興会。
- ・大谷信介 (1996)『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』ミネルヴァ書房。
- ・奥田道大 (1993)『都市と地域の文脈を求めて—21世紀システムとしての都市社会学』有信堂高文社。
- ・奥田道大他 (1994)『地域社会を生きる』倉沢進編『現代のエスプリ No. 328』至文堂。
- ・倉沢進 (1990)『大都市の共同生活—マンション・団地の社会学』日本評論社。
- ・小林秀樹 (1992)『集住のなわばり学』彰国社。
- ・佐々木正人 (1994)『アフォーダンス—新しい認知の理論』岩波書店。
- ・篠崎正彦他 (1994)『根津の地域研究—その4、地域空間における居住者と環境の関わり』『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。
- ・篠崎正彦他 (1995)『建築計画における人間—環境系研究の流れに関する試論』『日本建築学会大会学術講演梗概集』。
- ・篠崎正彦他 (1996)『都市における街区内での居住環境に関する考察—その2、生活資源と居住者の生活の展開について』『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。
- ・重村力他 (1976)『住居を中心とした生活行動の展開に関する比較研究』『住宅建築研究所報 No. 3』新住宅普及会。
- ・鈴木成文他 (1966a)『生活領域の研究に関する研究 (1) 一住宅地における児童の空間把握と生活領域』『日本建築学会論文報告集 号外』日本建築学会。
- ・鈴木成文他 (1966b)『生活領域の研究に関する研究 (2) 一住宅地における児童の空間把握と生活領域』『日本建築学会論文報告集 号外』日本建築学会。
- ・鈴木成文他 (1966c)『生活領域の研究に関する研究 (3) 一領域形成家庭のモデル化』『日本建築学会論文報告集 号外』日本建築学会。
- ・鈴木成文他 (1967)『生活領域の研究に関する研究 (4) 一一般住宅地におけるケーススタディ』『日本建築学会論文報告集 号外』日本建築学会。
- ・鈴木成文他 (1974)『建築計画学5 集合住宅 住区』丸善。
- ・鈴木成文 (1975)『建築計画の理念』鈴木成文他『建築計画』実教出版。
- ・鈴木宏編 (1992)『現代都市を解読する』ミネルヴァ書房。
- ・高橋鷹志 (1991)『建築・都市環境における環境移行』山本多喜・ワップナー、S 編『人生移行の発達心理学』北大路書房。
- ・高橋鷹志 (1992)『人間—環境系研究における理論の諸相』日本建築学会建築計画委員会設計方法小委員会編『人間—環境系の計画理論の考え方 (総論)』(日本建築学会大会研究協議会資料)。
- ・高橋勇悦編 (1992)『大都市社会のストラクチャリング—東京のインナーシティ問題』日本評論社。
- ・高橋恒他 (1981)『近隣における生活行為と空間について—コミュニティ計画の基礎的研究 (3)』『日本建築

- 学会論文報告集 306号』日本建築学会。
- ・橋弘志他 (1993)「高齢者にとっての地域環境に関する考察—人間—環境系としての地域に関する研究—その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。
 - ・橋弘志他 (1996)「生活の場と都市コミュニティ—多様な関係を支える都市の仕掛け」『すまいる第37号』住宅総合研究財団。
 - ・東京大学高橋研究室「東京1995」『10+1 No.5』INAX出版。
 - ・長倉康彦他 (1976)「自宅を中心とした行動範囲と認知している地域の形状と大きさについて—川崎、葛飾、杉並地区の場合」『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。
 - ・西田徹他 (1993)「根津の地域研究—その2. 様々なレベルの関わりをアフォードする地域空間」『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。
 - ・野口曜美子「集団間とコミュニティ研究」日本建築学会編『集合住宅計画研究史』日本建築学会。
 - ・日笠端 (1965)「生活環境」磯村英一編『都市問題事典』鹿島研究所出版会。
 - ・日笠端 (1993)『都市計画 第3版』共立出版。
 - ・舟橋國男 (1989)「環境行動研究におけるトランザクショナルリズムに関する一考察—理論の概要並びに建築計画学との関係」『日本建築学会大会学術講演梗概集』。
 - ・森岡清志・松本康編 (1992)『都市社会学のフロンティア 2 生活・関係・文化』日本評論社。
 - ・柳澤忠他 (1984)「新建築学体系 21 地域施設計画」彰国社。
 - ・吉見俊哉 (1992)「空間の実践」倉沢進・町村敬志編『都市社会学のフロンティア 1 構造・空間・方法』日本評論社。
 - ・Anderson, N. (1923) "The Hobo", University of Chicago Press.
 - ・Baker, R.G. (1968) "Ecological Psychology: Concepts and Methods for Studying the Environment of Human Behavior", Stanford University Press.
 - ・Cambell, K. E. et al. (1986) "Social Resources and Socioeconomic Status", Social Networks 8.
 - ・Cressey, P. (1932) "The Taxi-Dance Hall", University of Chicago Press.
 - ・Dore, R. P. (1958) "City Life in Japan - A Study of a Tokyo Ward", Routledge & Kegan Paul.
 - ・青井和夫・塚本哲人訳 (1962)『都市の日本人』岩波書店。
 - ・Fischer, C. S. (1982) "To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City", University of Chicago Press.
 - ・Fischer, C. S. (1984) "The Urban Experience" (2nd edition), Harcourt Brace & Company.
 - ・松本康・前田尚子訳 (1996)『都市的体験—都市生活の社会心理学』未来社。
 - ・Gans, H. J. (1962) "The Urban Villagers", The Free Press of Glencoe.
 - ・Gibson, J. J. (1979) "The Ecological Approach to Visual Perception", Houghton Mifflin Company.
 - ・古崎敬他訳 (1985)『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社。
 - ・Granovetter, M. (1973) "The Strength of Weak Ties", American Journal of Sociology 78(6).
 - ・Itelson, W. H. et al. (1974) "An Introduction to Environmental Psychology", Holt, Rinehart and Winston.
 - ・望月衛訳 (1977)『環境心理の基礎』『環境心理の応用』彰国社。

- ・Jacobs, J. (1961) "THE Death and Life of Great American Cities", Random House, Inc.
- ・黒川紀章訳 (1977)『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会。
- ・Lang, J. (1987) "Creating Architectural Theory", Van Nostrand Reinhold Company.
- ・高橋薫志監訳 (1992)『建築理論の創造—環境デザインにおける行動科学の役割』鹿島出版会。
- ・Lynch, K. (1960) "The Image of The City", M.I.T. Press.
- ・丹下健三・富田玲子訳 (1968)『都市のイメージ』岩波書店。
- ・Lynch, K. (1981) "A Theory of Good City Form", M.I.T. Press.
- ・三村翰弘訳 (1984)『居住環境の計画—すぐれた都市形態の理論』。
- ・Perry, C. A. (1929) "The Neighborhood Unit", Committee on Regional Plan of New York and Its Environs.
- ・倉田和四生訳 (1975)『近隣住区論』鹿島出版会。
- ・Stokis, D. et al. (Eds) (1987) "Handbook of Environmental Psychology", Wiley.
- ・Wapner, S. & Demick, J. (1991)「有機体発達論的システム論的アプローチ」山本多喜司・ワップナー・S編『人生移行の発達心理学』北大路書房。
- ・Whyte, W. F. (1941) "Street Corner Society - The Social Structure of an Italian Slum", The University of Chicago Press.
- ・寺谷弘一訳 (1974)『ストリート・コーナー・ソサエティ—アメリカ社会の小集団の研究』埴内出版。
- ・Wicker, A. W. (1974) "An Introduction to Ecological Psychology", Brooks/Cole Publishing.
- ・安藤延男監訳 (1994)『生態学的心理学入門』九州大学出版会。

発表論文目録

- (1) 1992年3月 「文京区における子どもの地域イメージ」
1991年度東京大学工学部建築学科卒業論文。
- (2) 1992年8月 「子供の遊び環境からみた街の構造に関する研究－根津におけるケーススタディを通じて」
『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。(市岡綾子、高橋鷹志他と共著)
- (3) 1993年9月 「根津の地域研究－その2. 様々なレベルの関わりをアフォードする地域空間」
『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。(西田徹他と共著)
- (4) 1994年3月 「都心高密度居住地域での居住様式の感態に関する研究」
1993年度東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士論文。
- (5) 1994年9月 「根津の地域研究－その4. 地域空間における居住者と環境の関わり」
『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。(西田徹他と共著)
- (6) 1995年3月 「下町型集住形式に関する研究－密集住宅地「根津」におけるケーススタディ」
『住宅総合研究財団 研究年報 No.21』住宅総合研究財団。(高橋鷹志、金ヨソク他と共著)
- (7) 1995年3月 「ホイアンの人と生活」
『昭和女子大学 国際文化研究所紀要 vol. 1』昭和女子大学国際文化研究所。
- (8) 1995年8月 「建築計画における人間－環境系研究の流れに関する試論」
『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。(高橋鷹志、鈴木毅と共著)
- (9) 1995年12月 「東京都2000 東京都會結構與都會生活」
『建築師 第252期』中華民國建築師公會全國聯合會雜誌社。
(高橋鷹志、鈴木毅、岩佐明彦他と共著)
- (10) 1996年1月 「生活の場と都市コミュニティ－多様な関係を支える都市の仕掛け」
『すまいるん 第37号』住宅総合研究財団。(橋弘志、鈴木毅と共著)
- (11) 1996年3月 『集合住宅居住者の地域生活とコミュニティに関する研究』
住宅・都市整備公団建築部、都市整備プランニング。(小柳津静一、初見学他と共著)
- (12) 1996年5月 「東京1995」
『10+1 No.5』INAX 出版。(高橋鷹志、鈴木毅、岩佐明彦他と共著)
- (13) 1996年9月 「都市における街区内部での居住環境に関する考察」
－その1. 「かわ」と「あんこ」の比較を通して－
『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。(日野雅司他と共著)
- (14) 1996年9月 「都市における街区内部での居住環境に関する考察」
－その2. 生活資源と居住者の生活の展開について－
『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会。(日野雅司他と共著)

謝辞

青息吐息ながら、まがりなりにも論文を提出することができました。これも多くの方々のご指導、ご助力によるものです。ここに記して簡単ながら改めて感謝の意を表します。

筆者の学部時代からの指導教官である東京大学教授高橋義志先生には折りにふれ貴重なご指導、ご助言を頂きました。先生の退官の年に提出する論文としてはなほなほ心許ないものではありませんが、感謝と共にこの論文を挙げたいと思います。

そして東京大学助手の鈴木毅先生には的確かつ本質的なご意見を多々頂きました。いつも先生のご意見には、はっと思わされるものが含まれており、私の思い至らなかったことや見落としていたことに気づくきっかけとなりました。万言を尽くしても感謝の意を表しきれません。

本論文の審査にあられた、長澤泰教授、岡部篤行教授、大野秀俊助教授、伊藤毅助教授の各先生方からは重要な点を数多く指摘していただきました。感謝申し上げます。

また、「公団コミュニティの実態に関する研究」において芝浦工業大学小柳淳一教授、東京理科大学初見学教授にお世話になりました。研究会における貴重なご意見の数々ありがとうございました。横浜国立大学の大月敏雄先生にはこの研究会への参加のきっかけを与えて下さったほか、研究会の場以外でも様々なお話は刺激となりました。また、メンバーであった東京理科大初見研究室、芝浦工業大学小柳淳一研究室、日本女子大学高橋研究室の皆様には調査から資料の整理まで多くの助力を頂きました。特に東京理科大学大学院の吉兼比呂志君には研究会での議論やデータ整理など様々な点でお世話になりました。

このような研究を始める端緒になったのは文部省科学研究費「地域空間の環境行動的研究」においてでした。この研究会で地域の研究の目的、方法、おもしろさなど様々なことを勉強させていただくことができました。特に新潟大学西田徹先生、早稲田大学橋弘志先生には貴重なご意見をいただき感謝しております。

東京大学高橋研究室、長澤研究室の皆様にはゼミの場でそして普段の会話の中から多くのご意見を頂きました。日野雅司君には調査に始まり図版作成、論文のレイアウトに至るまで本当にお世話になりました。岩佐明彦君、西島直臣君にも図版作成などで手を煩わせました。三人にはお礼申し上げます。

そして、最後になってしまいましたが、貴重な時間を割いてアンケートやインタビューにご協力いただいた調査地域の皆様なくては本研究は成り立ちませんでした。一人一人お名前を挙げることはできませんが、全ての方々に深く感謝の念を捧げます。

1996年12月

後藤 正孝

添付資料

付3：インタビュー・チェックリスト

*アンケートへの記入漏れや不明な点を確認する。

*「面白い」「特徴的」と聞いたら、詳しくその内容を聞く。

*地域活動や団地内活動の中心人物を探る。

*アンケート項目に沿って並べたが、必ずしもこの順番で聞く必要はない（臨機応変に）。

1. 現在の住まいと前住居

1-2 (5) → 具体的にどの様な雰囲気が気に入ったのか？

1-3 ~ 5 → どの様な生活だったのか？

子どもの生活と近隣との交際は？

1-6 (6) → 具体的にどの様な環境が良くなかったのか？

【街についての印象や評価や思い】

1-7 (1) → 【具体的な地域活動の様子】

【コミュニティ施設の利用】

現在でも続けている活動はあるか？

(2) → 地域活動に参加していなかった理由

1-8 (1) → 理由とつきあい方

1-9 → なぜ住み続けるのか/住み続けたくないのか？

2. 家族属性

2-1 (パートの場合) → 勤務時間や勤務場所は？

(地域で過ごす時間) → 得意な時間の場合にその内容を聞く。

3. 車・バイク・自転車

(自動車の利用) → 主に使う人は？ どの様な使い方 (その他の場合)？

地域外で車でよく行く場所は？

(バイクの利用) → 主に使う人は？

(自転車の利用) → 普段使う人は？

徒歩と上記交通手段との使い分けは？

4. 地域での活動

4-1 → それぞれの活動拠点 (あればよいと思う場所や施設)

活動を通じて知り合いになった知人や友人

活動に参加するようになった経緯

活動の中心人物

活動の歴史 (分ける範囲で)

活動への自分の参加史 (以前参加していたが最近やめた活動など)

インタビュー対象者以外の家族の地域活動

前住地での活動と比較

【日常生活に占める意味】

(その他) → 活動の詳しい内容

4-2 → (親しい友人や知人) 顔見知りになった時期やきっかけや理由

入居当初の近隣交際や知り合い (きっかけなど)

居住年数と知人や友人の変化

近隣交際に対する意識 (ベタベタ、サラサラ、カラカラ)

現状の近隣交際 (満足/不満) とその理由

5. 地域生活情報

・記入内容を見ながら具体的に話してもらう。

・「その他」や書ききれなかった事項があれば聞く。

6. 徒歩圏域行動

・記入された施設や場所一つ一つについて聞く。

きつかけ/頻度/人的交流 (どんな人と) / (どんな) 情報交換

・利用時間帯 (曜日や時刻) や利用時間

・以前は行っていたが最近行かなくなった場所 (その理由)

場所や施設利用の通時的な変化

・類似施設や場所の中でそこを選んだ理由や使い分け

・共通利用施設 (人や場所の連環)

・地域内にあれば利用したい施設や場所

・ルート選択の理由

・散歩の経路や範囲

・特定目的以外で時間を過ごす場所

・待ち合わせに使う場所

7. 自由記入

・必要に応じて内容の補足

・地域の変化 (人や施設など) や個人的な地域での生活の変化について聞く

・記憶に残る子どもの頃の地域活動や地域生活

8. 団地配置図を示しながら

・(団地内の) 親しい家のプロット

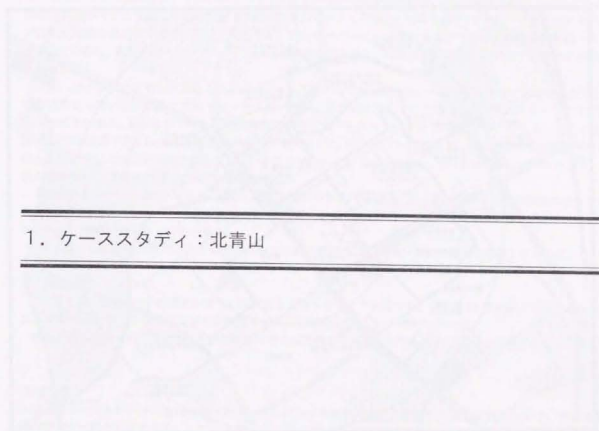
・挨拶や立ち話をする場所のプロット (なぜその場所なのか)

・団地内活動拠点のプロット

付4：ケーススタディ個々の居住者の生活の例

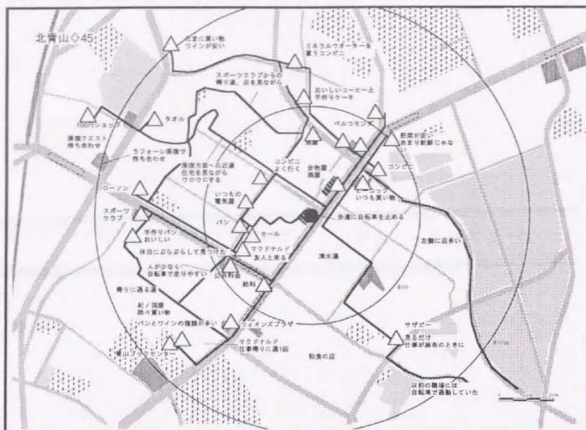
調査対象地の典型的な例あるいは非常に興味深い例を各地域数例づつを選んで載せる。

1. ケーススタディ：北青山



北青山は、東京都港区北青山一丁目から三丁目にかけての地域である。この地域は、戦後、戦前とは異なる性格の住宅地として発展してきた。戦前は、主に大邸宅が建ち並ぶ高級住宅地であったが、戦後は、戦災復興事業や再開発によって、中低層の集合住宅やマンションが密集するようになった。この地域の特徴として、緑豊かな環境と、歴史的な建物や施設が残っていることが挙げられる。また、交通の便も非常に良い。この地域をケーススタディとして取り上げる理由は、戦後の都市開発と、歴史的な環境の保全という二つの側面から、興味深い事例が数多くあるからである。本稿では、この地域内のいくつかの具体的な事例を紹介し、その背景や現状について詳しく説明する。

【北青山-45】は地域外に勤める若年女性単身者（32才）。〈居住歴 1年4ヶ月、若年単身世帯〉



図付4-1 【北青山-45】の場所利用状況

凡例（生活施設の利用年数）

●：自宅 ◎3年以上 ○：1年以上3年未満 △1年未満 □：不明

【生活施設の利用】

普段の買物は「東急ストア」や「ピーコック」が20:00までやっている仕事帰りに間に合うので週に2〜3回利用する（図1）。それに19:30以降は生鮮食料品は値段が安くなり、庶民的値段。八百屋はあまり新鮮じゃないが2週間に1回程度通り掛りに寄るなど補助的に利用している。パン屋はよく利用していて、その中心は「紀伊国屋」。ここはパンの種類が多く、鎌倉に住んでいる親類の家のそばにもありパンがおいしいことを知っていて週に1回利用している。その他にも「APETIT」、「手作りパンのおいしいパン屋」、「サンジェルマン」、「アングルセン」などいろいろな店を使い分けている。「無印良品」は平日でも土日もいつでも気が向いたときにお菓子などを買いに行く。青山通り号線沿いにも店があるが、ポイント制でポイントを集めているのでもいつも同じ所を利用する。「第1アパート1階の酒屋」はおじさんがワインに詳しく、教えてくれるので月に1回利用する。安売りの店「キラー通りの酒屋」は安いものがあるときだけ利用する。外苑西通りのコンビニはめったに行かないが、「グリーンマート」は週に1回行く。ミネラルウォーターは「ブルマート神宮前店」で購入する。「コミュニティストア原宿シカワ」はワインが安く、スポーツクラブ向かいの「ローション」ではスポーツクラブの帰りに飲み物を買うなど用途によってお店を使い分けている。「セールの店」はガラージみたいな店でもセールをしている。月に1回替に安い日（土日）があるのでそのときに行く。また、チラシが入るのでセールだとわかる。100円ショップが好きで明治通り沿いの店にいたが、なくなったので新たに竹下通りの方を見つけた。引っ越してきて直後は日用品を買いに週1回休みの日に行っていたが、現在は月に1回程度行っている。いつもの電器店は歩いていたらセールをしていた。小型、中型の電化製品は安売りの店で買うが、大型のものは近くで買ったほうが修理など後々便利だと思って、近所の「いつもの電器店」で冷蔵庫を買った。アパートの人は第1アパート2階の電器店を利用しているようだ。冷蔵庫を買うときこも見たが「いつも

の電器店」の方が安かったのでこっちにした。それ以来利用していない。「千駄ヶ谷方面の本屋」は、20:00から21:00まで開いていて種類が多い。「青山ブックセンター」は20:00までやっている。週1回位の割合で平日でも土日も行く。「東京ウィメンズプラザ」に女性に関する図書館がある。女性に関する講習もやっている。雑誌もあるのでここで読んでから必要であれば「青山ブックセンター」で買う。第1アパート1階のマクドナルドは広くて居心地がよいので、月に2回行く。青山オーバースペース地下のマクドナルドには仕事帰りに一人で週1回立ち寄る。表参道のマクドナルドには月2回程度友達と行く。店内は狭いが駅に近いので友達がすぐ帰れるから。

スポーツクラブは北青山に住むようになって1ヵ月位たってから始めた。一人で平日の20:30以降に利用し、曜日は決まっていない。ここで知り合った人はいない。茅ヶ崎に住んでいた時も2〜3年位スポーツクラブに行っていたことがある。青山に来てからは公衆施設を利用しようと思っていたので、駅でチラシをもらい平日の20:30以降のみ利用できる会員は料金が安かったので入会した。ジムとプールがある。ジムは髪の色が緑色や青色の人と色々な人がある。ジムは混んでいるのでプールに行くことが多い。帰りは向かいの「ローション」で飲み物を買って、裏通りの店を見ながら家に帰る。

英会話スクール「LADO」は渋谷、銀座、新宿に教室がある。茅ヶ崎に住んでいる時は銀座の教室に行っていた。現在は渋谷に行っている。電話で勧誘されて1年前から始めた。スクールには顔見知り程度の人はいる。レッスンの後、渋谷でお茶をしてから帰る。

「清水陽」は公園に入居するとき公園のしおりに紹介されていたので、歩いて場所を確認しに行った。「サザビー」は会社が廃業だった時、通り道だったので仕事帰りに寄っていた。そのときは自転車で行っていた。現在は行っていない。

「ラフォーレ原宿」や「原宿クエスト」は友人との待ち合わせで利用する。友人はJR原宿駅を利用するので、こで待ちあわせて店など見ながら表参道を歩くのに都合が良い。

欲しい施設は図書館があればよい（渋谷区の中央図書館の存在を知らなかった）。他は十分過ぎるくらいある。

【近隣交流】

団地内での付き合いは入居時の挨拶をきっかけに507号室の人は、お互いの家を訪ねあったり、互いの部屋の前で立ち話をしたりする。ここに30年くらい住んでいて、自宅で書き物をしていて5階の班長さんのような人。新しく入居した人を必ず食事に誘うことにしているらしく、入居して1ヵ月以内に誘われて和食のおいしい店で御馳走になった。また偶然に顔を合わせた時、散歩に行きましようと言われ、お互い時間に余裕があったので出張した。その時団地付近の店をいろいろ教えてもらった。自治会の活動、会費、etcについても詳しく何でも教えてくれる。立ち話程度のは511号室の人。挨拶をするのは514号室、515号室、516号室とエレベーターで会う他階の3人。5階は部屋を借りていても不在の人が多く、両隣の508号室と510号室は月に数日しかない。言いにくいことは他の人は面と向かっては何も言わず、507号室の人を通じて伝わって来る。たとえば、居住者以外の男性が洗面所を使ったり誰かの部屋に入ったりするのを見ていて、目に余る行為だと507号室の人を通じて注意してもらった。また、昔から住んでいる人は洗濯の時間や入浴の時間なども誰が何時に使うのか決まっていて、入居当初それを知らなくてかち合ったりと迷惑そうなる表情をされた。そんなことも507号室の人を通じて話が伝わって来てて後知った。古くからいる人は洗濯しただけ入浴したりするので私は夜するようになっている。その他にも、他の階を歩いていたりと「5階の人が6階に来ていた」などということも6階の人から507号室の人に伝わって話を聞く。人のことを見ている。トイレ、洗面所なども自分の階以外には使にくい。皆周りの人のことを気にして住んでいる。口には出さないが、音とかで何時に出動し帰るとか自分の行動を知っている。気にしないようにしている。共同生活なので夜音を立ててはいけないが、静かすぎると思えて心配される。高齢の人もいるので心配している。下町のように口には出さないが、互いに干渉し合っている。あまりいい意味ではない。

団地外で家を歩き来る付き合いの人はなく、英会話教室のレッスンの帰りに「お茶のみ」する程度で、スポーツジムに至っては個人個人が別々に運動しているの新しい出会いもない。

【北青山-04】は子供を持つ専業主婦（45才）。〈居住歴21年、夫婦+末子13歳以上世帯〉

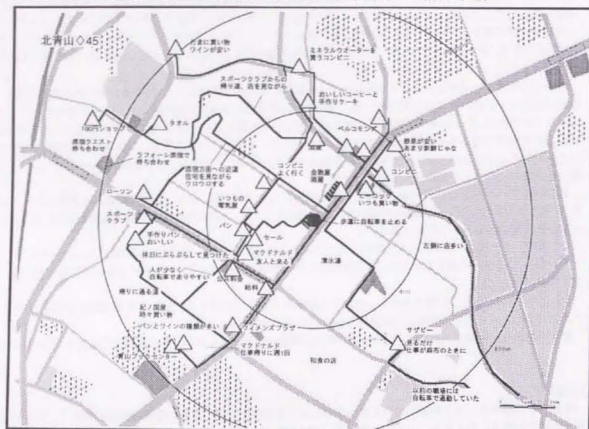


図4-2 北青山-04の場所利用状況

【生活施設の利用】

買物は東急ストアより品物の多いピーコックに行く。ちょっとした買物は団地裏通りのコンビニで済ませる。夫がチーズとにんにくと洋食が一切だなので、いつも外食に行く店は決まっています。ベルコムモンスの「寿司清」、「しゃが亭」とCプラザの「やぶさば」というそば屋、あとは245ビルの「つば八」や団地横の「新鮮組」、「魚民」という居酒屋などを利用する。

祭りは、主に子供が小さい時に、都営住宅主催の祭りに都営住宅の7人の友達が行っていた。もし同じ日にこの団地の祭りがあったら、都営住宅の方に行ってしまう。

ウィンタースクールのNHKのカルチャーセンターの墨絵教室には今年の4月から行き始めた。青山会館の墨絵に誘われる直前に行き始め、こちらのほうはお金も払い込んでしまったので仕方なく行っている状態である。墨絵には前から興味があり、青山会館に今年の6月から行き始めた。この団地の11Fに住んでいる方誘われて行くようになった。

「テニスサークル」はもう15年位続いている活動で、きっかけは、港区主催のテニス教室に参加し、その参加者たちで自主的にクラブを作ろうという話になり、サークルを立ち上げた。港区もクラブを作る時、コートを提供してくれるなどバックアップしてくれた。サークル員は多い時は60名位で、月会費は千円と安い。うちの娘も入っていた。サークルを作る時は自分も含めた10人が発起人となったが、その中でも始めから自主的にずっと会長をやっていた60歳の男性がいて、この方がいなかったら活動は続いていたかと思う。この人が中心になって皆を引っ張っていき、皆はそれについて行った。活動をしているテニスコートに今年の6月からナイター施設ができたので、今は、夜にサークル内の有志とナイターテニスをしている。このテニスサークルとは別に、他の友人と別のテニスコート借りて、週1回テニスをしに行っている。

今年の4月から、友人に誘われて、国立競技場の水泳教室に毎週金曜日の午前中に行き始めた。誘ってくれた友人は、子供を通して知り合った友人で、彼女もテニスサークルに入っている。

トルペイントは、日本橋前町に5年程前から習いに行っている。知ったきっかけは、トルペイントのお

店が開いている教室で、年に1回のホビーショーに行った時に知った。ここでできた知り合いとは、わからない作業と一緒にやろうと、家で一緒に作業をしたりする。

港区各地区的な社会福祉会館へは、講師として10年程前から手芸を教えるに行っている。17年程前から、「マクrame」(紐を編んでかごやのれんを作る手芸)を東急ハンズで習って講師の資格を取り、子供が幼稚園の頃は自宅で、幼稚園のお母さん達にマクrameを教えていた。自宅では子供が小学校4年生になるまで教えていたが、その頃から夫が自宅で仕事をするようになり、それと前後して福祉会館での講師の話が入ってきたので、それ以来自宅では全く教えるなくなった。福祉会館へ行くようになったのは、そこを利用しているお祖母さんの娘さんがうちにマクrameを習いに来ていて、作った作品をお祖母さんに見せたらとても気に入られて、福祉会館に作品を持っていったことがきっかけ。福祉会館の人に是非教えるに来てほしいと言われて行くことになった。地元の人推薦という形。今では、月2〜3回教えるに行っている。高齢者の好みに合わせて、かつ、1回で完成するような簡単な手芸を考えて、教えている。

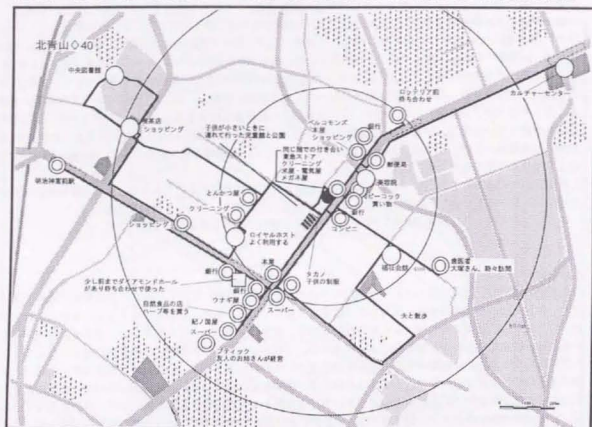
散歩というのは特にしないが、元気な時は裏道を通って原宿駅まで歩くこともある。友人と待ち合わせをする場合は、分かり易いので、表参道の交差点の交番前と、外苑前のひとつしかない改札口など。

今は行かなくなったが子供が小さい時は、社会教育会館内的小さな図書館によく行っていた。

【近隣交際】

団地内では向かいの家に住んでいた同世代の子供がいる人と、お互いに忙しい時に子供を風呂に入れてあげたり、お迎えにいったり、協力しあって子育てをしていた。他に、わりと仲良くしているのは、同じフロアの太村さん、神田さんなど。よく立ち話をしたり、おすそ分けし合ったりしていて、青年会館で行われている墨絵の教室に誘われて一緒に行くようになった。11階の人は、一番最初に自治会の役員と一緒にやっただけで仲良くなった。この団地の人は消極的な付き合いしかしないようだが、11階はわりと仲がいいと思う。子供が小さい時は、お互いに助け合えるような仲の良い関係を望むが、子供が大きくなったので、今は外に目が向いているし、今程度の付き合いで満足している。立ち話をする場所は、廊下や、エレベーターを待っている時に、ホールで話すことが多い。団地外では、子供が小さい時は、裏の都営団地にある「くじら公園」や「三角公園」に毎日遊びに連れていっていたので、そこでできた友人が沢山いた。子供7人とその親で、親しくしていた。親の一人が引率になって、ほぼ毎日のように子供全員を渋谷の児童館に連れていって遊んでいたり、神宮の方のいちよう並木までどんぐり拾いに行ったり、おかずを待ち合わせて一緒に夕飯を食べたりと、とても仲良くしていた。子供は大きくなって子供同士は関係がなくなったが、親同士は今でも親しくしていて、今度も7人で神宮に行く予定がある。またテニスサークルをきっかけに親しくなった友人とは、家などに遊びに行く事もあるし、トルペイントで知り合った方とは、わからない作業と一緒にやろうと、家で一緒に作業をしている。

【北青山-40】は地域外で自営業をしていて子供が独立した主婦（59才）。〈居住歴21年、高齢夫婦世帯〉



図付4-3 【北青山-40】の場所利用状況

【生活施設の利用】

普段の買物は東急ストア、ピーコック、ベルコモンズ、紀ノ国屋を利用している。青山通り沿いのコンビニにはちょっとした買物に利用する。青山通り沿いのあつらえの洋服店は、3年ほど前から行っている。友のお姉さんが経営しているので、利用するようにになった。「ハーブの店」は、青山通り沿いの自然食品の店に、5年ほど前から行っている。外食は、世田谷にいたときは来ていた青山の店は、近すぎてよそゆき気分が出ないからと、あまり行かなくなった。

「団地内の病院」は、子供を産むときに中井さんという産婦人科にお世話になり、そのときに天野さんという小児科があり、近くで便利なのでお世話になっていた。内科もあり、つい最近もお世話になった。足つば療法の「ベストケア」は、半年ほど前に青山に本社が移転してきたようだが、ずっと池袋の支店に行っている。3年ほど前から行っている。

子供が小さい頃は、団地のすぐ横の小さい児童館や、都営団地内の小さな公園に行った。

夫は外苑の方を通過して絵画館の方まで、毎日散歩している。他に散歩は、夫と一緒に根岸美術館の方まで行っていて、青山会館を通過して帰ってくるルートが多い。散歩のルートは、一緒に歩く夫に任せてしまう。広尾や麻布まで歩いて行くので（30分くらい）、そのときは青山公園を通過していく。カナダ大使館近くの高橋基清記念館の公園にも、ときどき歩いていく。

今は他のビルを建設中だが、今まで表参道沿いにダイヤモンドホールというのがあって、ロビーへは誰でも入れるので、待ち合わせによく利用していた。レストランもよく利用していた。

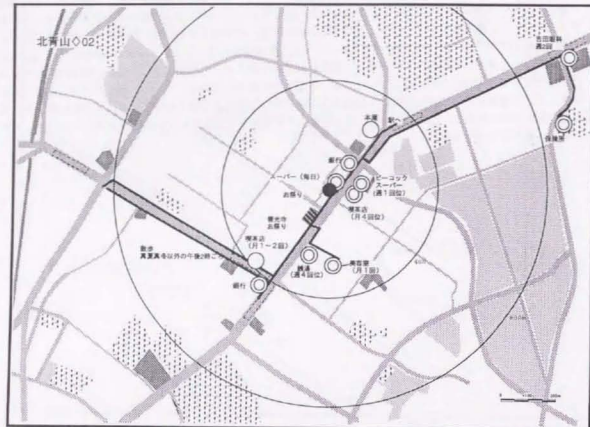
婦人会には、教育会館で年に2回程度やる婦人会主催のバザーにずっと前から参加している。婦人会は青山近辺の集まりで、だいたい近所の人が集まっている。私は、渋谷の上山町に住んでいる方など付き合いがある。

カルチャーセンターの文章講座は、青山一丁目のツインタワービル内のカルチャーセンターへ歩いて行っている。1年ほど前から、婦人会で知り合った渋谷の方と誘い合って行くようになった。

【近隣交際】

団地内での付き合いは、子供をきっかけに同じフロアの方と502号の方で、二人とも団地ができた時から住んでいるのだが、いまでも家を行き来して親しくしている。あと1階の方とも、子供が同じ年の関係で親しくしていたが、車マニアだったので郊外の方へ越えていった。4階には、団地の下の商店街のオーナーが多く住んでいて、顔見知りのオーナーとは時々立ち話をする。立ち話をするのは、廊下で会ったときご挨拶をしたり、あとは1階のエレベーターホールでエレベーターを待っているときなど。団地に昔からいる人は、みなもう歳をとって多くは代替わりしているが、歳をとってからの方がよく話そうになった。団地内の付き合いは、自分はあまり深い付き合いはしていないが、今程度の付き合いで満足している。団地外では、南青山の大塚さんという歯医者さんのお宅へは時々訪問する。団地外では婦人会で知り合った渋谷の上山町に住んでいる方など付き合いがある。この方とは誘い合って青山一丁目のツインタワービル内のカルチャーセンターの文章講座へ通うようになった。

【北青山・02】は無職の高齢女性単身者（64才）。〈居住歴28年、高齢単身世帯〉



図付4-4 【北青山・02】の場所利用状況

【生活施設の利用】

普段の買物は東急ストアで済まし、週1回補助的にピーコックに行く。青山は店がとて多いが、たいていは若者向けの店なので、私が行くような店はない。買物したい時はだいたいデパートに行く。気分転換したいので、遠くのデパートに行くことが多い。「喫茶店」は、好きなのでよく行く。散歩の合間や、どこかに出かけた帰りなどに喫茶店で休むことが多い。新宿と渋谷には行きつけの店がある。青山は、最近が良い喫茶店が減ったように思う。

病院は、都立広尾病院と古田眼科に行っているが、バスを使って二つの病院に続けて行き、眼科の後はそのまま遊びに行ってしまう。場所がいいのでとても便利である。「保健所」へは、ウオーキング講座や食事療法の講義などを聴きに行っている。

銭湯は、冬に利用する。夏は公団のシャワーで済ませてしまう。利用する時間帯は5:30～6:30PMごろ。ここは団地の人も多く利用しているようだ。老人の社交場になっているが、私はそういうのは好きでないのあまり話さない。

「美容院」は、安いのでここに行っている。青山は美容院がとて多いが、たいてい若い人向けで行けない。ここは中年向けの美容院。

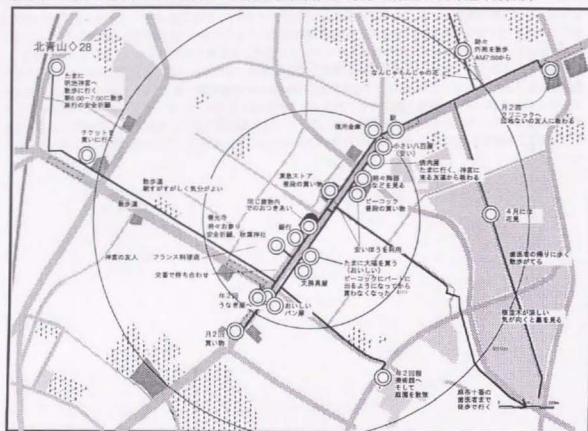
祭りは都営住宅内の広い道路や佐友ビル、善光寺などでやっているの一人で散歩でてら行く。歩いていと祭りをやっているのがわかるので、少し覗いてみる。「青山公園」は、昼間でも女性がひとりて歩くに危ない所なので、花見の季節にだけ散歩をしに行く。普段の散歩は、表参道をぶらぶらしたり、時々喫茶店に寄ったりするのが好きである。表参道は人通りが多くてとても楽しい。裏道は狭いのに車が通るし、狭い所は好きでないのていつも大通りを通る。広々としているし、建物も大きいので、大通りが好き。広々とした人通りの多い所が好きなので、銀座へよく行く。私は戦前に韓国で生まれ育ったので、感覚が大陸的なのだと思う。ちまたした所は神経がやられてしまう。

「東京大学仏教青年会」で毎週土曜日に行なっている仏教の講義を聴きに行っている。いわゆる東大の外郭団体で、場所は本郷三丁目で行っている。

【近隣交際】

団地内の人との付き合いは、あまり深入りしないようにしている。共同生活を円滑に行うために、挨拶する程度。特に5階は高齢者が多く、高齢の単身者は皆さびしいので、入り込みすぎてしまう。勤めていた時は家に帰るだけだったのであまり問題なかったが、昼間部屋ににいるようになってから煩わしさを感じるようになった。皆さびしくて仕方ないので、誰か話す人をつかまよう、目を光らせている感じで悪い。一度捕まると、長時間放してくれなかったり、人の着ている洋服を物色したり、気分のいい物ではない。中にはべったりした関係を好む人達もいるようだが、私はそうした関係が嫌いなので迷惑に感じる。私が一度断ってからあまり寄ってこなくなったが、今も洗濯室で洗濯をしていると、ドアの辺りからじっと様子うかがっている人がいたりする。高齢になり、人付き合いがうまくできなくなったしまったのだと思う。元から住んでいた住人が高齢化したことと、高齢者を2割は入れなくてはいいないという公団のきまりとで、ここは高齢者住宅になってしまった。

【北青山-28】は地域内にパートに出ている高齢女性単身者（61才）。〈居住歴7年、高齢単身世帯〉



図付4-5 北青山-28の場所利用状況

【生活施設の利用】

普段の買物は「東急ストア」と「ピーコック」の安い方で買う。ピーコックで働いているが東急ストアが安ければそちらで買う。「紀伊国屋」は月に2回定期的に行く。買うものは自分の好みのパンと酒。イギリスパンは世田谷に住んでいる時も定期的に買いに来ていた。普段の買物はこのスーパー3軒でなんでもそろそろ。「八百屋」は歩いていて見つけて、安いので利用する。友達も言っていた。「アンデルセン」では「紀伊国屋」のパンと違う種類のパンを年に10万円位買っていたこともあったが、今は飽きて利用していない。「和菓子のお店」ではたまに大福を買っていたが、ピーコックにパートに行くようになってからは行かなくなった。「文具店」は通りがかりに見つけた。年に1〜2回買う。「3D青山ビル」で陶器を見る。月に2回値物が変わるのでピーコックからの帰りに必ず見る。こういうのがあるから青山が好き。「原宿クエスト」ではコンサートのチケットを買う。「地内屋」は世田谷から神宮にテニスに来る友達に聞いて時々行く。「安くておいしいレストラン（仏料理店）」も神宮にテニスに来る友人に教えてもらい、夜は高いから庭に行く。青山のタウン誌にも載っている。青山は歩ける所に何でもある。「うなぎ屋」へは年に2回行く。

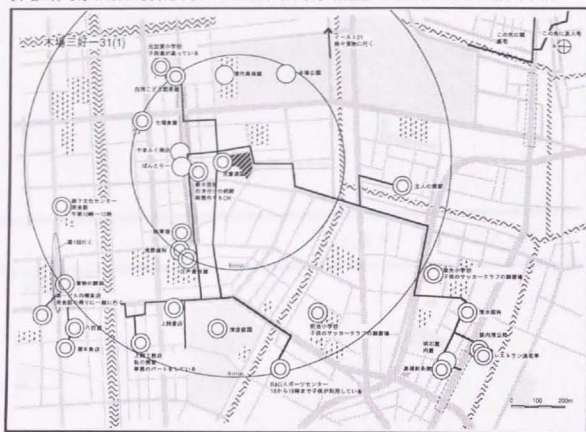
「安心感のもてる眼科、内科の病院」は赤坂に住む友達に聞いた。「青山クリニック」は健康診断の時どこに行こうかと思っていたら団地内の友達に教えてくれた。「歯医者」は麻布十番まで45分かけて歩いて行っている。20分位は平気で歩く。保健所の健康診断でもらった歯科医がよかったので、そこで治療を受けたいと思ったが、先生が客引きに来てはいるわけではないといって場所を覚えてくれなかった。後で保健所で調べてもらった。歯医者までは行きは地図で調べて最短距離の道を歩く。帰りは青山公園で墓を見ながらブラブラ歩いて帰る。大きな墓、有名な人の墓を見て、いろいろ想像する。外人墓地を見る。板並木があつて涼しい。

ここはコンサートに行くのに便利。クラシックが好きで、赤坂のサントリーホール、上野の文化会館、渋谷のオーチャードホール、池袋の東京芸術劇場などに行く。東京芸術劇場も原宿駅まで歩いて行けば160円で歩くことができる。大体のコンサートホールは行ける。ギャラリーも多い。そういうの好きだから、お金をかけずに楽しめる。

【近隣交際】

10階の人とは挨拶しても何も言わない一人を除いて皆挨拶をする。口がきけないのかと思ったら突然として文句を言うようになった。互いに家を訪問するのは隣の1015号室と1005号室の方。5階の友人、6階の方。「1015号室の方」は最初は取っ付き悪く、入居して最初に挨拶に行ったらとても迷惑そうな顔をした。だから「私は人の生活に立ち入るつもりはないから心配しないで」と言った。あまり隣同士で近すぎると何かのときいきなり元になると思い、私も返ってその方がいいなと思った。その後なぜかなくなったのかわからない。でも、その人は結婚して、もうそろそろ出ていくから残念だと思ふ。「1005号室の方」とのきっかけは、私が葬儀をやっていることを知って洋服を見てくれとか、直してとか頼まれたで付き合いが始まった。「5階の友人」は昔からの仕事の仲間。「6階の方」は5階の友人を通じて知り合った。医者はこちらがいいとか教えてくれた。団地外では「神宮に住む友達」は、友達の方がもっぱら自宅に来る。あまり料理しない人なので私の方が何かつくって「食べに来ない？」と誘う。この友達は青山1丁目に仕事に行っていてちょうど帰り道なので寄ってもらう。「赤坂の友達」も歩いて来てくれる。「世田谷の友人」はテニスの帰りに寄る。主な友達は仕事の仲間やスキー、お茶、コーストとサークル活動をやったときの友人。田舎から就職で出てきたので、子供の頃からの友人ではなくて趣味の友人。歳を取ると新しく深い友達はできにくい。

〔木場三好-31〕は深川の実家を手伝っている主婦(36才)。〔居住歴13年、夫婦+末子12歳以下世帯〕



図付4-6 〔木場三好-31〕の場所利用状況

〔生活施設の利用〕

普段の買物は資料館通り商店街の「ばんとーり」や東陽の「イースト21」やスーパーを使い分けているが、実家に行った帰りに週に1回は高橋の商店街に寄ることもある。

外食は自転車乗り門前仲町周辺の私が子供の頃から利用している境内の「公園苑」、レストラン「浪花亭」に家族で出かける。

資料館通りにある「東陽堂鈴木病院」は子供の頃から親に連れられて通院していたので、先生が替わっても安心して利用できるし、時間外でも融通してくれる。内科の先生ではあるが耳鼻科でも眼科でも一寸したものなら診てくれるので、ほとんどここで済んでしまう。歯医者は子供の頃から「浅野歯科」。歯の治療だけは歯医者に任せてくれ、と鈴木病院の先生に言われているので。

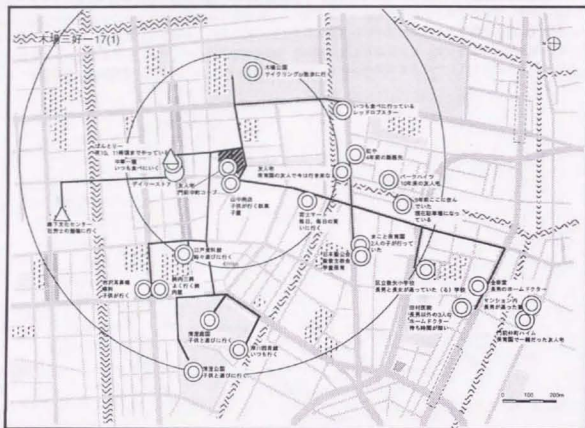
公共施設で利用するのは東陽の「江東区文化センター」でコンサートや演劇、「江戸資料館」で落語、「テアタ江東」でクラシックのコンサートを見る。それぞれの催し物の内容は江東区報やタウン誌から8割、親戚から2割情報を得ている。内容により夫婦で行くときもあれば、子供連を連れて行くときもある。文化センター発行のタウン誌を見て、「森下文化センター」で英会話講座を始めた。「本場公園」や「清澄庭園」への散歩は家族で行くことも、夫婦で行くこともある。

地域活動の一環として「児童遊園」で行われる子供会のバザーや祭りなど何か催し物があるときに協力する。PTA執行部の役員として、小学校内の活動はもとより周辺地域の講習会、研修会にも参加している。1学期に1回深川六中とその学区の元加賀小、白河小のPTAの役員で研修会をしている。何か突発的に問題が起きたときは、その都度集まるようにしている。江東区内の講習会は東陽の江東区文化センターや大島の総合区民センターで月に2回程度開かれているが、PTAの役員がいつも集まるわけではなく、広報誌を作っている広報部の専門的な集まり、献血、歯科衛生などの保健部の集まりなど自分の担当の会に参加する。

〔近隣交際〕

団地内では団地内のグループに属し付き合いの中心となっている。また元加賀小のPTA執行部の役員をしていて深川六中の学区内の集まりの時、同じ年代の子供を持つ小中学校の同級生と付き合いが再開される。実家の手伝いをしているためこの地区を訪れることが多く、また地区の商店街も利用するので地域内で偶発的によく出会う。また子供同士が打ち解けやすい実家の深川町会の催し物にも参加しているため、親同士の「先日は子供がお世話になりました」と立ち話をしている地域外にも顔見知りはある。子供をきっかけとしないものには森下文化センターでの英会話講座があり、終了後に仲のいい5、6人で近くの喫茶店で「お茶飲み」をしている。

【木場三好-17】は地域外に動機に出ている主婦（40才）。《居住歴9年、夫婦+末子12歳以下世帯》



図付 4-7 【木場三好-17】の場所利用状況

【生活施設の利用】

長男が小学生になると、私が会社から帰るまで一人で家にいることになるので、それまでの居場所を見つける必要があり、団地の人、職場の人、江東区報から学童保育に関するいろいろな情報を集め検討し、長男が通っていた「まこと保育園」の敷地内にある学童保育と区営の学童保育をピックアップした。最終的には長男が友達がいって、慣れた場所がいいと言うことで、「まこと保育園」内の学童保育に預けた。ここには小学3年生まで預けることができ、今は長女を預けている。木場三好は元加賀小の学区だが、「まこと保育園」内の学童保育は遠いので二人とも数矢小に転入学させた。長男が小学4年生になり、学童保育の代わりとして塾を選んだ。はじめは子供の居場所として考えていたで、塾に直接電話して時間や場所を調べ、数矢小の近くの牡丹町の塾を選んだ。買物は毎日、会社の帰りに子供を迎えに行き、その帰り道にある「富士マート」で食品を買って帰る。ここは店内が狭いので買物に時間がからない。日用品や洋服は週1、2回「イースト21」に買いに行くが、店内が広く売場も階が分かれているので、買物に時間がかり普段の買物には利用しない。5年くらい前までは、値段が格段に安かったで「ゼア」を利用していたが、最近ではチラシを見比べて「イースト21」の方が安く利用しなくなった。主人は買物にはつき合わないが、「レストランで食べるよ」と言うや付いてくる。夜、買物するときは「ローソン」、「デイリーストア」、「ぱんとりー」を利用する。家族で外食するとき利用する店は、「焼肉三興」、「中華一龍」、「レットロブスター」、それに「イースト21」内にあるレストランで、休日の一食は外食することが多い。「田村病院」は18時になったらすぐに診察をはじめてくれて、待ち時間も短い。「金塚堂」は長男が保育園の時にかけた病院でよく効く薬を出してくれたが、先生が決まった時間に診察をはじめてくれないので、今度風邪を引いたら「田村病院」に行くかもしれない。病院を選ぶ一番大きな要因は時間。会社帰りに行くことになるので、三好町の病院では診察時間が間に合わず、門前仲町駅や学童保育の近くで、待ち時間の短い病院を利用することになる。

「深川図書館」は子供と3人行き、本とかCDやビデオを借りてすぐ帰ってくる。平日は20時まで、休日は17時まで開いているのでそれまでに行く。主人は勉強に行ったらと言うが、浪人生が多いので行く気になれない。

「現代美術館」には1、2回行ったが、グラフィックデザインなどよく分からず、うちの子供が描いた絵みたいで感動しなかった。「江戸資料館」は館内のセットが結構おもしろくて子供が小さいときによく行ったが、最近では飽きて行かなくなった。「木場公園」で行われるフリーマーケットや材木業者などのイベント、区民祭りにはたまに行く。フリーマーケットは月に2回くらい開かれて、半分は業者の店が入っているが、保育園や学童保育の友達も店を出して子供のおもちゃや衣類を売っている。休日の午後は、子供と3人で木場公園や清澄公園にサイクリングに行く。そのとき主人は家で寝ている。

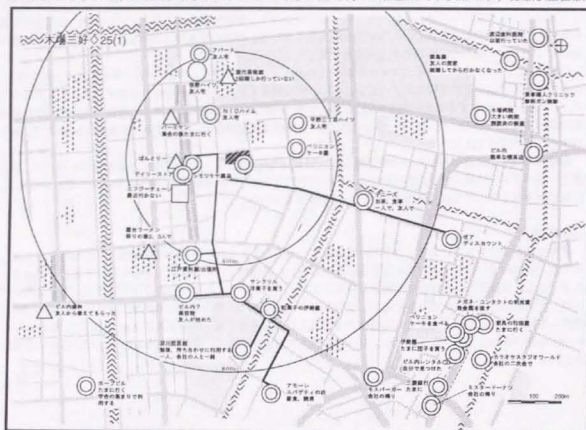
「森下文化センター」には社労士の資格を取るための講習に通っている。文化センター発行のタウン誌を見て、仕事の幅が広がると思い受講した。いままでには、区の健康センターの気功講座で健康ダンスを教えるもらった。経理3級を取得するために新橋に週2通ったり、子供が産まれる前に子育ての勉強のため富岡の区民図書館の親学講座に通っていた。こういう区が開いている講座は料金が安い。経理講座の授業料は1,000円で、あとはテキスト代だけでよかった。

地域外では江東区報の催し物の情報を頼りに、「江東区文化センター」にコンサートを聴きにいったり、新木場でヘリコプターに乗ったり、夢の島のヨットハーバーでヨットに乗ったりと、家族でいろいろ楽しんでいる。江東区が主催しているものは料金が安く、いつも利用している。

【近隣交際】

子供会は貸貸であるため参加しづらい。学童保育に預けるため子供をその近くに越境入学させていることもあって、団地内で子供をきっかけに付き合うことはない。団地内では階段室の人と立ち話するのがそのほとんどである。幼稚園では子供をきっかけに家を行き来する人がいて、その中には今でも付き合っている人はいが、小中学校では子供をきっかけに親しく付き合うことはない。幼稚園時代は冬木（地域内）に住んでいて通園している人は自宅付近に多く、幼稚園の送り迎えなど知り合うきっかけがあるためであろう。子供をきっかけとしないものとして、森下文化センターでの社労士講座があるが、資格取得を目的としているため交流は生まれていない。

〔本場三好-25〕は永代に勤め、宗教活動をしている長女（29才）。〔居住歴13年、夫婦+末子13歳以上世帯〕



図付4-8 〔本場三好-25〕の場所利用状況

〔生活施設の利用〕

普段の買物は母親に任せているが、ちょっとした買物は資料館通りのスーパーやコンビニで済ませる。デパートやデパートショップが好きなので、「ゼア」は良く利用している。また、よく上野の方まで出かけては、いろいろ店を回って安いものを探している。

家具屋は鏡や家具など欲しいものがあるとき、ふらっと覗く。眼鏡屋は指輪や貴金属を直すのに利用する。会社の人と行くときはお好み焼、もんじゃ、串あげの「サンキュー」や居酒屋「たけとんぼ」など門前仲町の店に行く。「カラオケ」は2次会などで利用する。

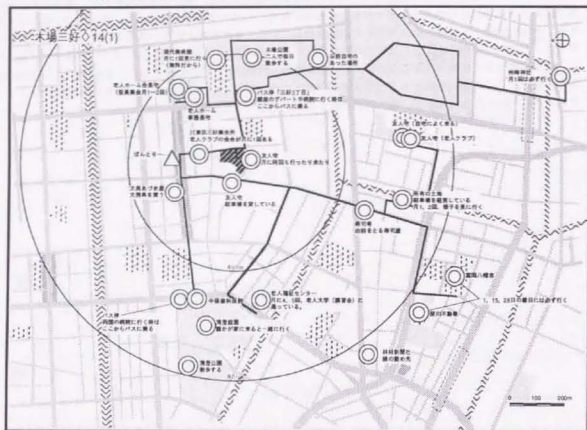
外食は宗教活動が集まったあと、みんなで「バーミヤン」に行ったが、今までに3回くらいしか行ったことはない。「白河の屋台ラーメン屋」は最近行くようになったおいしい屋台。門前仲町や清瀬の飲食店やファーストフードは両親にタバコを吸っていることは隠しているので会社の帰りや都内に行った帰りに一服するために寄る。会社の人と行くときは門前仲町の飲食店や居酒屋を利用し、2次会などで「カラオケ」に行く。「深川図書館」は小学校のときに友人から聞いて、大学までは勉強する時に利用し、最近では会社の帰りに本を借りたり、証券アナリストの資格の勉強に利用している。会社からの帰り道でもとても便利なので5時半から6時くらいまでいる。最近では社内恋愛していたので会社の人に会わないようにデパートの待ち合わせに使ったこともあった。

私は行き付けの病院はない。会社の医務室でほとんど済んでしまう。「鎌倉ビル内の歯科」は最近宗教活動を始めた友達から教わり行くようになった。

〔近隣交際〕

団地内で訪問する人は宗教活動を通して知り合った人がほとんどで、週に1回会合があり、座談会を各々の家で開いて子供には信仰教育をしたりする。子供達には月に1回少年部の会合がある。団地内の子供だけでは人数が少ないので、元加賀小の生徒を中心に構成している。宗教活動の最も小さな単位としてはこの集合住宅だが、一つ大きな単位になると三好と平野の人達で、団地の隣の小島宅に週に1回、夕食を済ませて午後7時からいから集まる。地域外のところにも出向いて東陽町、森下、門前仲町を超えるところまで月に2、3回は自転車で行くなど付き合いのほとんどは宗教活動がきっかけになっている。会社の人とは帰りに居酒屋やカラオケにみんなで行くことはあるが、個人的に会社以外で付き合い合うことはない。

〔本場三好-14〕は以前に長い間本場で材木屋を営んでいた専業夫婦（75才）。
（居住歴13年、夫婦・妻子13歳以上世帯）



図付4-19 〔本場三好-14〕の場所利用状況

〔生活施設の利用〕

以前は、バスを利用して、毎日のように日本橋に買物に行っていた。現在、買物は娘がほとんどする。たまに買物するときは資料館通りの商店街のスーパーや文具店を利用する。出前はそば屋の「こし庵」と「寿司考」で取る。以前から利用していた新しい店が出来ても変えるつもりはない。

散歩は毎日本場公園内を通り州崎神社まで行く。入院前はよく2人で行ってた。以前は友人が州崎神社周辺に住んでいて散歩の途中で会い立ち話をしたり、家に寄ったりしていた。本場公園内の美術館は60歳以上の高齢者は無料で利用できる。月に1回は鑑賞している。清澄公園にも散歩に行くことがあり、清澄庭園は地域外から友達が出来たときに案内する。主人は毎月1、15、28日の富岡八幡宮、深川不動尊のお参りを、小さいときから欠かしたことはない。雨が降ろうが、雪が降ろうが絶対行く。まじめで頑固な人だから、2人で散歩に行くこともある。歩いていて知っている人によく会い立ち話をする。富岡八幡宮の氏子会には昔は入っていた。

主人は「深川老人福祉センター」の老人大学に週に1回講義を受けに行く。活動自体は10年前ぐらいに始まり、その当時、主人の友達の息子が区役所に勤めてた為、誘われて行き始め、今は広報誌を見て受ける講義を決めている。

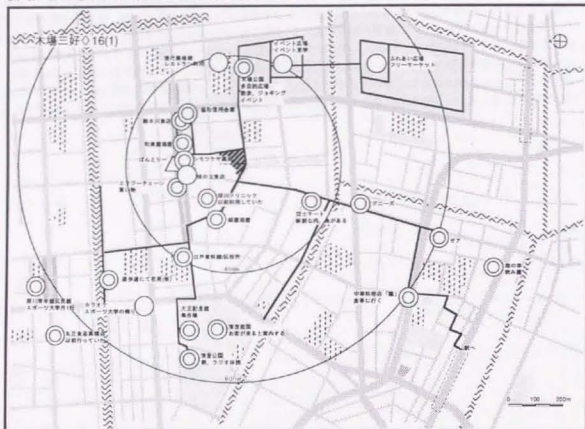
老人クラブは町会の老人会の役員の方が始め、現在は30人くらいで三好集会所で活動している。クラブとしては1つだが、様々なグループに別れていて、入っている人達もそれぞれ違う。スポーツをするグループや歌会のグループなど、主人は以前ゲートボールや体操のグループに入っていた。月に2回は集まって状況報告したり、飲んだり歌ったりの会をする。

本場に駐車場を経営していて、月に1回は様子を見に行く。この土地は本場公園立ち退きの時に宛がわれたものである。また、その通りに近くに住む老人クラブの友達の家に行くこともある。

〔近隣交際〕

以前は老人クラブのゲートボールや体操などのグループで活動していたが、現在は月に2回の活動状況の報告に集まり飲んだり歌ったりの会で交流を深めている。またその中には月に何回も家に行き来する人、駐車場の様子を見に行った通りにいつも来る人など活動以外にも親密な付き合いが見られる。以前の仕事仲間が多数この地域に今も住んでいるので、富岡八幡宮の縁日や本場公園や清澄公園に散歩に行ったときなどに会い立ち話をするなど付き合いも続いているなど、地域内の人と重層的な付き合いを拡げている。しかし老人福祉センターに週に1回講習を聴きに通っているが、そこでの交流は発生していないなど付き合いのきっかけにならないすべての生活行為がそれを拡げているわけではない。また付き合いは高齢者だけではなく、団地の中庭で若い人との交流もあり、団地周辺に住む人は不規則ではあるが週に何回かは様子を見に自宅を訪ねてくれる。

【本場三好-16】は夫婦で過ごす時間の長い専業主婦（47才）。（居住歴12年、若年夫婦世帯）



図付4-10 【本場三好-16】の場所利用状況

【生活施設の利用】

買物は入居時、この辺には資料館通りの商店街しかなく、そこばかり利用していたが、最近は「富士マート」、「ゼア」、「イースト21」などスーパーができて使い分けている。「富士マート」は肉・魚のいいものが置いてあり、「ゼア」は日用品を、「イースト21」は週末、主人と車でまとめ買いをする。普段の買物には事欠かないが、都心に近いわりには気の利いた食品がない。そういうものは都心まで買いに出かける。外食はほとんどしない。たまに食事の用意がよいときデニーズに行く。また、「現代美術館」を鑑賞した帰り、館内のレストランで食事をしたことがある。

風邪の時は「深川クリニック」を利用していたが、最近は風邪を引かずほとんど行っていない。「根村歯科」は204号室の人（団地内を掃除する人）と立ち話しているときに、「どこかにいい歯医者ない？」と聞いたところ、教えてくれた。江東区報の無料定期検診の記事をよく見ていて、私は年に1回、健康診断を受けている。主人は会社で。

「木場公園」で行われるイベントは3ヶ月に1回くらい夫婦で見に行く。フリーマーケットには江東区報から情報を得て、一人で行くことが多い。年に2.3回しかフリーマーケットは開催しないので必ず行っている。「清澄庭園」はお客さんが家に遊びに来たときに案内する。2年前までは、朝ラジオ体操をしていた。最近は替わって休んでいるが、涼しいときは毎日「木場公園」か「清澄庭園」で散歩あるいはジョギングをしている。

3年前に江東区報でスポーツ大学のことを知り、地域のスポーツボランティアや指導員になればいいと思い受講することにした。しかし、指導員になるのは難しく、そのまま卒業してしまっただけ。講習は1年間のカリキュラムに沿って、スポーツ生理学、地元のレクリエーションなどスポーツ全般に行われた。場所は高橋の区民館で講習を、深川スポーツセンターで実技を。講習後は近くの店でいろいろ買って来て、区民館で「お茶飲み」する事が多く、時には清澄のカラオケ屋に行くこともあった。講習終了後にOB会が発足し、月に1回年間の活動を企画、実施するために集まっている。3ヶ月に1回程度、テニスやハイキングを行っている。9月からの講習の受付は、OB会が持ち回りで担当している。

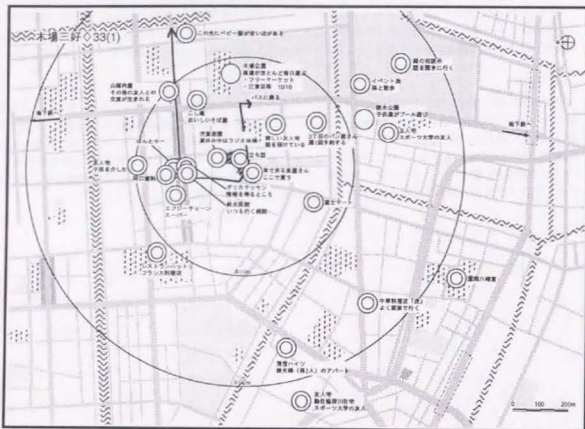
昔は既にまで花見に出かけていたが、今年、自転車で散策しているとき、小名木川の遊歩道が桜並木になっているのを見つけて夫婦で行った。そのほかにも大横川沿いに花見のできる場所があるが、狭いのであまり行かない。あまり人には知られていないので、この辺は私達の穴場。

「有明スポーツセンター」が開校したときに、イベントや施設の案内が出て見学に行った。最近、夫婦でジュニアのバスケットボールや水泳の大会を観戦したり、一人で休みに行ったりしている。スポーツ施設が近くにあれば、もっと利用頻度が上がると思う。今は必要に応じて出かけられるが、高齢になったとき困る。

【近隣交際】

団地内に訪問するほど親しい人はなく、ほとんどの人が挨拶をする程度の付き合いである。そのうち立ち話をするのは同じ階段室の人といつも中庭を掃除している居住者のみである。3年前の1年間は高橋の区民館でスポーツ大学の講習を、深川スポーツセンターで実技をしていた。講習後は近くの店でいろいろ買って来て、区民館で「お茶飲み」する事が多く、時には清澄のカラオケ屋に行くこともあった。講習終了後にOB会が発足し、3ヶ月に1回程度、皆でテニスやハイキングを行っているが活動以外で付き合いはない。団地内外ともに親しく付き合うことはなく、週末は木場公園のイベントやゴルフなど夫婦で過ごすことが多い。

【本場三好-33】は分譲住宅に住み、子供が独立した専業主婦（44才）。〈居住歴13年、高齢夫婦世帯〉



図付4-11 【本場三好-33】の場所利用状況

【生活施設の利用】

普段の買物は江戸資料館通りの商店街の「ばんとりー」や「富士マート」を利用している。江戸資料館通りの商店街の「デリカテッセン」は飛び込みで見つけた。「出入りの魚屋さん」は、箱を持って団地前の通りまで売りに来る。「パン屋」は採算を度外視して商売しているので、評判がいいが、すぐに売り切れになってしまう。そのため予約しておいて週に2回買いに行き、冷凍しておく。この辺りの古い店は、注文を受けて届けるのが一般的で、いまでもそれに近いやり方を踏襲している店がある。外食は蕎麦「小進庵」や中華「虎」など。フランス料理「はっとり」は何かの語のついでに出たのを覚えていて行ってみた。「松葉寿司」や魚屋は昔から（本場）があった時代から住んでいる人に紹介してもらった。

「東龍堂鈴木病院」は、デリカテッセン（惣菜屋）の社長の紹介。「河口歯科」は団地内の知り合いの娘さんがアルバイトに行っていて、そこがとても良いと聞いたので行くようになった。

角のビルの1階にある美容院にはよく行くし、そのマスター（通称ボス）とも親しくしている。職人気質の人で気に入らない客は入れない。マスターの家族は団地内の賃貸のほうに住んでいる。店に通いだしてからしばらくしてからこの団地に引っ越してきた。この地域の入居の特徴として、あまり遠くへは移らずに、比較的狭い地域内で住む場所を変えている。結婚の相手も地元の人を選ぶ傾向がある。「阿岸」がすぐに分かってしまうくらい身近な人が多い。

「本場公園」のフリーマーケットには年に2、3回出かける。江東区の祭り（4月と10月）がある時には必ず出かける。友達と行くことが多い。「富岡八幡宮」では1日、15日、28日には縁日がある。お不動様の日には人が多くて車は通れにくい。今年は富岡八幡の大祭の年なので、8月の17日から4日間、神輿50基が勢揃いする。三好3丁目の町会はお揃いのTシャツをつかったのだが、担ぐ人がいないので神輿は車で運ぶ。地域が狭いし、大きな会社がないので担ぐ若者がいない。

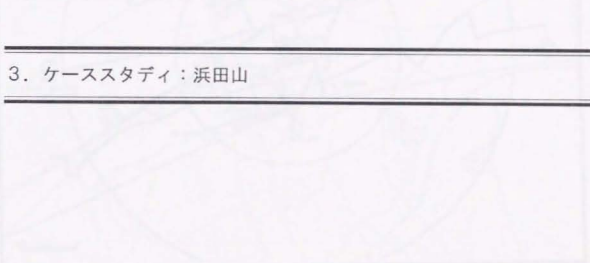
散歩コースは、江戸資料館の通りや本場公園。主人はすぐに車に乗りたがるので、散歩は一人のことが多い。清澄庭園は、素晴らしい庭で、行くときには、散歩というより、そこに行くことを目的に行く。清澄公園には遊具があるので子供連れを遊ばせることもあるが、木が多くて少し怖い感じがする。孫は1日1回、娘がうちに連れ

ていく。その時に一緒に行くこともある。最近では一人で二人の孫の面倒をみることはできない。子供の足が早くなったので、二人を追いかけることができず危険。

東京都の広報で知り、トレーナーのトレーニング理論を勉強しに千駄ヶ谷の東京都立体育館まで通っている。水泳は30年以上、東大の竜門前の脇の文京区のプールで教えている。東陽町のYMCAの隣にある「住宅付きの診療所」は、病院ではなくて健康促進のための施設。江東区のスポーツ大学も開催している。不定期だが、講習を受けることもあるし、講習のお手伝いをすることもある。そのことは団地内の立ち話で知った。江東区のスポーツ大学は区のスポーツ関係の催し物のバックアップもしている。スポーツ大学を通しての親しい人がこの地域内に4～5人いる。スキー教室も一連の区の催しで、バッジテストが受けられるので参加したが、その時は足を折ってしまった。スポーツ関係の行事は区報で区民に知らせているが、スポーツ大学に出入りしていると事前に情報が分かる。

【近隣文脈】

入居時には末子が高校生になっていて団地内で新たに子供をきっかけに付き合いが広がることはなく、分譲住宅15戸で形成している管理組合の活動でも顔見知りにはなるが家を行き来するような親密な付き合いにはなっていない。団地外では以前から親しい友人が高連出口付近に住んでいて、海外旅行に出かけるときには鍵や猫を預けたりしている。また子供をきっかけに知り合った人が同窓会の近くで肉屋をやっていて、今でも子供は泊まりするような付き合いをして、私も一緒にお邪魔することがある。近くの美容店のマスターとは親しくしてもらっていて地域の情報源になっている。店に通いだしてからしばらくしてからこの賃貸の方に引越してこれ、賃貸の方で立ち話をする数少ない内の1人である。



3. ケーススタディ：浜田山

〔浜田山・22〕は子供を持つ専業主婦。〈居住歴10年、夫婦+末子12歳以下世帯〉

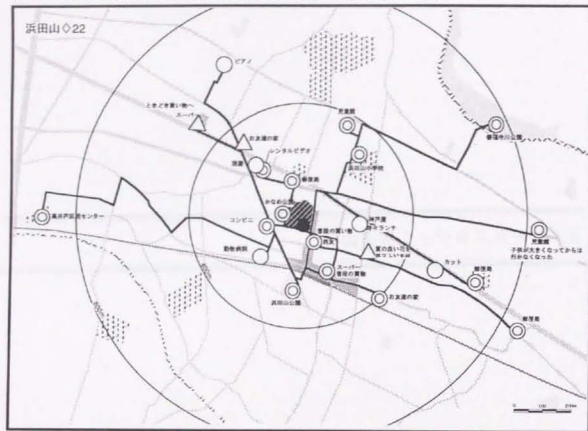


図4-12 〔浜田山・22〕の場所利用状況

〔生活施設の利用〕

普段の買物は生協と駅前の西友、スーパーイタなどのスーパーを利用し、サミットストアはときどきまとめ買いをする。生協には6年ぐらい前に入った。子供が離乳食でなく大人と同じようなものを食べるようになったので、できるだけいいものを食べさせたいと思い入った。いろいろあるが生協が一番手軽なので、また、みんなが近所だからこの商店街の奥さん達とは交流がある。商店街は便利で、わりといい人達である。食材は大手のスーパーで、和菓子、花は専門店で購入。美容院は、昔浜田山にいた人が独立して西永福に移ったので、そこに行っている。

区民センターがもっと近くにあつたらいい。区民センターでは講演会をやったり、体育館もあるし老人関係やプールもある。区民だったら使える。

「大宮児童館」には子供が小学校低学年の頃は行っていたが、もうほとんど行かない。公園には週末日曜日に散歩がてら行く程度。

ピアノ、そろばんは子供が習っている。習い事（ピアノ）はお母さん達からの情報。

地域の活動には定期的には参加していないが短発ではよくやる。区民センターでは講演会をやったり、体育館もあるし老人関係やプールもある。このあたりはバスケット教室に行った。自分一人で行く。回覧板で地域の情報が回ってくるので、そういうのを見ていく。

〔近隣交際〕

団地内では子供をきっかけとした402号室の方と犬を通じて付き合いだした305号室の方と家を行き来する付き合いがある。その他には商店街の靴屋（1503）、花屋（1401）、ジーンズ屋の主人と挨拶程度の付き合いがある。

団地外では子供が幼稚園に入る前に公園で知り合った。毎日公園に行くので、公園デビューみたいにしてそこで友達を作る。社宅だと自然に友達ができるが、社宅じゃないのでポツとここに来て友達も誰もいなかった。浜田山で4～50人、永福の方にもたくさんいて、みんな子供をきっかけとした付き合い。また、うちの犬は人見知り、犬見知りをしないので走ってってしまうので、そこから挨拶程度の付き合いが生まれる。時間が一緒だと何回も同じ人に会う。その人とは挨拶程度の付き合い。カルチャーセンターとかに通ってれば別だが、大人同士で友達になるのは難しい。公園で知り合った方とは今でも家に行き来したり付き合いはある。子供の手が放れてからも子供なしで付き合いが続いている。

[illegible]

〔生活施設の利用〕

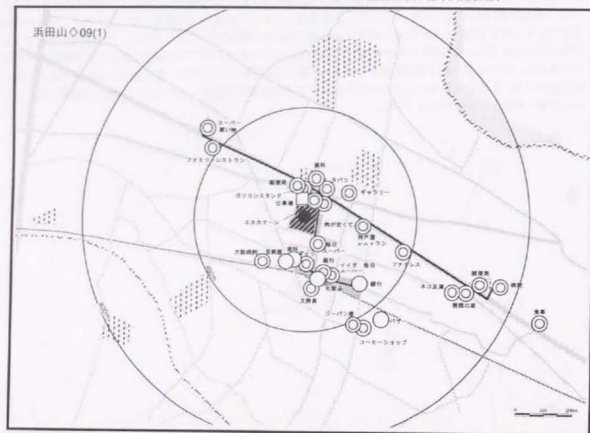
「河田山園子劇場」に参加するようになったのは、もともとお芝居を見に行きたいのが好きで、最初1人で遊びに行ったのがきっかけ。そのとき一緒に来なかったと誘ったことが、始まることになった。知り合いがだいたい親しい親戚に親を呼んでくれたのだから嬉しい。現在の活動は年にも2回、小学校と高校にもちろんで場所を借りて、子供達を呼んでイベントをやっている。子供が小さいと、2歳以下の子にも頻りに活動して欲しい。親子劇場がまだ小さいからいよいよ結構つて、そのころの母は3歳と4歳と4人年をとってきた。また今グループは1歳から5歳の子が親が少なくなっているで、開演する人数も少なくなっている。普段は練習を振付けの練習や定期的に行っている。私は練習を断るとして大きな声を出すことが出来ないで、今は練習を振付けだけにしていく。

「高井戸区民センター」で年に1,2回、ボランティア団体「浴風園」でバザーやコーヒースービスをやっている。こういったサークルや子供の習い事などは積極的に参加している。人と出会う機会も多くなるし、友達もたくさん出来るから。

以前は団地内での付き合いもたくさんあったが、今は少なくなった。ずっと親しく付き合っているのは商店街だとお茶屋さんなどこの前引越されたパン屋さん。団地内の方だとやはり幼稚園関係の人の付き合いが多かった。その当時はよくお家に遊びに行っていたが、最近では会う機会も少なくなった。親しい人家が狭くなったとかで引越して行った人もい。団地外では入居者がちやうど子供が幼稚園に通い始めた頃だったので、自然に友達できた。子供が幼稚園のころは毎日私の家で、お弁当を買って一緒に食事したりと、付き合い

- 171 -

〔浜田山・09〕は主人のデザイン事務所を手伝う主婦（54才）。〔居住歴5年、若年夫婦世帯〕



図付 4-14 〔浜田山・09〕の場所利用状況

〔生活施設の利用〕

買物は、午前中に行く。編み物や読書を仕事の合間にしようと思うと、家事はすべて午前中に済ませて、午後は自由な時間にしたい。ほとんど西友やスーパーイデで済ませるが、お茶はお茶屋専門で、お肉は近くの肉屋が安くてよいものなのでそこで買う。「エスカマーレ」（高級スーパー）は、上等なものが揃っている。そういうものがほしいときはそこに行く。銭多に行かないが、チラシでなにか安いものがあると「サミットストア」に行く。また日曜日の午後には、主人が何が食べたいというと、二人で、世田谷のスーパーまで行く。そこは、以前大買りに住んでいたときから行っていたところ、お刺身が安くておいしい。近くに住んでいる友達に聞いて知った。週末は山へ行くので、そちらの買物を平日中に買いだめしておく。あちらで買物するのは行き来だけでも時間がかかるので、この地域外での買物は銭多にしない。月に2回程吉祥寺に行くくらい。買物をいなければすべてこの地域内で足りる。

「柳島病院」は事務所ができた当時から、年に1度の健康診断をする病院。この前包丁で指を切ってしまった時行き、ちょっと風邪をこじらせた時も利用する。この辺は大きな病院がないので、ここは中規模だが、うちの知ってる唯一の病院。また夫の車友達がまたま歯医者さんで、ここに開業していたので大買りにいたときから利用していた。「柳原動物病院」は猫の病院。10カ月ごとに予防注射をするので、2匹を交互につれていく。引っ越した当時から飼っている猫にはがきがあるので、行き始めた。

編み物やパッチワークは趣味でずっと続けている。1丁目にいた頃からずっとそうだが、仕事でいつ電話がかかってくるかわからないので、決まった時間に家を空けることができない。だから稽古事はできないので、家で一人でできることをやる。以前にNHKの通信教育で俳句をやっていた。入選したこともある。

「ハイツ浜田山」の1階に主人のデザイン事務所がある。仕事を手伝っている関係で、コピーをとりいたり、ファックスを送るために行く。近くてすぐに行けるため、時間などは決まっていない。ここは、元々このマンションの集会所だったが、20年前に事務所を設けるとときに偶然見つけて、無理を承知で聞いてみたら大家さんに会わせてくれて、どうしてもとお願ひしたら貸してくださった。

金曜日の夜から日曜日、もしくは月曜の朝まで藝科のセカンドハウスに行く。7年ほど前に買い、それから

はずっと決まりみたいに毎週行く。お正月も藝科で過ごす。浜田山の家は狭いし、集合住宅なので大きな声も出せないため、大勢のお客様はみんな山小屋にきていただく。主人の車仲間や、私の友達も来るが、仕事の接待にも使う。鹿島建設が別荘地に開発したところで下水道もすべて完備されており、東京と同じような生活はできる。週末だけくる人が結構多いようで、永住されてる方もいるが冬はやっぱり寒いところである。主人は将来ここでの永住も希望しているが私にはとんでもなくて、生活には断然浜田山の方が便利である。

〔近隣交際〕

団地内では顔見知りの方はいるが、行き来する人はいない。302号室の方は自宅の庭から見える家なので、寒礼してるうちに外で会っても挨拶するようになり、305、706号室の方は犬を飼っていて、私は動物が好きなので犬をかまっているうちに、自然とお話するようになった。同じ並びの15軒は、回覧板が回ってくることで、お掃除の関係で知り合いになった。

団地外では引っ越した頃、近所のペットショップに「猫あげます」という写真が貼ってあり、それを見て連絡をとり猫をいただいた。それまでは全然知らない人だったが、たまたま3丁目に住んでいたため、時々猫の様子を見に来て、お茶を飲んで夕方まで話をしたりする。また、私が指を切って病院まで歩いていたら、「どうしたんですか」と声をかけてくれたお年寄りがいて、それがきっかけで、それからスーパーで会って「これをこうして食べるとおいしいんですよ」と教えてくれるが、どこに住んでいるのかは判らない。歩いている場所が同じなので、近所の人だと思う。

浜田山の家は狭いし、集合住宅なので大きな声も出せないため、友人や主人の車仲間は週末に藝科のセカンドハウスに呼ぶことが多い。

〔生活施設の利用〕

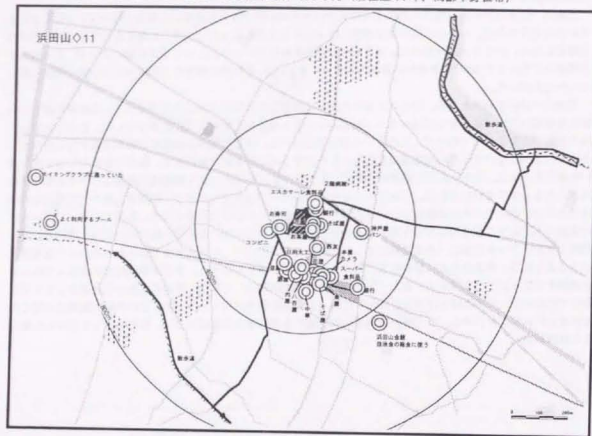
20年前老人会の人に誘われてのきりきりで「坂田山田園」のラジヲ体操に行き始めることになった。もともとは10年前ぐらい前に、3人でやっていた。そのうち自然に人が集まってきた人になったらしい。主も興味があるみたいでだんだんと増えていったのだが、例えられようで結局主は行かない。朝6時半からに始まり、終わるとまただんだんと歩者が八幡橋に参拝して帰っていく。ラジヲ体操がずっと一緒にお茶するわけでもないし、特別に集まって食事をしたりするわけでもないのだが、毎朝集ってみんなと談笑することでも楽しい。地味のサークル活動とかをかえりあいたい特別な会があるのではなく、自然にこの公園に集って友人同士でやっている。このグループはだいたい70才以上の男女10人ほどの集りで、71才の理学博士の人やアラビア語の知識の人、山下達郎の甥の人、海軍学校を出た海軍の少佐の人など素直な人ばかりで、毎朝行くのが楽しみ。今私がいちばん楽しんでいるのはこのグループ。

考え方の人達ばかりで、もたもたしながらも話すことは面白い。行き始めて3年になる。

国内では子供が小さい頃は子供同士の仲がいいと子供を仲介にして親同士も仲良くなって、自然にお付き合いするようになる。しかし子供が違う学校に行ったりしてだんだんとつながりが無くなってくと、親同士も疎遠になる。いまの人は近所の人にはなるべく迷惑をかけないようにという考えが強いようで、外で出会うと挨拶はきちんとするが、付き合いが表面的になってきている。昔は物の貸借りや困ったときよく相談に乗ってくれた人がいた。

- 175 -

〔浜田山-11〕は地域外に仕事に出ている女性単身者（63才）。〈居住歴11年、高齢単身世帯〉



図付4-16 〔浜田山-11〕の場所利用状況

〔生活施設の利用〕

買物に関しては駅から家までの間で、まず大抵のものは揃い本当に充実していると思う。肉屋、魚屋、八百屋、豆腐屋は特定の小売店で買い、それ以外の食料品は「西友」で買う事が多い。個人商店との人的交流は買物に行った時に世間話をするくらいで特にない。すぐ北側の高層の部分だけでも銀行、スーパー、メディカルセンター、レストランと生活できるだけのものは揃っている。緊急のものは「ファミリーマート」を使う。ちょっとしゃれた服などがほしいと思った時は新宿や吉祥寺に出て買う事が多い。

散歩はよくする方で、普段、動めがある時はいけないが、土曜や日曜など休みの日には週1回くらいは出かけるようにしている。善福寺公園の方まではいろいろな行き方がある、行くとび毎に道を変えている。公園まで行く人と散歩している人が結構いてすれ違う事も多い。しかし、そこで新しい出会いがあったりという事は今のところない。神田川に沿って永福方面に歩く時と高井戸方面に歩く時がある。だいたい1時間くらい歩く。東海大学で仕事を始めるまでは「高井戸スイムクラブNAF」でスイミングを習っていたが、最近通動に片道1時間40分程かかり、時間を取られてしまうので行っていない。しかし今でも高井戸の区民プールには時々行っている。高井戸まで行くには、電車に乗るか自転車をこいで行かなければならず、もう少し近くにプールがあればと思う。

旭輪は永福でアトリエを持っている先生の所へ週に1回通っていたが、去年の暮れに先生が亡くなってしまったので、今は行っていない。新しい先生を探しているところ。前から絵は好きだったしこれからもずっと続けていきたいと思っている。前の先生に習うようになったきっかけは、よく行っていた画材屋に紹介してもらった事から。そこでの友達とは教室であった時に茶を飲むくらい。

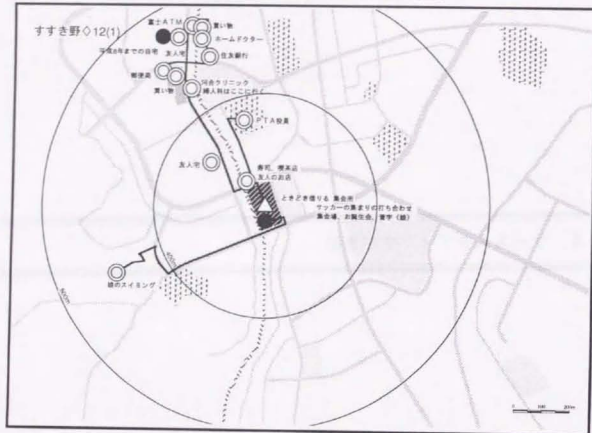
「落語散歩の会」は毎回、東京のある場所を決めていろいろと説明をしてくれる先生と一緒に、史跡とかを歩き回るといふもの。月に1回くらいのペースでやっていたが、去年解散してしまった。今活動として残っているのは、国立劇場の横の小劇場で月に1回落語の会がある。それはまだあまり有名でない人が練習のためにやっているものを見に行っている。きっかけは、朝日カルチャーセンターの「ニューヨークタイムズを読む会」に入っていた時に知り合った人に誘われて参加する事になった。

「パソコン講習」は明治大学で行われていたものだった。それは「すぎなみ」という広報で見つけていた。家にパソコンがあるけれども私が使えないのは一太郎などワープロ機能だけなので、他の機能も覚えてみたいと思い参加した。持っているパソコンはNECのCanbeで、大学のものと同じ機種で仕事上便利だから、後々はインターネットなどもやってみようと思っている。

〔近隣交際〕

仕事をしていることもあり、団地内の人と会う機会が少ない。実際付き合いがあったのは住棟内の5軒の人達とだけ。この団地は住棟毎にグループになっていて、1年毎に当番がまわってきていろいろと仕事がある。その関係でお話するくらいで、それ以上の付き合いはない。今でも、回覧版を持って回ったりゴミ出しの時等に同じ住棟の人と会えば立ち話を程度。勢に決まって立ち話をする場所などはない。もらい物などの量が多くてうちだけでは処理するのに困った時などには、近所におすそわけする事もある。団地外ではここから近い永福に、もうかれこれ20年以上の付き合いになる友人が2人住んでいる。歩いて10分くらいの距離で、今でも行き来がある。知り合ったきっかけは、一人は主人の上司だった人で、もう一人は私が英語を習っていた人。地域活動では永福の油絵教室で知り合った友人とはそのときに「お茶飲み」をするくらいで、その他のものでは交際はほとんどない。

【すすき野-12】は専業主婦（39才）。〈居住歴4ヶ月、夫婦+末子12歳以下世帯〉



図付4-17 【すすき野-12】の場所利用状況

〔生活施設の利用〕

普段の買物は東急ストアとその周辺の店。車で買物は普段近くで買えない物を、多摩プラザや青葉台まで買いに行く。「友達の家」は、団地バス停前の喫茶店「さくら茶屋」と、寿司屋「シャリとネタ」。私のところへピアノを習いに来ている子供の親がやっている店。とくに「さくら茶屋」の方へは、そこは私の友達と一緒に行くときもあれば、美味しいコーヒーが飲みたくなったときに一人で行くこともある。あまりはやっていないが、オーナーが自分でやっているから続いているだろう。行くのはほとんどお母さん達で、行けばいろいろ話をする。こういう団地は、美味しいコーヒーなどが飲める喫茶店がない。家のすぐ近くだし、ついつい此処へ行ってしまふ。「成華園」は結構美味しい中華料理店。「みよしの」も手頃な値段で美味しい和食。PTA校員の集まりのあとに、何か食べましようといつて利用する。他にも皆さんよく知っていて、連れていってくれる。「東急すすき野ビル」に飲食店があればもっとよかったと思う。これだけの住宅地のわりには、出勤を頼める店が少ない。急な来客の時や食事をつくれないうちとて困る。

「阿含クリニック」は8年ほど前にできた婦人科・皮膚科。それまではあざみ野の方の婦人科に通っていたが、ひどく混んでいて、小さい子供連れで半日がつぶされてしまうのは辛かった。近くにこのクリニックができたので、以後は此処を利用。婦人科・皮膚科以外はほとんど「輪山クリニック」。ここは「すすき野第2団地」に入居して以来のホームドクター。

「さくらスイミングスクール」には長女が通っている。ほとんどは、同じ団地の友達と自転車で行くが時々私もついてゆく。ここは長男と長女が通った幼稚園と同じ経営なので、スイミングスクールがあることはその時から知っていた。「団地の集会所」はサッカークラブの話し合いで年に5～6回ほど借りる。子供の誕生会でも使う人もいる。長女が通っている習字の教室もここ。

隣のすすき野一丁目公園では、お年寄り達がよくゲートボールをしている。夫は近くのゴルフ練習場へ時々クラブを2～3本もって出かける。このゴルフ練習場は「輪山スポーツ公園」の施設で他にテニス、アーチェリーなどもできる。私はアーチェリーが好きなので、子供の手が離れたら始めたいと思っている。この団地の奥さん達や第2団地の人達も、輪山スポーツ公園でレッスンプロについてテニスをやる人が割合多く、そのサ-

クルもあるようだ。

以前に行っていた、今は行かなくなった所は「公園」。子供が小さい頃は、くまなく歩いて回った。子供が大きくなってからは殆ど行かない。近くの「輪山公園」では7月末の土曜・日曜にすすき野商店街主催の盆踊り大会が行なわれる。いろいろな屋台などは商店街の人達が出す。「すすき野第2団地」8街区にいたときに、当番制で管理組合の役員をやった。文化担当ということでお祭りの準備や、お年寄りへ品を配ったりする役。

子供は選手として、主人はコーチとして小学校のサッカークラブで活動している。最初はサッカークラブの人数が少なかったで、小学校のグラウンドも月に1回しか借りることができず、いろんな公園を借りて練習していた。今はほとんど毎週小学校のグラウンドが使える。活動時間は毎週日曜日。午前中は9:00～12:00、午後からは14:00～17:00まで。サッカークラブは輪山小学校にいている子供たちが対象で、校区全体に広がっていて人数がすごく多い。サッカークラブに参加している子供の親達の懇親会を兼ねて、近くの寿司屋を借りて忘年会をやる。

〔近隣交際〕

前住地のすすき野第2団地の入居時はまだ子供もなく、又近所付き合いも少なかったで、しばらくは寂しかった。しかし小さな子供がいる奥さん達が「家にいられないやらない？」と誘って下さったりして徐々に付き合いが発生していった。まもなく子供が生まれて、公園に行けば年上の子供が遊んでくれて、子供をきっかけに近所の人と自然に交際が広がった。団地には同年代の人達が住んでいたから、友達もできた。以前はピアノを教えていて結構忙しかっていたので、サークル活動やボランティア活動はしていなかったが、電話で「ケーキを焼いたら来ない？」「あつ、行くわ」という調子で「お茶飲み」はよくやっていた。「主婦の集い」なども呼んでいる。これは現在も続いている。

団地内では入居してまだ間もないこともあり、子供をきっかけに知り合った人との「お茶飲み」は子供の友達のお母さんと、2、3回しかやなくて、親しい家はまだ数軒だけで前住地の時のように週に2、3回「お茶飲み」するということではできない。またPTA関係のお母さん達とは、たまには美味しいものを食べに行こうと、車に乗せてもらって連れて行ってもらった程度。

主人は大学時代からサッカーをやっていたので、子供のサッカークラブのコーチをやっている。この活動により地域の子供たちの顔が覚えられ、子供が公立中学校へ行った時、もし寂しいことがあったとしても、顔を知っていれば注意できる。サッカークラブに参加している子供の親達の懇親会を兼ねて、近くの寿司屋を借りて忘年会をやるので、主人はそこで知人が居る。また8月末に上宿があり、コーチも含めてお父さん達20数名が参加する。こういうスポーツサークルは誰かに頼むのではなく、皆でやっていくという気持ちが大切だから。子供が中学に入るとコーチは交代することになっているが、練習スケジュール表は渡しておいて、参加できる人をお願いしている。中学に入った子供たちでも、練習相手として参加してくれる子もいる。子供同士や親と子の間でのとてもよいコミュニケーションの場となっている。

【すすき野-29】は子供を持ち都心の会社に勤めている主婦（39才）。（居住歴2年、夫婦+末子12歳以下世帯）

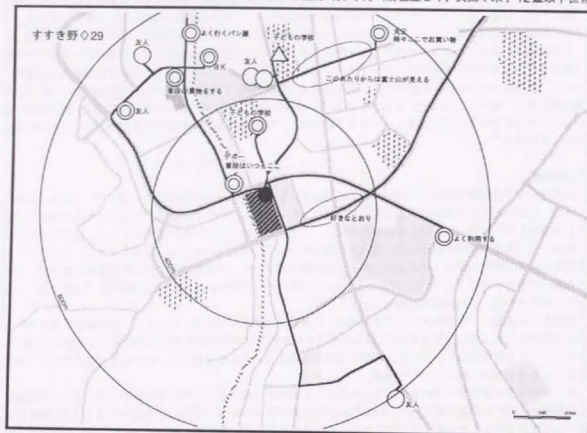


図4-18 【すすき野-29】の場所利用状況

【生活施設の利用】

毎日の買物は仕事の帰りに済ませて帰ってくる。駅までバイクで行っているの、駅から家までの間の店を利用。家に帰ってからもう1度買物に出るという事はない。あとは「デポ」(生協の小売店のようなもの)の時々使う。日用品は「東急ストア」で代いたい用事が済む。

スポーツクラブは仕事の帰りに利用するので、この地域のもではない。会員制で何処にある施設でも使えるので、勤務地の新宿か、下北沢か渋谷を利用している。きっかけは、通勤中に見えていた工事現場で大きなブルが出来ているなと思っていたらスポーツクラブだったので入会した。そこでの友達はそこであっている時だけで「あら、また会ったわね。」といった感じで、終ったお茶をすくくらい。何処に住んでいる人も知らない。

今は、この周辺にはパチンコ屋や夜遅くまでジャンジャカやっている店もないし、このままであってほしい。施設的にはもう少し充実して便利さも欲しいと思うけれど、あまり大きな街になると人も増えてごちゃごちゃした街になる。自分達が住む街である事を考えるとある程度落ち着きがほしい。

私の場合、今住んでいる地域より、自分が高校生時に学校の帰りによく行って遊んだ場所の方が自分の街という感じがある。たまに友達と自由が丘に行くとか「あーっ帰ってきたな」という気持ちになる。

最近仕事が大変なのが主人はほとんど家にはいない。日曜日出かける事も多くなった。でも、朝の食事は家族全員そろって食べるようにしている。上の子は「すすき野中学校」に通っていて、毎日のように部活動があるので帰ってくると6時半くらいになっている。塾がある日は学校から直接行って、家に着くのは8時半をまわっている。後はご飯を食べて、お風呂に入って、寝ているのがどうも分からないけれど自分の部屋に行ってしまう。下の子は、習い事が多くて週に4日は習い事に行っている。あざみ野駅のちよつと手前のあざみ野2丁目のバレー教室に週2回、スイミングは送迎バスがすぐ近くまで来てくれる。ピアノは私が町田まで週1回送り迎えている。子供たちは、ピアノの町田を除くとほとんどこの地域の中で生活している。

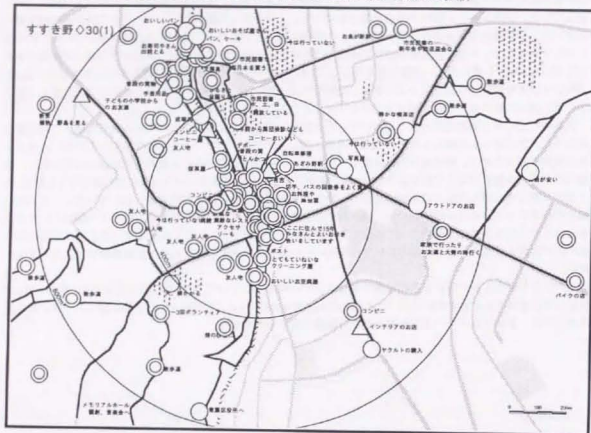
【近隣交際】

前住地のすすき野第2団地の入居時は東急ストアもなく、そこは空き地になっていて、本当は入ってはいけな場所なのだが子供達はつくしを探ったりして遊ぶことができた。小さな子供を持つ世代の人が多く、よく遊んでいた。子供が小さい頃は子供の友達も出来たし、子供を持った親がたくさんいたので親同士の付き合いもあった。子供達は今もここの友達と同じ小、中学校に通っているの、親同士も交流が続いている。特に親しくしている人は、下の子の保育園の時の友達で、当時から子供が寝てからおつままを持ち寄って飲み会とかをしていた。今でも夜にお互いの家を訪ねたりして、ホームパーティーをしたり、飲み会をしたりしている。その時に子供の学校関係の話などをよく聞く。地域外で働いているため情報が入ってこないの親友達から聞いている。休みの日には一緒に家族でドライブやキャンプに行ったりもする。

入居時は上の子の同級生が4人くらいいて、その親と外で会えば立ち話くらいはするがそれ以上には発展しなかった。すぐ近くから越してきたので前の友達と変わらず付き合いができて、家に行き来していた。入居2年目に順番が回ってきて、管理組合の役員をしていたから、その仕事でいろいろなお宅にお伺いに行ったり、団地内の人と会う機会が増えて話すようになった。役員同士での交流も持ていろいろな話が聞けたりしたが、そこで知り合った人達とは会えばお話はするが、わざわざ電話をかけるほどの付き合いはしていない。とりわけ親しく付き合っている人はいないが、何かあったら聞きに行ったり相談したりするのは下の子の親の人。立ち話をしたりするのは偶然会った時で、ごみ捨て場や駐車場までの間が多い。ここに住んでいる人達は年配の人が多いので私達とは世代が違うと感じて、お互いに訪ねて「お茶飲み」したりと友達感覚で付き合いは出来ない。

上の子が小学生だった時に6年間地域のサッカーチームに入っていて、そこで親同士の付き合いもあった。買物をしている時とか知らない人に「こんにちは」と声をかけられ、「今誰?」と子供に聞くと「何々君のお母さんだよ」とサッカーチームの後輩の親から挨拶される事もあった。

【すすき野-30】は子供を持つ主婦（57才）。〈居住歴2年、夫婦+末子13歳以上世帯〉



図付4-19 【すすき野-30】の場所利用状況

【生活施設の利用】

豆腐、パン、魚等は気に入った特定の小売店で買っている。こういった店は自分で歩いて見つけた。買物に行った時に、世間話をするがそれ以上の付き合いはない。その他の食料品は「デボー」で済ませ、日用品は東急ストアで買っている。この辺りの地主さんが持っている畑で、収穫の頃に声をかけてくれて、インゲンなどを1畝いくらなどで譲ってくれる。声がかかった時には団地内の人を誘っていつている。沢山取れた時には、親しい人に配ったりもする。

「美しが丘西地区センター」は、バドミントンや卓球をグループで利用できるようなが使った事はない。散歩の呼びかけや草木に関する講習があってそれに参加した事がある。そういった事で得た知識は、「歩こう会」の方に役立つ。「山内地区センター」はコーラスのコンサートで使った事もある。

「市民図書」は輪山小学校の空き教室を利用して、毎週土、日と開放して自由に使える。毎月新しい本を入れていて、蔵書6000冊くらいになった。いま、ボランティアで図書の貸し出し運営を手伝っている。主な仕事は貸し出し受付や新しい本を小学校の近くの「文教堂書店」へ買いに行く事。他にも21人の世話役がいて、2人ずつ組み、ローテーションで受付をしている。

民生委員をしていた友達から声がかかって手伝うという形で老人ホームのボランティアに参加した。老人ホームでの避難訓練の練習では、老人をシーツにくるんで引っ張るものとかあってかなり大変だった。あとは、老人に歌を聞かせてあげたりした。

地域にもコーラスグループがあるようだが、私は地域外まで行っている。2つ入っていて、1つは豊島区まで行っている。メンバー募集のチラシを見て自分から参加した。もう1つは豊島での友達に紹介されたもので、早稲田まで行っている。こっちの方は今度、海外遠征があるので今はこちらに力を入れている。昔は「すすき野第3団地」の中でも集会所を利用したコーラスグループがあったが私は参加しなかった。

【近隣交際】

前住地（町田）では合唱グループの友達は同じ年頃の子供がいたせいもあり、子供を通した付き合いをして

いた。私がすすき野に越してきてからは、こちらでもコーラスグループに入っているとお互いに演奏会がある時は呼ばれて行ったり、こちらへ呼んだりしている。子供が同じくらいの年代であった事と、生協の共同購入などもして密接な付き合いがあった。

団地内の人はいいたい顔と名前が一致する。自治会の「歩こう会」の世話役をしていることもあり、顔見知りには多い。団地内の人と立ち話はあるが、外であつたらというのが多いから必然的に団地内の連絡が多くなる。あとは買物で会えば一緒に帰ってきて階段の下で話したりもする。個人個人はきちんと独立しているが、何かあった時に声がかかれば助け合える事が重要だと思う。だから普段から挨拶はしっかりしておきたいと思っている。あまりなかまでは踏み込まず、一線を引いた状態で付き合いしたいと思う。団地内でも高齢化が進み、1人暮らしの方は買物などが大変だろうから、そういった方を支援できる組織を団地内に作ろうという声もあるが、いろいろとあってまだ実現はしていない。今回、名簿を見て面白かった事に気づいた。どうもよく入れ替わる家は決まっていて、長く住んでいる人は入居当時からという人が多い。

団地外では民生委員をしていた友達から声がかかって手伝うという形で老人ホームのボランティアに参加した。老人ホームのボランティアに参加し、避難訓練の練習では、老人をシーツにくるんで引っ張るものとかあってかなり大変だった。あとは、老人に歌を聞かせてあげたりした。また「市民図書」では世話役の新年会や歓迎会で佐子町の「舞寿司」に集まったりと活動以外の交流もある。

散歩をしていた時に地主さんが畑で「お野菜いりませんか」と声をかけてくれて野菜をいただいた事があり、いろいろと話をしているうちにここに住んでいる事や電話番号を教えたら、収穫の時期に連絡してくれるようになった。声がかかった時には団地内の人を誘っていつている。沢山取れた時には、親しい人に配ったりもする。

〔生活施設の利用〕

市民図書館は団地内で世話役をやっている人に聞いて行きはじめた。浜田山小学校の空き教室を利用して週3回開放している。時々本を見に行く。

この年になると老後のことを考える。ちょっと前に「病院で死ぬこと」、「続病院で死ぬこと」を読んで、桜町病院のホスピスを知った。たまたまそこに私の叔父が入っていてそこで亡くなった。見舞いに行った時いいと思った。今、近くに良いホスピスがあったらいいと思う。

多摩（前住地）で子供供つかりに「こたつたなだらどぞ」と持っていたのに、市でたてられた夕飯を子供つたり持っていくので、動いている場所が遠いながら夕飯を食うに呼んでくれたりしていた。また共同購入でできた6人の主婦グループとコーサタプハブを食を計画していた。この辺りの土地を借りて子供供つかり野合に選出してまわられていた。こらこらしてた時には子供供が16歳と5歳になつていて、この地の小中学校に行っているという学校関係の付き合いはなかった。共同購入のチラシを団地の中に配つた。何人かに行きをつけてくれて、一緒に共同購入が始まった。共同購入で子供供をこのこと知つたところ、市と民間に行きをつけて「お楽しみ」などはしていたが、今はそこで「お楽しみを教へない」といふ声とあわせて往々不安をいだいて子供供をいかにしたいと思ひ、今は以外と動機でい

自治会の活動に「いも煮会」というのがあり、団地の中庭でもう3、4回は行っている。はじめのうちは出ていたが最近はいっていない。でも回を重ねるたびに出席は増えていて、楽しみにしている人もいる。また祭りの時は手伝いに行く。夏の祭りは「嶺山公園」で、この辺りの連合自治会主催で行われるもので、地域が一番まとまってると思う催しである。

【すすき野-13】は子供が独立した専業主婦（59才）。(居住歴13年、高齢夫婦世帯)



図付4-21 【すすき野-13】の場所利用状況

【生活施設の利用】

地域内では野菜や豆腐など買物をするが、あまり小さな店は利用せず、一つのところで済ます。車で多摩プラザの東急デパートに魚や珍しい地方の産物店などを買いに、週3、4回に行く。日用品は駅前やほつき、港北N.T.などで買う。あざみ野駅前の和菓子やパン屋、洋服屋は利用する。商店街前は魚屋もいろいろあり利用していたがなくなりました。東急ストアができたのでみんなつづけてしまった。この辺は売れないのでホッカリぶついているような商品が多く、それなら車でほかに行ききれいな商品を買おうと思う。デパートも最初は行っていたが量を買わなければならない、今は2人だから全然行かなくなりました。

美容院は青葉台だったが、担当の方がいなくなったので最近「彩夢」に行くようになった。たまたま団地の寄合に行ったら、カットを上手になさっている方がいてどこかの美容院かを聞いたら、あそこだとおっしゃるので行ってみた。クリーニングはこの下と駅前の白百合舎を利用している。クリーニング屋とは、珍しいお菓子があればあげたり、逆に、野菜をもらってきたり、交流がある。

図書館は駅前のものを利用する。最近では行かないが、この間までは時々インテリアなどの本を借りて読んでいた。

ゴルフレッスンは去年から始め、毎週木曜日に行っている。老後、夫との趣味が1つくらい一緒の方がいいと思い、玉川高島屋に個人的に遊び始めた。近くのゴルフ練習場では打ちっ放しの練習をしている。以前はそこで習っていたが、知っている人とだとナアナアになるのできちんとしようと思い、少し離れたところを選んだ。レッスンは8人でコースにも出るのもそこでの付き合いがあるが、この地域の人ではない。

山歩きをしているので近くの山場、高尾山などに夫とよく行く。前はグループに入っていたが今は時間がないので、月に1〜2回、山歩きだけでなくこの辺を歩いたりする。港北N.T.の中にせせらぎの道やきれいな道があり、N.T.に住んでいる友達と歩いたりする。港北N.T.の中には鴨池などがあるが、道よりも下のレベルに遊歩道が通っていて、水がえた小道がずっと続いている。その他、桐蔭の湖のあたりを歩いたりする。このあたりは気に入っていたんだけど、みんなコンクリートになって、土の道がなくなりました。それに雨後が出るので最近あまり遠くまでは行かないが、在子田の辺を歩いたりする。この辺は昔こんなに

家がなく、細い田舎道だったが、ここ5年くらいの間でだいぶ変わった。江田や青葉台には国道246号に出ないで行けなかったが、今はいろんな道ができて便利になった。最近では交通量が激しく駐車違反がすぐ増えてきた。ここは事故がよく起る。3月に1回事故がある。せっかくいい環境なのだからもうちょっと車だとパチンコ屋がないほうがいい。パチンコ屋は反対した。駅前の地域の方の反対運動がこっちにまで回ってきたので署名した。

【近隣関係】

高島平（前住地）では、同じ階の方とは引越しのご挨拶がきっかけで、その後車取り、掃除が月1回ずつあり、階ごとや横の階段の方で集まってやっていた自然に親しくなっていた。入居時に娘は中学生、息子は小学生だったので子供中心の付き合いがあり、その後サークルの関係の付き合いが生まれた。現在でも付き合いが絶えている人はサークルの関係の人達がほとんどで、お互いに行き来したり、2ヵ月に1回は旅行したりと、密接な付き合いをしている。今もサークルを続けているのは親しい友達がいるから。

ここは建設後1年たって入ったので、みんながいるところに入っていくという感じだった。入居時の挨拶から始まり、この階段の人達とは月に1回、車取りや掃除とかがあるので交流はある。また管理組合のいろいろな役が回ってきてその時親しくなり、「イモ煮会」や「歩こう会」等いろいろな行事にも参加しているので入居当時から比べてだんだん顔見知りが増えてきた。7302号室の方とは随分な付き合いをしている。家に行き来するような深い関わりは持たず、家のことは干渉しないという心地よい付き合いをしている。7306号室の方とは行き来をしている。この頃は仕事を持ったりしている付き合いが遠のいてきたが、他の階段の方とも交流はある。今の近所付き合いに満足している。立ち話をする場所は階段の近くで。

息子はこの間まで新婚だったので一緒に住んでいたが、子供ができたのですそばのマンションに引っ越した。すぐそこの「東急リーベ」で、去年の10月に移った。不動産屋で調べたらここが空いていたので決めた。そばにいとと便利なのでこの近辺で探していた。

このように、この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。

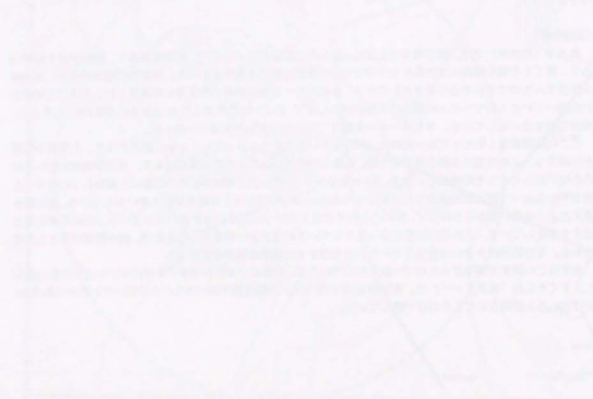


図1 〇〇〇〇の推移

このように、この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。

このように、この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。

このように、この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。



図2 〇〇〇〇の推移

このように、この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。

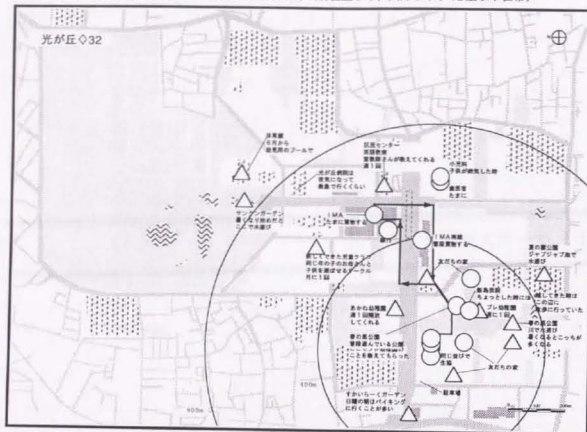
図3 〇〇〇〇の推移

このように、この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。

このように、この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。この研究は、この分野の研究者にとって、非常に重要な研究である。

5. ケーススタディ：光が丘

〔光が丘-32〕は幼年期の子供を持つ専業主婦（30才）。〈居住歴2年、夫婦+末子12歳以下世帯〉



図付4-22 〔光が丘-32〕の場所利用状況

〔生活施設の利用〕

買物はほとんど「IMA南館」。近く、野菜が安く、余計な物を買わなくても済む。遊びに行く前か後に子供と一緒に、どちらの場合も一度家に帰ってくる。「IMA」は専門店街の中甘地内、ダイエーで日用雑貨などの買物をする。雨の日、雪の日は4階のゲームセンターに遊びに行く。テアトル西友は行ったことがないが、近くなので行ってみよう。生協は卵や魚、ヨーグルト、牛乳などの乳製品。日曜の朝はすかいらーくガーデンのバイキングに行くことが多い。結構おいしくて、好きな物をすきに選べる。朝食を取って、そのまま駐車場に行き出てしまうことが多い。子供が小さいので車で、電車で移動は無理。ランチも安い。「IMA」の中では地下のラーメン屋がおいしくてよく行く。出前してくれる店を電話帳で探したがなかなかなくて、引越して8ヶ月くらいはピザしか取れなかった。そんな話を公園でしたら教えてくれて少しづつ知っている店が増えた。土日の夕食にとることがほとんど。主人が休みの日は自分も休業日。外食はしょっちゅう。

3丁目の小児科は引越して来てすぐに公園で知り合った友達に教えてもらった。ちょっとした時は飯島医院で見てもいい。10分待ちくらいですぐ見てもらえるが、ばつと診て、ばつと終わってしまうので信用できない。友達で診察されたこともあるので少し悪い。ちゃんと診てもらう時は3丁目の小児科。こっちの方が評判がいい。そのかわり混んでいて、行くと2時間くらい待たされるので、受付して1回帰ってきてもいい。待ち合いがよくて、ビデオもある。先生も親身でいろいろ診てもらえる。薬がちょっと強いので持たず。飯島さんは薬が弱いので持たない。

「光が丘公園」は日曜、主人が休みの時に家族で、弁当を持って一日中ゆっくりと。春や秋の季節のいい時は花見に行ったりする。日曜は近くの公園には行かない。「夏の雲公園」には越して来た当初は行っていたが、行かなくなりました。初めは友達とどこにいるか分からなくて、「春の風公園」に行ったが冬だったせいか誰もいなかった。「夏の雲公園」にいと聞いて行っていたが、毎日自転車で行くのも大変なので、「春の風公園」で遊ぶことになった。春になってだんだん集まってきた。今は友達もたくさんできたので「夏の雲公園」には行かなくなった。「春の風公園」に遊びに行くのは11:00~14:00くらい。ちょっと中途半端だが、それ以前だと小さい子供が多くて危ない。学年によってちょっとづつ時間がずれている。集まるのは10人くらい。こ

こで遊んでいる人はプレ幼稚園に来ていた人が多い。夏になると公園は暑すぎて行けないので、「春の風公園」の階段の場所から移動して遊ぶ。暑くなり初めてだと光が丘公園のサンクンガーデン。あんまり暑くなると移動したくないからジャブジャブ池や川。水があるところはみんな工業用水で汚いが、それでも比較的にきれいなところや昨日掃除していた所を教えてもらう。今年は水不足で水が止まってしまった。もっと公園らしい公園が欲しい。公園はたくさんあるが、滑り台にしるブランコにしる普通の遊具がない。アスレチック的な滑り台やタイヤのブランコしかない。

「あかね幼稚園」は週1回10:00~11:30開放してくれる。庭で遊ばせてくれたり、先生が紙芝居してくれたり、体操してくれてシールを貼ってくれる。幼稚園見学する意味ではない。ただ、区立の幼稚園は3年保育がないので行かせるつもりはない。区立は自由保育なので、うちの子はひたすら走り回っているだけで帰ってしまいうそなので、ある程度遊んで工作や本を読んでもくれるのを聞いたりしない。小学校に行くと遊べないのじゃないか。いくつか絞っているがどこに行かせるかまだ決めていない。今年幼稚園に行っている子供のいるお母さんからも情報はもらっているが、実際に自分の目で見てから決めた。

「児童館」は天気の良い日だけ。冬は児童館に行くこと風邪をうつされて帰ってくるのであまり行かない。光が丘周辺は光が丘内で大休んでしましうし、車が通らない道を行けるのでほとんど行ったことがない。真夏は行かないが、春や秋には平日友達と自転車で豊島園に行く。近いので15分もかからないし、新聞屋からただ券をもらえる。みんなで乗り物に乗って、持ったお弁当を食べて一日過ごす。

小学校の区域が細かく分けられてしまっている。せっかく友達になっても、小学校に行くとくばらになっちゃってかわいそう。その辺をもう少し考えてくれるといいんだけど。小学校に行けば友達もできるしうけど。親同士も仲良くなって、一緒に行動するようになっているので、夏の雲公園で遊んでいる友達のお母さんから教えてもらい、近くの集会所でやっているプレ幼稚園に週に1回、1時間半行っている。また、新しくできた「児童クラブ」で同じ年の子供を持つお母さんとサークルを始めた。持ち回りで担当して、子供を遊ばせたり体操したり、紙芝居したり。今年に入ってから始まり、月に1回。友達で友達を呼んでという感じで光が丘全体から20人くらい集まる。

「区民センター」でやる英語教室に行っている。週に1回、宣教師さんが教えてくれる。公園で知り合った小学生の子供がいる友達に教えてもらった。子供に手がからなくなったら何か習い事を始めてみたい。できればテニス、書道、スポーツクラブ。

〔近隣交際〕

前住地（東大泉）から付き合いが続いているのは、子供を通じて公園などで知り合った人。今でも行き来したり、電話したりしている。同じ住様に住む人では、年賀状のやりとりくらいは付き合いの人が5人ほどいる。

団地内では子供をきっかけに付き合いが始まった。夏の雲公園で遊んでいる友達のお母さんから教えてもらい、近くの集会所でやっているプレ幼稚園に週に1回行くようになった。また、新しくできた「児童クラブ」で同じ年の子供を持つお母さんとサークルを始めた。持ち回りで担当して、子供を遊ばせたり体操したり。紙芝居したり。今年に入ってから始まり、月に1回。友達で友達を呼んでという感じで光が丘全体から20人くらい集まる。「区民センター」でやる英語教室も公園で知り合った小学生の子供がいる友達に教えてもらった。同じ住棟で挨拶をする3人は生協仲間。立ち話をする人は、2階に住んでいる同じ年の子供がいる人。団地外の人では高松の人が多い。光が丘のすぐ南側に住んでいて、普段遊んでいる春の風公園に遊びに来る。

[illegible]

〔生活施設の利用〕

「耳鼻科」、「皮膚科」どちらも子供が行っている病院。耳鼻科は少ないので一番近くに行きやすいところを選んでいる。小児科も行くところが決まっている。浜野小児科がいいということで行っている。

「光が丘公園」は休みの日に家族で弁当を持って行き、3、4時間過ごす。中央の芝生の広場で遊ぶことが多い。フィールドアスレチックの方は行くことがない。子供は友達と遊びに行ったりしている。「夏の雲公園」は平日でも土日でも子供達を連れていく。子供だけで行く時はアスレチックの辺りでよく遊んでいる。

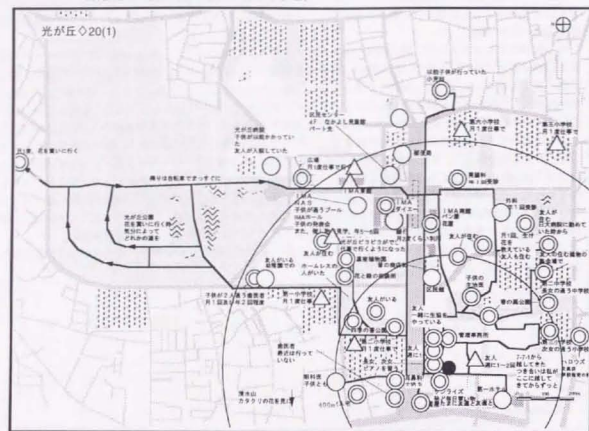
[近隣交際]

前住地(渋谷区初台)では仕事をしていたので、特に地域のサークルなどの活動には参加していなかった。仕事を辞めたのはこちらに来て、子供ができてから。兄弟が隣に住んでいたが、それ以外はほとんど付き合いのある人はいなかった。

同じ校舎内での付き合い。同じ階層やエレベーターを共用する人などとは、元々6階だが、エレベーターの止まる階が4階と7階だけだ。同じ階層の人の行き来がごく不便。小さい子供は親や親類としか来ない。公園で声をかけると、同じ校舎で小さい子供を連れて来ているお母さんと挨拶してきて知り合う。生協の団体に参加し、購われた方は子供が小さいといふところもあるで、うちに物品を持ってきたりもするでメンバーで居る。もう一つは自分と子供が、団地内の人とは長が通っていたりといふと子供園の人ほとんどで、近くから来て居る。団地内の人とは、幼稚園に連れていったり子供園で暮らしたりする。稚舎は長は、ハイハイする。長女は幼児教室に、まま水泳大会と通っている。幼児教室の「へーちまへ」[ちんちんとどろむ]は「IMA」のマクドナルドで英語を話しているうちに、友達もこれから行始めるので一緒に2歳から遊んで始めた。子供が小学校に通い始めてからからの付き合いはほとんどと変わっている。幼稚園の親と遊びがたないで、お母さん同士で飲会をされることはほとんどない。子供も1人遊びに出かけるようになった。幼稚園の友達の子は長男が幼稚園の頃はほとんど遊びに行っていたが、最近ではほとんど行かない。

7 丁目に少し前まで兄が住んでいてよく行っていたが、もう引っ越してしまった。兄が後から光が丘に住むようになったのは、たまたま。

「光が丘-20」は子供を持ち、月に10日パートに出ている主婦（48才）
（居住歴10年、夫婦+末子12歳以下世帯）



図付4-24 「光が丘-20」の場所利用状況

「生活施設の利用」

食料品の買物はほとんど生協で買うが、「IMA」内のダイエーや西武、専門店街も特に決めた店があるわけではないが利用する。「IMA 南館」より「IMA」の方が用事があて行くことが多く買物をすることが多い。「IMA 南館」はサンメーやパンを安く買う。日用品は西武だと6階まで上らなくてはならないのでダイエーに行く。最近、子供達は専門店街のキディランドやRIOという洋服屋に行くようになった。「サンライズ」にはほぼ毎日、牛乳やパンなど足りなくなった物を買に行く。1週間分を生協では頼めないで、「ハロウズ文具」は小、中学校で指定された物を買う。以前は光が丘区民館の所にあった商店街しか買物するところがなかった。またチラシを見て、安い物を買って行く。光が丘に限らず平和台など自転車で行ける範囲なら買に行く。ときどき主人がバイクで買に行く時もある。外食の情報は大体友達に聞き、以前は家族でも外食に行っていたが、長女が病気で食事に関心しなければならぬので今はあまりしない。この前幼稚園時の友達と年に1回の集まりを「第一ホテル」でした。出前をしてくれる店はほとんどないで、ほとんど取らない。この前また主友達から一軒聞いて、メニューをもらった。

病院は本当にいっぱいあるので、区報や光が丘新聞を見て時間など一般的なことは自分で調べ、診療の内容や評判は友達から聞く。以前は日大病院の知り合いの先生や外周道路沿いの小児科に通っていたが、最近学校の検査で長女の病気が見つかったので、学校の主治医の病院に通っている。

長女が「IMA ホール」で年に1回ピアノの発表会を開く。また、友達の発表会もあるので見に行く。「NAS」は次女が週に1度水泳に通っている。子供が小さい時は夏休みなどに、「IMA」内のテアトル西友やダイズニーやドラえもんを見に行っていたが、最近は見に行かなくなった。

「光が丘公園」は成増の花屋に行く途中、自転車や公園の中を見に行く。何の花が咲いているか大体分かる。気分によって違う道を選ぶが、西大通りに近い道が一番多く通る。桜の頃には行くようにしている。子供が小さい時は日曜にお弁当を持って1日ばかりで遊びに行った。帰りは花でいっぱいなのでまっすぐ帰ってくる。「清水山」はカタクリの頃には花を見に行く。「春の風公園」は四季折々の散策を楽しむ。「四季の香公園」は「花と緑の相談所」に行く途中で緑を眺めたり、どんぐりを拾ったりしながら行く。最近、「四季の香公園」でホー

ムレスの人を見てから、夕方になってからはそこを歩かないように子供には言っている。「花と緑の相談所」は自宅の植木の手入れや公園にある知らない樹木について聞く。展示会もよくあるので見に行く。以前、うちで育てていた月下美人の花が余りよく咲かないので、育て方の講習会に行った。小、中学校の10周年のバザーに参加し、「夏の雲公園」で年に4回くらい開かれるリサイクル市は、区報や新聞、掲示板から情報を得て年に1回くらい行く。友達と店を出そうと話していたが、結局出さなかった。最近「光が丘区民館」でもやるようになった。「光が丘区民館」は月に1回「緑あそびの会」があるので、聞きに行ける時に行く。光が丘図書館は月に1回利用している。光が丘郵便局は混んでいて時間がかかるので、高松の郵便局が多い。

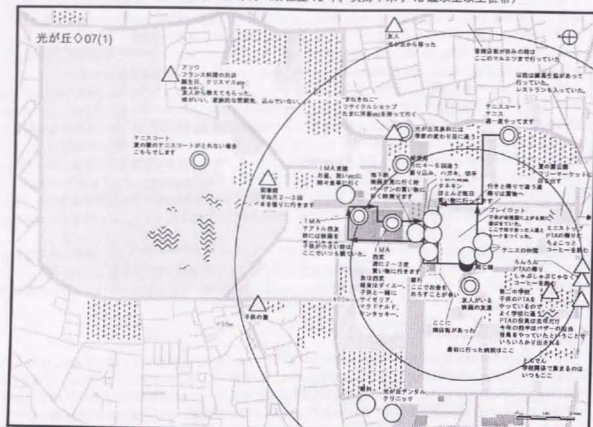
児童館の行事の日や先生の休日に月に10日、8:00~5:15の間、子供の遊びや行事の手伝いのアルバイトをしている。8年前に児童館ができた時、子供がちょうど幼稚園にあがったところだったので手伝ってくれた友達に頼まれてボランティアとして始めた。その友達はゆりの木の児童館に行っていて、その知り合いの先生に頼まれて紹介された。土支田の児童館に行っていたが知り合いだったので、緑日などの行事の時はボランティアだが、幼児の相手の時は講師料をもらっていた。きちんとしたアルバイトとしては今回が初めてで4月から1年間の契約。各小学校に月に1度児童館便りを配布し、「光が丘ヨビヨビ」はオープンするまでは手伝いに、オープンしてからは児童館から連絡のために行くなど生活空間の利用が団地全体に就がりを見せている。「光が丘ヨビヨビ」は3歳までの子供がご母さんと一緒に遊んだり食事ができる施設で、あじさい学童クラブが子供が少なくなってきたので閉鎖したところを使っている。

お花の先生を友達に住む住棟の1階にある集会場を借りて8人のメンバーでやっている。昭和62年に生協活動の一環としてのお花の先生を始めた。現在は生協からは外れてしまったが、そのまま残したいということで同じ場所で行っている。集会場はそこに住む友達にとってもらっている。生け花を教えに行くときに自転車や成増までまとめて買ってくる。

「近隣交際」

付き合ひのあるのは住棟内では同じ階段を使っている人で、10軒あるから挨拶する人は大体40人。そのうち立ち話をするのは大人だけなので20人。住棟内の人はずり用で済んでしまうので家に上がり込むことはない。子供が小さい時は誕生会などあったのだが、違う階段の人はあまり会わない。団地内で暮らす10人は生協や子供をきっかけとした友達。生協と一緒にやっているのも子供の幼稚園からの友達で週に1回友達の家に商品が届き、荷物を分けた後は「お茶飲み」している。また、お花の先生を友達に住む住棟の1階にある集会場を借りて8人のメンバーでやっている。昭和62年に生協活動の一環としてのお花の先生を始めた。現在は生協からは外れてしまったが、そのまま残したいということで同じ場所で行っている。集会場はそこに住む友達にとってもらっている。以前勤めていた日大病院時代の友人が一番最初に光が丘を見に来たとき、案内してくれた人。幼稚園の時の友達とは年に1回、光が丘近辺で集まり食事をする。団地外は児童館に来る人で、行き来する人は昔からの友達でこの近所の人ではない。

【光が丘-07】は子供を持つ専業主婦（39才）。（居住歴10年、夫婦+末子13歳以上以上世帯）



図付4-25 【光が丘-07】の場所利用状況

【生活施設の利用】

買物は「IMA」より、「タネキン」や家の前の「サザン（IMA南館）」の方が近く、安いのでよく利用する。「タネキン」は7:00～23:00の間営業していて、いろいろなものが揃うのでいつも利用している。魚は西武、雑貨はダイエーと大体買うものによって店を使い分けている。雑貨はダイエーで安いものがあるときと主として買って帰るので、毎回は行かない。生協では肉、卵を買う。光が丘周辺のコンビニは特に使わない。テニスの帰りにはお昼のものをなんかが買物をして帰る。タネキンに寄ることが多い。練習が9:00～11:00までで、その後みんなしゃべっているので12:00近くになるのでもちようどお昼になる。「外食」は普段は土日だけで、夏休みだったら昼間出かけることもある。「アソウ」は友人から教えてもらい、味が良く、家族的な雰囲気、で、込んでいくとゆったり楽しめる。お店の方と知り合いになるまでは行っていない。あとは子供と「IMA」内のサイゼリア、マクドナルド、ケンタッキーに行く。ポストに入っているチラシを見ることもある。また学校関係（PTA）はいつも「とんでん」学校関係（PTA）で外食するときはいつも「とんでん」。食事をする時は一人肉が食べられず、和食しかダメな方がいるのでほとんど「ろんろん」や「ミニストップ」で帰りにコーヒを飲むこともある。

「病院」は最初の頃から光が丘に住んでいて、また子供が小さかったこともあり大体の病院は行った。近いということもあり、こちらの話をよく聞いてくれて、薬のこともよく説明してくださる先生と相性が良かった。

「図書館」には本が重たいので自転車で行き、その後買物して帰る。光が丘図書館ができる前は稲荷山の図書館まで行っていた。

子供が小さい時は「IMA」内のNASスポーツクラブで水泳やマハの音楽教室などに通わせて、光が丘周辺で動いていたが、今は子供の手がからなくなりいろいろ光が丘以外にも出かけることができるようになった。

「映画」は平日の昼間に友達と新宿、池袋、有明など大観覧のものを選んで行っている。子供が小さい時はIMA内のテアトル西友で観ていた。テアトル西友は画面が小さいので、同じ値段だったら大きな所だと思って出かけている。映画以外にもバーゲンに出かけることもある。映画の時は映画だけ、バーゲンの時はバーゲンだけ。

「夏の雲公園の祭り」には今年は子供と主人は行った。自分は行っていない。フリーマーケットは行くよりも自分で店を出している方が多い。色々なサークルが主催するようになっていてのでもよく分からないが、前は友達にサークルをやっている3ヶ月に1度ということを知っていたが、そのサークルが石神井の方に移ってしまい、今は区報の情報をしている。「まねねこ」にはフリーマーケットで売るようなものを持って行く。

「子供の塾」を選ぶ基準は、塾側の立場からでなく、子供の立場に立ち、子供の性格に合う教育をしてくれて、子供のことをよく見てくれるところ。2学期から塾に行き始めたが、友人に情報を聞いた上で自分でも見に行き決めた。

「ルーナ」は「夏の雲公園のテニスコート」で行い、そこが取れないときは「光が丘公園のテニスコート」を幹事が取り替えている。「夏の雲公園のテニスコート」は区営で、都営の「光が丘公園のテニスコート」よりぜんぜん安く、近い。今は人数が多いので経験者と初心者2グループに分かれている。一度練習は2時間だが、初心者の私は月曜日の9:00～10:00に、経験者のグループは10:00～11:00。メンバーの入れ替わりはあまりない。

【近隣交際】

子供がまだ幼稚園に行く前に、近くのプレイロットで朝夕遊ばせていたのをきっかけに団地内に親密な付き合いのグループを形成させていく。このグループを中心にして7年前にテニスサークル「ルーナ」を結成。最初はちょうど通り八番街の7、8人で活動していたが、子供が小学校に行くようになり、知り合ったほかの種の人達も参加するようになり現在は20人くらいに輪が広がっている。子供が大きくなってきたので、井戸端会議をして情報を得るというのも大きく、今ではテニス+αの+αの方が多く行っているという感じに活動している。以前はテニスの帰りにみんなで食事に行ったり、主人と一緒に合宿に行ったりと家族間の交流も多かったが、今はみんな仕事をしていたりするので、半年ごとと夜の改選の時に、私達の管理事務所（いちよう通り八番街の管理事務所）でお弁当を頼んでみんなで食事をする程度。普段は忙しい2、3人と映画を観に行ったり、お茶を飲んだりしている。主人は「オムニ」というサークルで別に活動。全てのメンバーが「ルーナ」のメンバーの旦那と言うわけではないが、発起人はその中に一人。初めは「旦那も暇そうにしていて運動不足にないからやってみよう」という感じで、「ルーナ」と一緒に同じコーチの先生を呼んでやっていた。でも、主人達の方がだんだんパワーアップして、うまい人達を入れるようになって、今はかなりうまくなっている。

その他に付き合いのある人は幼稚園や小学校で子供をきっかけに知り合った人達。学校関係（PTA）で外食するときはいつも「とんでん」。食事をする時は一人肉が食べられず、和食しかダメな方がいるのでほとんど和食。ほかにも「ろんろん」や「ミニストップ」で帰りにコーヒを飲むこともある。

お互いの家を行き来する人は少ないが、同じ住棟に住むテニスの仲間はその一人。同じ住棟内では、最初から住んでいた人が半分以上いなくなったと思う。住み始めた頃はみんな挨拶して居住者と部外者の区別が付いたが、知らないうちに新しい人が入り、ここに遊びに来てくれる人と思っていると、住んでいてびっくりすることが多くなった。最近、小さな子供が前より少なくなった。そんなになくなったわけではないが、前は見かけなかった。私達の頃は一番多かったと思う。よく朝も寝まったり、昼からみんなで夏の雲公園に行ったり。夏の方はプレイロットに赤ちゃんがいっぱいだった。大きいお兄ちゃん達と野球をやったり、もめて怪我をさせられいろいろあった。

